
代理者の慟哭【元：ひょうりばーす】

小石 汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

代理者の慟哭【元：ひょうりばーす】

【Nコード】

N29450

【作者名】

小石 汐

【あらすじ】

殺人鬼と呼ばれた男 彼は銃で撃たれ気を失った。

そして目覚めた彼を待ち受けるのは、まだ彼が狂う前の世界
時の戻った世界であった。

その男の結末

路地裏を照らすのは、大通りから差し込む僅かな光。そのせいか、奥に進めば進むほど、光は遮られ、薄暗くなつてゆく。少し先を見通せないほどではないが、路地裏の奥へと続く闇は恐れを抱くには充分なほどに濃い。

その闇に溶け込むようにして、一つの影が路地裏の闇へと足を進めた。しかし、その動きの鈍さは酷く、息遣いも荒い。時折、地に水が滴つたような音を続かせながらも、影は闇の更なる奥へと進んでいった。

影は後ろを振り返つた。追つ手が来ていないことを確認し、一息ついたが、自らが残してきた痕跡が視界に入ると、深いため息をついた。

見つかるのも時間の問題だな。影は苦い笑みを零しながら、壁にもたれかかるうとした。しかし、足に力が入らず、ずるずると壁に背を擦りながら崩れ落ちた。もはや痛みを感じなくなっている腹部に空いた二つの穴に目をやり、再びため息を漏らす。

手で押さえても止まらない血。もはや止血することを諦めてしまったのか、影は傷口から手を離し、そして追つ手を招くようにして残された血の痕跡の先を辿つた。

ちらつく光、懐中電灯のようなものだろうか。影の表情には、もはや諦めの色が濃い。霞む視界、無くなつてゆく痛覚と遠ざかる意識、影は自身の限界が近いことを察していた。出会い頭に腹部に二回の発砲を受け、それでも尚、ここまで逃げてきた。しかし、それも無駄なことだったと諦め、少しずつ近づいてくる光源をじつと見つめていた。

そして、ついに光が影を。否、男を照らす。男は、その光源を持った人物が、どんな顔をしているのか、少し興味があったのだが、霞む視界と向けられた光の眩しさで、視認することができない。

「
」
男の耳に音が届くが、意識を失いかけている男は、それが一体どんな意味を成しているかは分からなかった。ただ、じっと光源を見つめる。

ゆらりと揺れる光源。その瞬間、衝撃と共に鋭い痛みが男の腹部を襲った。一瞬にして、視界の霞が取れ、遠ざかっていた意識を引き戻された。

一体、何があった　と男が視線を落とすと、自らの腹部に突き刺さるのは、女物の靴の爪先。先ほどまで意識が朦朧としていたために、現状の把握に苦しむ男であったが、次の瞬間には理解することができた。

「起きろっ!」

再び腹部に突き刺さる爪先に、男は悶絶しながらも、現状を理解する。蹴られているのだ、と。

それにしても腹部を蹴るか、撃たれている腹部を　そう、男は悪態をつきそうになったが、ぐっと堪えた。何故なら、それを口に出してしまうと、更なる追撃を受けそうな気がしてならなかったからだ。

そんな男の視界に入るのは、もう一度、蹴り足を振りかぶる女の姿。今、答えても仕方が無い　と判断した男は覚悟を決める。みぞおちを的確に捉えた爪先に息苦しさを覚えながらも、男は声を紡ぐために、肺に残った少ない空気を吐いた。

「……蹴る、な」

死ぬだろうが、と続けたい男であったが、今の肺に残っている空気の量では、それだけ紡ぐのが精一杯だった。しかし、それが女の耳に届いたのか、ぴたりと蹴りが止んだ。その代わりに男の耳に凜とした声が届く。

「まったく……逃げ回ってるんじゃないわよ、この弱虫。アンタ探すのに、どれほどの時間を費やしたと思ってるの?」

「……それは、ご苦労なことで」

再び放たれる蹴り。今度は覚悟する間がないほどのクイツクモーションで放たれ、無防備な腹部にめり込む爪先に、男は悶絶する。訪れるは静寂。その間に男は息を吸い、せめて言葉を吐ける程度にコンディションを整えた。

「頼むから撃たれたところを蹴らないでくれないか、死ねるぞ？ まあ俺は死んでも構わないけど」

「死んで楽にさせると思う？」

凜とした女の声が、はっきりと聞こえるぐらいにまで意識が回復していた。否、これを回復と称して良いものか。女の追撃で、男の寿命が凄まじい勢いで短くなっているのは、誰が見ても明らかだ。

そんな女の言葉と行動が一致していないことに、苦く、乾いた笑いを男は漏らす。

「別に生きてもいいけど、無期（懲役）なんかになったら、暇で暇で憤死すると思う。確かなのは、ここで死んでも、死刑になっても、無期でも……何も変わらん、ってことだ」

男の言葉を黙って聞き、見下ろす女の表情は険しい。やや、あって女が口を開いた。

「贖罪を暇、と言うか……とことん下種に成り下がったものだ」

「笑わせてくれる、贖罪って何だ、罪って何だよ？ 所詮、人間の決め事だろうが。道徳も然り。何故人が人の決め事に縛られなければならないんだ？」

「……あなたの常識を疑うわ」

「常識、ねえ……おおよそ成人までに身につけた独断と偏見のことだろう？ どうかの天才が言っていたような気がするぜ、俺も激しく同意だ」

男の軽い口を塞ぐためか、再び女の蹴りが腹部に突き刺さる。全く容赦の無い女に、痛みと恐怖で冷や汗を流しながらも男は笑い続けた。壊れたように、否、壊れているから笑っているのかもしれない。

しかし、その笑みも続かない。突然、がくりと男の頭が落ちた。

その顔は真つ青で血の気を感じさせず、動かなければ死人のようにも見えた。男の腰の辺りには、液体が少しずつ広がりを見せていた。女の持つ懐中電灯に照らされた、それは赤黒い液体。つまり、男の腹部に空いた二つの穴から流れ続けていた血であった。

「おい、死ぬなよ？ 救急車も手配してあるんだ、もう少しぐらい踏ん張れ」

お前が蹴らなきゃ、踏ん張れたかもしれないな そう言ってやりたかったが、男の体力は限界で、言葉を紡ぐ力など捻り出すこともできなかつた。そんなこともお構いなしと女は、反応の無くなつてゆく男の肩を掴み、揺さぶる。

しかし、男が答えることはなかつた。薄く開いた眼からは少しづつ光が失せ、そして音が遠ざかり、先ほどまで男を苛み続けた腹部の傷穴も痛みを感じなくなっていた。光が消え、音が無くなり、全てが無に帰したような、虚無の世界。これこそが死の世界なのかもしれない。それが最後の思考となり、男の意識は完全に途絶えた。

目覚め

男は目の前の光景にただ眉を顰めることしかできなかった。そして頭を振ることなく、目だけで素早く周囲を確認する。部屋　それも学校の教室のようなところで彼は目覚めた。辺りは少年少女の楽しい喧騒で包まれている。まだ幼さを少しばかり残した風貌は、中高生を思わせるものであった。

あまりにも突拍子も無い変化を遂げた世界に数々の疑問が湧いてくる。男はそれらを一度静め、大きく息を吐いた。

(冷静に、だ)

自身に言い聞かせて、男はゆっくりと席を立った。

時は少しばかり遡る。男の意識が戻ったとき、世界の大半は闇に覆われ、それを切り裂くようにして一筋の光が差し込んでいた。

ここは天国か地獄か、それとも病院か　男は考えられる候補を挙げてみたが、どれも違和感を覚える。

まずは天国。男の過去を振り返ると、それはあり得ない、と即座に否定する。

そして地獄。これが一番あり得そうだと男も考えた。ならば、この差し込んでくる一筋の光は何なのだろうか。これは男の偏見だが、地獄と言えば赤と黒くを混ぜ合わせたような色合いが、暗いイメージしかなかった。きっと赤や黒は血の池のイメージからの連想だろう。

ただ、地獄と言う案を否定する要素が他にもあった。彼は周囲を満たす喧騒に違和感を覚えた。もしここが地獄だとすれば、取り巻く喧騒に嬉々とした雰囲気を感じるなどできるだろうか　考えるまでも無い、と男は地獄説を捨てるに至った。

最後に病院。何とか命を取り留めたケースだが、これに関しても男は違和感を抱かざるを得ない状況にあった。

まずは拘束具が無いこと。檻の中で安静にしているのであれば、

話は別だ。しかし、周囲から届く喧騒を考えると、やはり違和感を覚えるのだ。他の檻に入っている囚人どもが楽しそうに会話でもしているのかと考えるはみたが、かなりシニールな光景だったので、男は否定した。

もしかすれば病院で一応、人としての扱いを受けているのかも知れない。そうなると、最後に残った疑問にぶち当たることになる。それは男の体勢だ。椅子に腰掛けた状態で、机のようなものの上半身を預け、腕を枕に顔を伏せているという、高校までよくお世話になった居眠りの姿勢を取っているのだ。

男は答えを導き出せないまま、時が過ぎてゆくことに歯がゆさを覚え始めた頃、このままでは埒が明かない、と伏せていた顔をゆっくりと上げることにした。薄く瞼を開くと、目に差し込んでくる陽光に痛みを感じ、顔をしかめた。一体どれほどの間、眠っていたのだろうか。

ぼやけた視界に映ったのは人影。それも一人や二人ではない。何人も、否、何十人もの人。

(一体、何がどうなっている?)

男の眼前に広がる光景は、頭を抱えてしまいそうになるほど理解に苦しむものであった。

無闇に動くのも危険と判断した男は、そのまま周囲の観察を続ける。学ランを着ていることから、季節は秋から春にかけてだと言う事が分かる。男が撃たれたのは、地球の温暖化を本気で心配しなければならぬのではないか、と思えるほどの暑さを誇る真夏の蒸し暑い夜だったので、それなりの時間が経っていることが分かる。

そこで腹部の傷を思い出して、男は視線を落とすと絶句した。男の視界に入ったのは、学ランに身を包んだ自らの姿。何のイジメだと叫びそうになったのを、男はぐつと堪えて、冷静に、と自身に何度も言い聞かせた。

男は、自身に向けて銃を構える女の姿を思い出した。あの時、冷静な判断を下せていれば、二発の弾が男を捉えることはなかっただ

ろう。せめて一発は回避できたはずだ、今までそうやって致命傷を避け、生き延びてきた実績から、男は確信している。

しかし、あの瞬間、女と対峙した男は、その場に立ち尽くしてしまった。そして棒立ちの男の腹部に的確に二発の弾丸が撃ち込まれたのであった。だが、今の男の腹部に痛みはない。傷が完治してしまっほどの長い期間、眠っていたのだろうか。男は色々考えを巡らす、現状の理解は全く進まなかった。

何故、こんなところに。何故、こんな格好で。拘束具も無く、放置されているのか。こんなことを考えた人は性格が悪すぎる。そう内心で悪態をつきながらも、男は観察を続ける。危険人物と一緒の部屋で普通に振舞える、この子供たちが普通ではないのかもしれない。そう考えて、男は一人ひとりを真剣に観察してゆく。

しかし、それは無いだろう、と男はため息をついた。

必要最低限の筋肉ですら搭載していない線の細すぎる少女や、その逆に無駄な肉を搭載した少年が多い。中には筋肉質な少年もいるが、修羅場をくぐってきたような独特の雰囲気を感じることはできない。全体を見回して、危険が少ないと男は判断した。

そして席を立ったのであった。遠くからの狙撃に関しては、どう足掻いても対処はできない。そう諦めての行動であった。

(……………ん?)

立ち上がった男を襲うのは、凄まじい違和感。それに苛まれ、体を硬直させる。何かが違う。そうは思っても、男はそれが何なのかは分からなかった。

そして男が立ち上がった後も、周囲の反応は驚くほど薄い。まさかと男は思う。この場にいる少年少女たちは誰一人、男の存在を知らされていないのだろうか。

違和感と同時に、別の感覚が男を襲っていた。既視感のような、何とも言えない感覚が沸いてきたことに驚きを覚えつつも、立ち尽くしているのも変だと思い、男は教室と呼ぶのが相応しい部屋を出たのであった。

やはり、どこかの学校だ　この光景を目にして、それ以外の答えが見つからなかった。廊下を歩き通う少年少女は、制服に身を包み、楽しそうに会話をしている。

ふと、思い出したのは女との最後の会話。

「……あなたの常識を疑うわ」と女は男に言った。まさか、と思うが、常識の無い男に一般的な常識を身に付けさせるべく、制服まで用意して学校に放り込んだとも言うのだろうか。もし、そうなのであれば、その愚かさは酷いものだ、と言わざるを得ない。男が再び屍の山を築くことを考慮していないのだから。

この状態なら逃げることも可能なのかもしれない　そう考えつつも、外に出た途端、狙撃が頭を貫く光景が思い浮かび、男は冷や汗を流した。軽率な行動は、即死に繋がる。

別に死んでもいいとは思っていたが、自ら進んで死のう、とは思えないのであった。

何はともあれ、現状の把握が必要だ　色々な考えを巡らせながら、廊下をぼんやりと歩いていた男。一瞬、警戒が緩んでしまったことを認めざるを得なかった。突然、男の腹部を襲う鈍痛に、視線を落とすと、腹部に突き刺さるは爪先、ではなく拳。蹴りよりは幾分か威力が低く、悶絶するほどではなかったが、呼吸を遮るには充分であった。

(しまった……襲撃!?)

男は襲撃者から距離を取ろうと地を蹴るが、思うように体がついてこず、無様にも追撃の二発目をも腹部に貫く。低く唸るような声が、衝撃によって男の口から漏れる。

追撃の二発目を打ち込んで尚、襲撃者は再び右の拳を振りかぶる。しかし三発目は喰らうまい、と男は左手で受け流して、その隙に距離を取る。すぐに距離を詰めてくる気配は無いことを確認して、男は肺一杯まで空気を貪り食った。

そんな男を見つめたまま、にやりと笑う襲撃者。それを見た男を襲うのは既視感。

既視感？ いや違う　男は否定しながらも、まさかと息を呑む。男は、目の前の襲撃者に見覚えがあったのだ。

「……上村？」

男の呼びかけに、表情を険しくさせる少年の名は上村 祐介。何が気に障らなかつたのか、上村は再び拳を振りかぶった。しかし、不意打ちで無い限り、男が打たれるわけもなく、数歩後ずさるだけで、上村の拳は男の鼻先を掠めただけであつた。

おかしい　と男の顔も険しくなる。長い間、眠っていて体が鈍っているのだろうか、完全に避けたつもりであつた男は、掠めた鼻先をさすつた。

「おい、南雲。いつから俺を呼び捨てにしていると言つたあ？」

甘いマスクを盛大に歪ませて、上村は無警戒でずかずかと南雲と呼ばれた男に　南雲　冬夜に歩み寄る。

冬夜は、思考が追いつかなかつた。何故、上村がここにいるのかも、そして、この場所についても更なる疑問が湧いてきた。既視感と言つたが、それではなかつたことに、冬夜は気づく。

上村の登場で、これは既視感ではなく、これは実際に経験したことだ、と冬夜は確信を持てた。

しかし、何故このような状態に　と言つ疑問は残っていた。しかし冷静に考える間も無く、上村の拳が振り下ろされる。確かに冬夜は中学、高校時代と上村に目を付けられ、随分と苛められた記憶があるが、その現場に再び遭遇することに関しては理解ができない。一定の距離感を保ちながら、上村の拳を避け、受け流し、身を守りながら思考を巡らせる。

周囲の者は、これをふざげ合っていると思つているのか、それとも厄介なことに関わりたくないのか、傍観を決め込んでいる。

「くそつ、ちよろちよろ逃げ回りやがつて……」

上村の拳の動きが止まり、やっと諦めたかと安堵の息を吐いた瞬間、横腹に衝撃が走る。みしりと肋骨が軋む音を聞きながら、冬夜は肺の中の空気をすべて吐いてしまった。

一番最初に思い浮かんだ夢という線は、この痛みによって消えた。ならば一体、何なんだ。と冬夜の中で苛立ちがつのつてゆく。地に膝をついた冬夜を、様を見ると言わんばかりに見下ろす上村。過去に苛められていた恨みも相まって、冬夜を黒い感情が満たしてゆく。ぎり、と噛み締めた奥歯が鳴るほど、冬夜の体には力が入っていた。

何か言おうと上村が口を開いた、そのタイミングを見計らって、冬夜は跳ね起き、間合いを詰める。そして振りかぶることなく突き出した右の拳が、中途半端に開いた上村の顎を打ち抜いた。体重の乗った、その一撃で上村は沈む。意識を刈るほどではなかったが、ダウンさせるには十分な威力だったようだ。

口を切ったのか、上村の顔から赤い液体が滴る。あんな無防備で弛緩した顎を打ち抜かれれば、当然のことだ。冬夜は、蹲ったままの上村を冷たく見下ろしていた。そして己の行った行為に何の躊躇いも、後悔もないと言わんばかりに、上村に背を向け、歩き出した。しばらくして冬夜がたどり着いたのは、トイレであった。特に用があつたわけではないが、道中で用事が出来てしまった。水道水に晒す右手からは、鈍い痛みが続いている。痛覚により夢という線は消えてしまった。と言うよりも、夢と言うには現実味のありすぎる、この世界に対して、冬夜は疑問を抱いていた。

冷やして痛みの引いた右手をハンカチでふき取っている最中に、ふと視界に入ったのは小さな窓。そこから見えるのは、テニスコートやバスケットコートなどがある広い運動場、その奥にはプールがあり、冬夜は自身の通っていた高校を思い出す。大抵の学校が掲げつつも、成すことは難しい、文武両道。それを完全に成しているとは言いがたいが、どちらも高いレベルで両立させている高校であった。大学進学率も申し分なく、推薦を貰えれば、大抵が受かるといふ噂まであつたほどだ。

ふと視線を下に向けると、爛漫と咲き誇った桜。これが何部咲きなのかは分からない冬夜であったが、少なくとも季節は春と言つて

よいと推測する。微かに漂ってくる桜の香り、冬の残滓を感じさせる冷たい風、そして痛覚。これらを感じるのに夢という線は、あまりにも問題があった。

そんなことはあるまい。いくらなんでもそんな現実離れた話があるものか　とある仮説が冬夜の頭を過ぎったが、即座にそれを否定する。

(時が巻き戻ったなんて……馬鹿馬鹿しい)

そうは思いつつも、最初に席を立ったときの違和感のことを思い出すと、どうしても現実味を帯びてきてしまう。冬夜も鏡で自身の姿を確認してから気づいたのだが、制服を身にまとった、その姿は以前の面影がなく、ただの高校生にしか見えなかった。つまり、冬夜が今、過ごしている時間は過去であることには間違いないかった。

しかし、何故こんなことになったのか、分からないまま時が過ぎてゆく。窓の棧に肘を置き、頬杖をつきながら、考え込んだ。夢と仮定するのが、一番あり得る。しかし冬夜の勘は、それを否定する。きっと痛覚や嗅覚が訴えてくる現実感を無視できないのだろう。

不意にスピーカーから流れてきたのは、始業を示す鐘の音。仕方がない、と呟いた冬夜はため息をつきながら、教室へと向かった。結局、答えは出なかった。しかし、これが夢である場合と現実である場合、どちらにでも対応できるよう、今後の行動は慎重に行うべきだ、と肝に銘じながら。

ほんの少し前まで、あれほど騒がしかった廊下には、誰一人いなかった。当然と言えば当然、既に始業を報せるチャイムは鳴っているのだから、大抵の生徒は教室に戻っているのだろう。教室から漏れてくるのは教師の声。重要な話をしているのか、それ以外の声が聞こえることは無かった。

まもなくして冬夜は目当ての教室に着く。やはり、ここも中から教師の声が聞こえてくる。少し憂鬱な気分になったのを隠すことなく、ため息をつきながら、冬夜は扉を開いた。

「遅れて、すみません」

固まる空気。先生とクラスメイトの視線が一斉に向けられても、冬夜は怯むこともなく、緩慢な動きで席へと向かった。

「何をしていた」

先ほどまでガイダンスを続けていた教師が、険しい表情で問う。

「すみません。お腹が痛くて、トイレ行ってきました」

「……そうか。以後、気をつける。もう中学生じゃないんだからな」
何を気をつけるんだ　と問う代わりに「はい」と返事をして、冬夜は席へと向かう。無用な問答をして、高校入学早々に目をつけられるのも良くないと判断したからだ。

春という季節。クラスメイトの顔ぶれ。そして今、目にした担任の教師と、その言動。それらの情報から時が、高校一年で入学したの頃であることを割り出していた。

しかし、それだけでは情報が少なすぎた。

冬夜の席は、窓際が一番後ろにある。特等席と言っても過言ではない環境なのだが、分からないことが多すぎる現状では、それですら素直に喜ぶことができなかった。

ともかく、席に着き、辺りを見回すと、前方にぽつんと一箇所だけ空席があった。確か、あそこは上村の席だったか。しかし、そんなことは、どうでもよかった。

冬夜は頬杖をつきながら、窓の外を眺めた。これ以上、現状について考えても無駄な気がする　何となく直感で、そう思った冬夜は、考えることを止め、ぼんやりと外を眺めた。

風に吹かれ、宙を舞う桜の花びらが、中庭にある池に着水し、小さく波紋を立てる。その波紋同士が混ざり合い、池に不思議な波を生んでいた。

何と平和な光景だろうか　ほんの少し前まで追われていた生活とはギャップが酷く、平和すぎる世界に、冬夜はそつとため息をついた。

帰宅

学校から一步、外に出れば、広大な田園風景と青い空が視界の大半を占める。田と田の間に伸びるアスファルトで舗装された、学校までの道だけが、のどかな風景の中で人工の色彩を放っている。

その道をゆつくりとペダルを踏み、自転車を進める冬夜の頭は一つの疑問を処理するのに、精一杯であった。何故こうなったと呟きながら、緩い上り坂を立ち漕ぎで加速してゆく。体重を落とし込んでやるだけの、その動作は流れるように行われ、自転車は一定の速度で坂を上ってゆく。これが厳しい勾配の上り坂であれば、こっ楽に上ることもできない。

しかし、そんなことは、どうでもよかった。特に意識せず、上りに差し掛かった時に冬夜の体は自然と動いていたからだ。

夢、または走馬灯。時間が巻き戻った、もしくは自身が過去に飛んでしまった。前者には現実味がある話だが、冬夜が今、感じている現実味が、それを否定する。そして後者は考え自体に現実味を感じることはできないが、感じる現実味が、その可能性を示してしまふ。

どちらかを決定付けるような証拠もなく、いくら思考に時間を割いても答えは出なかった。

ならば、どちらでも問題の無いように生きるしかあるまい。少し面倒なことになったな、と冬夜は渋い表情でため息をつく。

十分ほど自転車を漕ぎ続けて、やっと田園風景を抜けたが、冬夜の家までの道のりはまだまだ長い。やっと市街地に入ったが、ここから後三十分ほど漕いで、やっと家に着く。それを思うと、少しばかり憂鬱な気分になる冬夜であったが、これを機に良い自転車の購入を考えてもよいのかもしれない、なんて考えていた。

以前の逃亡生活では車の免許を持っていなかったために、主に自転車を活用していた。その時に効率よく、速く自転車を漕げないも

のか、と書店で専門誌をめくった覚えがあった。そのお陰で自転車とは体力と筋力はもちろんだが、自転車のサイズやサドルのポジション、そしてフォームなどの技術的な要素も重要であることを理解していた。

その他にも警察と遭遇した時に、逃げれる確立を高めるために戦闘技術として格闘技の本にも目を通したり、逃亡生活中に色々な知識を得ることができたことは、良かったことだと冬夜は考えている。どれもこれも、良いベクトルに向かった場合の話ではあるが。自転車をしばらく漕ぎ続け、遠くに見覚えのある一軒家を捉える。随分と久しぶりの帰還に、何とも言えない感情に満たされた冬夜。それと同時に湧いてきた感情が、扉に伸ばす手に躊躇いをもたらした。

後ろめたく、そして気まずい 家族の側からすれば、朝に家を出て、夕方に学校から帰ってきただけだ。なのに冬夜は扉を開くのを躊躇ってしまった。

(逃亡生活中に一度も帰ることが出来なかった 否、一度も帰ろうとしなかった俺が、ここに帰ってくる資格などあるのだろうか……)

扉に伸ばしていた手が、力なく落ちる。

しかし、俯いたまま玄関の前で立ち尽くしているのも目立つと考え、冬夜は勇気を総動員して、扉を引いた。

「あら、早かったわね？ おかえりなさい」

扉の音に反応したのか、奥からパタパタと足音を立てて、母が姿を現す。最後に見た時よりも随分と若く感じる。五年後は白髪が混じり、今よりも深く皺が刻まれ、疲れた姿が印象的だった母 己のかけた心労のせいだと冬夜は理解している。

そう思うと、冬夜は少し胸が痛んだ。それと同時に、まだ人間らしい思考ができることが少し意外だった。

散々、人を殺してきた自分に、もう人間らしい感情など無いそう考えていたのだ。なのに、母の「おかえりなさい」は、冬夜の

心に暖かい何かをもたらした。

「ただいま」と一拍ほど空いて、母に答える冬夜の顔は苦く、そして嬉しそうな笑みで満たされていた。嬉しさ、そして悲しさ、苦しさ、すべてを混ぜ合わせて、どれとも言えない感情が表情に現れていた。しかし、そんな幸せな時は長くは続かない。次の瞬間に母の表情は険しいものへと変貌していた。

「あなた……学校から連絡あったわよ。上村くん殴ったらしいじゃないの」

あ、と間の抜けた声を発し、冬夜は頭を抱えそうになった。夢でも現実でも支障の無いように、と決めたばかりだったのに。そのことについては、すっかり忘れていた。

後悔しても仕方ない、と冬夜は切り替えて、母の言葉に頷く。

「ああ、日ごろの鬱憤を晴らした」

そうは言ったものの冬夜は、中学の頃から上村に苛められていたことを、母に伝えていない。それを知らない母は、鬱憤と言われても首を傾げるどころか、冷たい視線で冬夜を射抜く。

上村の母と冬夜の母は、それなりに付き合いがあるらしく、よく一緒にお茶を飲みに行ったりしている。それとは逆に、息子同士の仲は非常に悪いのだが、それをお互いの親は知らないまま、中学、高校と過ごしたのであった。

「何、言ってるのよ。明日、ちゃんと謝りなさい」

言い訳は聞きません、とびしゃりと母は冬夜に言った。反抗しても面倒くさくなるだけだ、と諦めた冬夜は「分かった」と返事をして、そのまま部屋へと向かった。

久々の再会で胸にこみ上げる熱いものがあつた。しかし、冬夜と母は、そこまで仲が良いとは言えなかつた。と言っても、一方的に冬夜が殻に閉じこもっていたせいなのだが。冬夜は、母とだけではなく、父とも、そして他の友人とも距離を置いていた。人と接するのは面倒くさい。そう考えていたからだった。

階段を上り、一番奥にある木の扉。そこが冬夜の部屋だった。そ

こも何年振りの帰還だろうか　そう思うと感慨深いものもあつた。しかし、冬夜の行く手を、とある人物が阻んだ。肩ほどまで伸びた髪を揺らしながら現れた彼女は、整った顔立ちを険しく歪めながら冬夜を睨みつけていた。

「聞いたわよ、馬鹿兄。上村先輩を殴つたんですつてね？」

冬夜に冷たい視線と殺気のこもった声を向けるのは、南雲　夏樹
冬夜の妹であつた。冬夜と夏樹は年は一つしか離れていない、年子である。高校の三年間で背の伸びた冬夜は、今の夏樹と身長が同じぐらいだ。なので、その昔は夏樹に凄まじると、冬夜は怯んでしまうことが多かった。しかし、今の冬夜が夏樹を恐れることはなかった。逃亡生活の間に随分と肝が太くなったものだ　と苦い笑みが漏れる。

「……何、笑つてるのよ」

「いや、別に」

冬夜の反応が気に入らないのか、夏樹は顔をわずかに歪ませた。あまり感情を表に出さない夏樹であつたが意思は弱くない。

「ちゃんと謝つてよね」

私が嫌われたら、馬鹿兄のせいだからね、と付け加えられると、冬夜は分かっていたこととは言え、苦い感情が芽生える。夏樹は上村に好意を寄せている。そして上村も同じくして夏樹に好意を寄せている　つまりは両想いの二人。妹と自身を苛めていた男が両想いなんて、認めたくない冬夜であつたが、こればかりはどうしようもない。仕方ない　と冬夜は「分かつた、すまない」と答えて、自室へと向かつた。その背に夏樹の痛い視線を感じながら。

扉を開いて、中を見回すと、冬夜は懐かしい光景に思わずため息をついた。部屋の奥にベッド、その手前に筆笥があり、向かい側には机、その上には漫画やら雑誌やらで埋め尽くされていた。

俺らしい　と一人呟いた冬夜は、鞆をそこらに置き、椅子に腰掛けた。先ほどまでの表情とは一変し、険しい表情で虚空を睨みつけていた。

何故このような事態になったのか　それについては既に考えることを放棄していた冬夜であったが、それよりも彼を不安にさせることがあったのだ。

（武器が……無いんだよな）

逃亡生活中に主に奪ったりして、蓄えていた数々の武器。主に持ち運びに便利なナイフを携帯していたのだが、それらを全て失った現状が不安でたまらなかった。ここまで、出来る限りの冷静な判断を下してきている冬夜は、現状が武器を必要とする環境でないことを理解している。しかし、それでも不安をかき消すことはできなかった。

もしも　と考えてしまうと、やはり武器は重要だ。または、今までの逃亡生活の中で武器が無ければ落ち着けない体質になってしまったのか。思い当たる原因がたくさんありすぎて、冬夜は頭を抱えた。

ふと思いついたように、冬夜は顔を上げて鞆に手を伸ばす。取り出したのは筆箱、その中身を机の上に広げた。高校入試の時に必要なコンパスや定規が机の上に並んでゆく。鉛筆もたくさんあったはずだが、代わりにシャープペンシルが二本、現れた。他にはハサミやボールペン、修正液などが机の上に並べられてゆく。冬夜は、その中でもコンパスとハサミに目を向ける。

コンパス　これは鋭さに特化していて、刺すことに関しては優秀だが、攻撃箇所を選ばなければ致命傷にならないし、刺した後には傷を広げることができない。刺して抜いての繰り返しで戦わなければならぬ。そう考えると、不便であり使い気になれなかった。

しかし、次に目を向けたハサミ　これは使えるかもしれない。冬夜はハサミを机の上に置いたまま、椅子から立ち上がり、押入れを開いた。記憶が正しければ、ここにあるはずだ　まもなくして冬夜は目当ての物を探り当ててる。

「……あった」

思わず漏れた声と笑み。冬夜が押入れから両手で取り出した物、

それは中学校でよく使った、裁縫セットであった。容器を取り出して、中身から目当ての物を取り出す。

冬夜の手に握られていたのは、裁縫で使う裁ちバサミ。主に布の切断に使う、つくりのしつかりとした物であった。ナイフと比べると、やや硬度が足りないが、先ほど筆箱から出てきた安物のハサミと比べれば、武器として十分に扱える物であった。

硬さの代わりに、裁ちバサミは軽くしなる。これなら衝撃を受けた際に、無駄に硬すぎる物よりも折れにくく、そして衝撃緩和としても役立つ。

しばらくは、これで充分か　と思わず笑みが漏れる冬夜は、ズボンのポケットに裁ちバサミを忍ばせ、深く息を吐いた。武器と言えば、少し頼りない感じを否めないが、とりあえず武器を得ることができた冬夜は、安堵の息を吐いたのであった。

「冬夜、夏樹、ご飯できたわよ」

一階から母の声が届く。ふと窓から外を覗けば、日は随分と落ちていた。母に「分かった」と返した冬夜は、そのまま部屋を出て、リビングへ向かう。先にいた夏樹が、相変わらず鋭い視線で冬夜を睨みつけるが、それを無視して席に着いた。

特に会話が無く、食事の時間が過ぎてゆく。受験の年になった夏樹は四六時中、気が張っているようで、迂闊に話し掛けようものならば、噛み付かれそうな鋭い瞳をしていた。その様子を気遣ってか、母は何も言わずに黙々と食事を続ける。冬夜も特に会話を弾ませようと思わないので、それに従い、黙って食事を済ませて、さっさと部屋に戻ろうと考えていた。

「ご馳走様」の一言だけ残して、食器を片付け、リビングを出ようとした冬夜に、夏樹の声がかかった。

「お兄」

まさか呼ばれるとは思ってもみず、内心は驚愕で満ちていたが、それを表に出すことはなかった。これも逃亡生活で身につけたことだ。何があっても装いだけは冷静に、それを続けていれば、心も落

ち着く　そう考えていたからだ。

実際に、驚いたのは一瞬で、次の瞬間には夏樹の次の言葉を冷静に受け止め、返す準備を整えていた。

「上村さん……ちゃんと謝ってよね」

また、それか　とため息が漏れそうになったのを堪える。ここのため息なんぞ漏らしたら、夏樹が怒り出すことが目に見えていたからだ。その代わりに、苦い笑みを浮かべて、冬夜は答えた。

「ああ、分かってるよ」

それだけ告げると、夏樹は用が無くなった、と言わんばかりに冬夜から視線を外し、食事を再開した。それを見て、冬夜も部屋に戻った。

扉を閉め、部屋の中央のスペースに移動した冬夜は、ゆっくりと姿勢を低くした。両手と両足の爪先だけを床につけ、腕立て伏せを開始する。

以前と違い、冬夜の体には必要最低限の筋肉ですら搭載されていない、枯れ枝のような細い肉体であった。武器を得たとは言え、最低限の筋力や体力が無ければ、それを活かすことなど出来はしない。腕立て伏せが目標の回数に到達すると、次は腹筋に移行する。自重で出来るトレーニングの中でも基礎中の基礎、腕立て伏せ、腹筋、背筋、スクワットを繰り返すが、三セット目の腕立て伏せで、冬夜の腕は動かなくなり、そのまま地に伏せた。

情けない　と表情を苦く歪めたまま、腹筋に移行するが、それも途中で上半身が上がらなくなってくる。そこで腹筋も切り上げて、今度は背筋に移行した。背筋とスクワットは、普段から使う筋肉なので、それなりに続く。動かなくなりつつある腕と腹筋も、四セット目では出来る限り続け、力を微塵も残さないように心がけた。

本当は食事前に筋トレをしたかった冬夜であったが、武器の調達で四苦八苦していたために、トレーニングに割く時間が無くなってしまった。これからは気をつけよう、と自身に言い聞かせる冬夜は震える四肢に満足感を抱いていた。

これから、ゆっくりと鍛えればいい 平和な高校生活なのだから。

もちろん、これが夢である場合のことでも忘れてはいない。どちらに転んでも問題の無いように、と冬夜は常に考えている。しかし、全身を襲う疲労感に流されて、思考が停止する。ゆっくりと目を瞑ると、そのまま意識が闇に吞まれていった。

視線

「……お兄、何してるの」

呼びかけの声で覚醒し、薄っすらと目を開いた冬夜の瞳に映ったのは、夏樹の引きつった顔であった。

ふと視線を横に移すと、窓から差し込む日差しが目に染みる。

「あれ、何してたんだろうな」

問われた冬夜自身も、何故このような状態に陥っているのか、理解に苦しんだ。

床で横になつたまま、夏樹に見下ろされ、おまけに全身が痛い。起き上がるうと体を動かすと、間接が小気味良い音を立てた。だから、と言って全身を苛む痛みと疲労感は拭えないどころか、起き上がることで、より一層その重さを主張し始めた。

少しずつ蘇ってくる昨日の記憶。冬夜は夢オチではなかったのか、と嬉しいような、悲しいような感情の入り混じったため息を漏らし、頭をかいた。

「ご飯、出来たから」

そんな冬夜を、冷たく見下ろした状態で固まっていた夏樹も、無駄な時間だと判断したのか、簡潔に用件だけを告げて、部屋から姿を消した。

少し痛む筋肉を伸ばして、冬夜は立ち上がった。どうやら昨日はトレーニングの途中、もしくはは終えてから、そのまま床で眠ってしまつたようで、疲労感が倍ほど増しているように感じる。だが、のんびりしていると朝の時間は、あつという間に過ぎてゆく。時計に目をやると、もう余裕のある時間ではなかったので、ゆっくりとりピングに向かった。

「おはよう」

冬夜を迎えたのは、朝の支度で忙しそうに走り回る母の笑顔。冬夜とは階段ですれ違い、洗濯物を抱えて、二階へと駆け上がった

いった。

夏樹はと言うと、リビングに下りてきた冬夜に目もくれず、黙々と食事を進めている。それを見て、下手に触れると自らの立場を悪くすると考え、冬夜も黙って席に着き、食事を口に運んだ。

朝食は目玉焼きに、ハム、そしてご飯とお味噌汁と簡素な物が並んでいる。しかし、昨日と同様、久しぶりのまともな食事に頬が緩み、目頭が熱くなってきた。

逃亡生活中は略奪しなければ、お金も手に入らないし、安心して眠ることのできる場所もなかった。体力が限界に近づけば、一人暮らしの男を殺し、そこでしばらく体を休めた。そこで、ついでに現金を奪い、怪しまれないうちに退散、を繰り返していた。

ふと視線を上げると、黙々と食事を進める夏樹。既に制服に身を包み、肩ほどまで伸びた髪も綺麗に梳かれています。朝の支度もほとんど済んでいるのか、のんびりと箸を進めている。

冬夜も去年まで通っていたはずの中学校の制服、それに身を包んだ彼女を見て、少し懐古の情が湧いてきた。

「何？」

冬夜の視線に気づいた夏樹は、あからさまに嫌そうな表情で彼を睨みつけた。

そんなに嫌そうな顔をしなくても　　と思いつつも冬夜は平静を装い、答えた。

「いや、その制服、懐かしいな、って」

それを聞いて、夏樹はより一層、表情を歪める。そんな彼女を見て、変なことを言っただろうか、と冬夜は首を傾げることしか出来ない。

「……そういう趣味？」

「一体、どいうい趣味を想像したのか気になって仕方がない。しかし、とりあえず悪意を感じるから、否定しておこう」

「長々と鬱陶しい。てか、馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ」

そう言って、夏樹は心底、呆れたようにため息をつき、そのまま

続けた。

「それにお兄だって、ほんの数ヶ月前まで……てか、今着ている学ランだって、ボタンを高校指定の物に変えただけじゃないの」

冬夜は黙って、夏樹の言葉に頷いた。これ以上、会話を続けて、ボロが出るのを恐れたためであった。

そんな冬夜を、夏樹は馬鹿にした目つきで一瞥し、再び食事に戻った。それを見て、これ以上は追求される恐れもない、と判断した冬夜も、胸を撫で下ろし、食事に戻った。

かちやり、と食器に箸が触れる音と、朝のニュースを伝えるアナウンサーの声だけがリビングに響く。時折、二階から物音が響いてくるのは、母が洗濯物を干しているのである。

無言の時間に慣れている冬夜は、それを気にせずに、せつせと箸を運ぶ。そんな彼を盗み見る夏樹の視線には気づいていたが、あえて無視を決め込んでいた。冬夜を訝しむような、じつとりとした視線であったが、関わりとロクなことにならない、と簡単に想像がついたからだ。

「ねえ、お兄」

このまま何事も無くあってくれ　そう願っていた冬夜。しかし、夏樹の呼びかけによって、虚しくもその願いは打ち碎かれる。ゆっくりと視線を夏樹に戻すと、相変わらず訝しむように冬夜を覗き込んでいた。

「何か、あったの？」

訝しい視線は、自分の変化を見抜かれたためだったか　と冬夜は慄然とした。

しかし、夏樹が最後に「上村さんと」と付け加え、それが彼に少しの余裕をもたらした。つまり夏樹は、冬夜の行動全体が怪しいのではなく、上村を殴ったことに違和感を覚えたのだ。

「いいや、特に何も……しかし、何故そんなことを聞くんだけ？」

やましいことはない、と言わんばかりに、冬夜は直球で返して質問の真意を探る。

今後の生活で気をつけるべきポイントを抑えるべきだと、判断したからだ。夏樹は一体、何から異変を感じ取ったのか。主に上村を殴ったことであるのだろう。しかし、それ以外にも要因があるならば、知っておきたかった。すぐに修繕するつもりはないが、今後の生活に役立ててゆける。

もし、ここで急に修繕をはかったなら、それこそ疑いの対象となる。そんなへまを踏むほど、冬夜は間抜けではなかった。

「うっん、別に」

納得いかない、と言わんばかりに夏樹は、いまだ疑いの視線を緩めようとはしない。

それを聞いた冬夜は軽く頷いて、食事に戻った。もちろん、彼女の視線は、わざと無視をした。

「何か変わったよね」

突然、ぽつりと呟いた夏樹の言葉は、上等なナイフの切っ先のような鋭さをはらんでいて、それを心臓に突きつけられたような心地がして、冬夜の背筋に悪寒が走った。落ち着き始めていた心臓の鼓動が再び速まり、箸を持つ手には嫌な汗がにじみでて、うっかり箸を滑らせるところであった。

「どこが？」

冬夜の質問に、唸りながら必死に答えを探そうとする夏樹。

これは少々、迂闊な質問だったかもしれない。冬夜は言っただけ、後悔した。ここで「そうか？」と答えれば、その変化に無自覚であることを示すことができた。しかし、「どこが？」と聞いてしまえば、何かしら変化に対して自覚がある、ということを示してしまうからだ。

だが、夏樹は質問の真意に迫ることもなく、唸っているだけ。その様子を見て、冬夜は安堵の息を漏らした。

「前みたい、ビクビクしていないと言うか、どっしりと構えて、ちよっと落ち着いたよね」

「……そうか」

それは無駄な経験があるからな　と内心で皮肉を漏らしつつも、冬夜は微笑を作り、応えた。

黙り込んだ二人を再び包んだのは、テレビの発する声と箸の音。先に食事を済ませた夏樹は席を立ち、食器の片付けを済ませて、家を出た。

「ちゃんと謝っておいてよね」と、三度目の念押しも忘れずに。

しかし、夏樹の後姿をゆっくり見送っている余裕がないことを知り、慌てて準備を進めてゆく。寝る前に準備などしていなかったために、昨日持って帰ってきた教科書が鞆の中に詰め込まれたままで、非常に重い。それらを全て取り出して、メモと筆記用具だけを放り込んだ。今日は授業が無く、学校のガイダンスなどで一日が終わるからだ。

階段を駆け下り、玄関に到達すると、母に「気をつけて」との言葉で送られ、冬夜は家を飛び出した。

高校入学の祝いに買ってもらった真新しい自転車に跨り、ペダルを踏む。タイヤに空気がしっかりと入っているために転がりもよく、気持ちよく加速してゆく。一定の速度に到達すると、昨日より少し高めのサドルに腰をかけ、足を回し続けた。

急激な運動により、心拍が速くなり、そして息も苦しくなってくる。しかし、時間に余裕のない冬夜は、顔を歪ませながらも足を回し続けた。こんなに真面目だったろうか、と自問し、苦笑が漏れたが、それでも足を止めることは無かった。

信号待ちで、ようやく地に足をつけ、大きく息を吸った。心臓が頭に移動したのではないかと錯覚を覚えるほど、鼓動がうるさく耳に響く。筋トレの疲労感が残った体は、予想以上に重く、冬夜は運動不足を実感させられた。

去年まで一応、受験生だったのだから当然と言えば当然　しかし、冬夜は過去、勉強をした覚えがない。遊び呆けているようなこともなかったし、ただぼんやりと時が過ぎるのを待っていた印象だけが強かった。

ふと気づけば、信号が青に変わっていた。冬夜は地を蹴り、ゆつくりと進み始めた自転車ペダルを踏み込み、学校への道を急いだ。学校に近づくとつれ信号の数も減り、無彩色の世界が緑の世界へと変わってゆく。春の到来を感じさせるように、萌える緑が視界に優しく映り、その奥には自然に馴染むことのない灰色の学び舎があった。学校の裏門に伸びている舗装されたアスファルトの道に、生徒たちが行列を作って、学校に流れ込んでゆく。

ここまで来れば間に合うだろう。冬夜はサドルに腰を下ろし、荒れた息を整えた。そして生徒の列に加わり、流れに逆らわずに校門へと吸い込まれてゆく。何とか遅刻することもなく、学校にたどり着けた。それぐらいで安堵の息を吐くことはなかった。顔を振ることなく、目だけで辺りを観察しても危険な気配はない。しかし、気を抜くことができなかった。

それは追われていた時の癖なのかもしれない。人の中に混じると自分の姿も隠すことができるが、それ以上に尾行に対して敏感になってしまう。何故なら追う側も人に紛れることができるからだ。

実際、尾行に気づけなければ、そこで逃亡生活が終わってしまうほど致命的なことになりかねない。人の多い場所は隠れる側にとつて諸刃の剣。しかし、そのリスクを考えても、人に混じることのできるメリットは大きかったために、冬夜はよく人ごみを利用した。

当然のように警戒を続けながら、下駄箱を抜け、教室へと向かうまもなく始業だと言うのに、廊下には生徒が多く、楽しそうな喧騒で満たされていた。時折、視線が向けられるのを感じつつも、気にするほどではない、と冬夜は目を伏せ、教室に急いだ。

教室の扉を開くと、向けられる視線がやや冷たい。昨日のこと、上村を殴ったことが知れ渡っているのかもしれない。しかし、気にするほどのことでもない、と冬夜は鞆を机の横に引っ掛けて、席に着いた。しかし、向けられている視線が多く、入学早々、目立つようなことをしてしまったことを後悔する。

これから再び、学校という場所で生活していかなければならない

そう考えると冬夜は、先行きが不安であった。

気まぐれ

大勢の息が混ざり合う静かな教室　そこに声の一つだけ、言葉を紡いでいた。

時は授業中、声の主は教壇に立つ教師。静かに言葉を紡ぎ続け、生徒に向かってガイドダンスを進めてゆく。

しかし、大半の生徒は、それを聞き流し、中には机の下で携帯をいじっている者さえいた。話の内容の大半が、昨日聞いたことと同じであったからだ。教師たちは、それを何度も繰り返し、刷り込もうとしているだけであった。

冬夜も真面目に聞いているわけではなく、窓際の最後部と言う特等席で頬杖をつきながら、ぼんやりと外を眺めていた。

正門を囲むようにして立つ桜の木は爛漫と咲き誇り、時折、吹く風で盛大に花びらを舞い散らす。冬夜は、その光景に見入り、恍惚とした表情で外を眺めていた。

逃亡生活が長く、ゆっくりとした時間を取ることができなかった冬夜も、少しずつ警戒を緩めつつあった。それは彼自身が一度、高校生活を体験していることもあり、これと言って特筆するような事件や事故が無かったからだ。

上村の件は、軽率な行動のせいであまり歴史を変えてしまった。しかし、それぐらいは大したことではなかった。これからどうするべきか　冬夜は相変わらず頬杖をついたまま、思考を巡らせていた。

そこで冬夜は嫌なことを思い出す。

(あー……上村に謝らなければならぬのか)

夏樹の言葉を思い出し、昨日は空いていた席に目を向けた。その席に着いている上村の後姿を捉えると、冬夜は憂鬱に襲われ、自然にため息が漏れてしまった。

面倒くさいけれど、今後のことを考えればやむ無し。休み時間に

でも謝ってしまおう　　そう考えて、冬夜は再び視線を窓の外に移した。

(平和、だなあ……)

その一方、平和だと呟きながらも、この平和を壊すのは自分だ、と言つ自覚が冬夜にはあつた。

自分の抱える殺人衝動を、どこまで抑えることができるか　現状を差し障り無く生きてゆくためには、この問題をどうにかしなければならなかつた。

ほんの少し前まで自由奔放に生き、時には必要に駆られ、また時には衝動の赴くままに人を殺してきた冬夜。しかし、それを抑えようと試みたことをは一切無く、考えもしなかつた。

しかし、現状は違う。悪鬼の如き所業を繰り返してきた冬夜にも、やり直すチャンスが与えられたのだから出来る限りは抑えてみよう。それが出来なければ、前の歴史より少しばかり人が死ぬ時期が早くなるだけだ　　前向きと言えば、少しばかり疑問を覚えてしまうような軽さで、冬夜は割り切ってしまった。

しかし、殺意を抑えることが初めての試みであるために不安な要素が多い。こうなつてくると何に対しても面倒くさがる冬夜が、人との接触を極力避ける、との結論に行き着くのは明白なことであつた。人と関わることの無い黒歴史と言つても過言ではない高校生活を、再び送らねばならないと考えると、憂鬱がより一層酷くなつたように冬夜は感じるのであつた。青い春の存在って何なのだろう、と自問しても答えが返ってくることは無く、ただ自嘲の笑みを漏らすだけであつた。

それに、このやり直し案自体が冬夜の気まぐれによつて生まれたものであり、いつ彼の気が変わるか分からない。やり直しが成功するか。もしくは、再びその身を殺人衝動に委ねるか。それは冬夜本人ですら分からないのであつた。

しばらくして、一時間目の終業を報せるチャイムがスピーカーから流れてくる。教師のガイダンスに一切耳を傾けなかつた冬夜は、

チャイムが鳴っても説明を終えていない教師にげんなりとしながら、ため息をついた。

それから五分ほど教師は話を続けたが、生徒たちの冷たい視線に焦ったのか、最後は流す形で説明を終え、教室を去っていった。新任には見えない教師なので単に要領が悪いだけなのだろう。そんな現実逃避を冬夜は試みていた。しかし、逃げたら、それ以上の地獄が待ち受けている現状から逃げ切ろうとは最初から考えていない。

配布物を鞆にしまい、冬夜は席を立った。目的の人物　言わずもがな、上村のところに向かうためだ。当初の予定通り、誠心誠意をこめたような装いで謝って、さつさとその場を退散する心積もりであった。そう考えると休み時間を半分ぐらいまで削ってくれた教師に対して、感謝の念を覚える冬夜であった。

一呼吸し、緊張した面持ちで上村の背後に歩み寄り、冬夜は口を開いた。

「上村……くん」

冬夜の呼びかけに、体をびくりと震わせながら振り返る上村。

今更、くん付けで呼ぶことに内心では言い知れぬ違和感が沸いてきて、爆笑の渦が巻き起こり、意味不明なテンションの高さに到達してしまった冬夜であったが、それを表に出すようなことはなかった。

ただ静かに神妙な顔つきで上村の前に立ち、頭を下げた。

「昨日は殴って、悪かった」

冬夜の低い声が響くと休み時間の楽しい喧騒に包まれていた教室内は、一瞬にして静寂に包まれた。

会心の謝罪だと自画自賛しながら、ゆっくりと顔を上げる。思ったとおり、冬夜の不意打ちに驚愕を隠す間もなかった上村は目を丸くしていた。

「あ、ああ……俺の方こそ悪かった」

あまりにも素直に謝罪を述べる上村。これも冬夜の予想内であった。

教室には、いまだ多くのクラスメイトがいるために、冬夜は背に多数の視線を感じる。もちろん、それは冬夜だけでなく、上村にも注がれている。上村は、この状態で冬夜を殴ったりしたら、自身の立場も悪くしてしまうことを嫌でも理解してしまったのだ。

冬夜は渋い表情を作っただけだが、内心ではほくそ笑み、そのまま席に戻ろうと上村に背を向けた。これで謝って後味が悪く、逃げ出したような雰囲気装えるだろう。

しかし、それを上村が許さなかった。

「なあ……南雲」

上村の呼びかけで進めようとしていた足を止め、ゆっくりと振り返る。その際も面倒くさい、と言う内情を出すことなく振り返った。

上村はどこか落ち着きの無い様子で問うた。

「夏樹は、このこと知ってるのか？」

「知ってる、だから俺も怒られたよ」

どう答えたものか　冬夜は一瞬だけ考えを巡らす。しかし、嘘を用意してないために、下手なことを言っても墓穴を掘るだけだと判断し、正直に答えた。

それを聞いた上村の表情は、明らかに落胆の色が濃くなり、「そうか」と悲しげに俯き、ため息をついた。

正直に言えば、プライドの高い上村がこうなることは分かっていた冬夜は「様を見る」と内心で呟いて、項垂れた上村を静かに見下ろしていた。今までの鬱憤を全てとは言えないが、随分と発散できたような清々しさと満足感に冬夜は包まれていた。

時が経つにつれ、冬夜と上村に向けられる視線も弱まってゆく。

冬夜の謝罪を緊張の面持ちで見つめていたクラスメイトたちも、特に何事もなく終わった謝罪に興味を失ったのか、少しずつ会話が再開され、教室に音が戻りつつあった。

視線が弱まれば、それだけ冬夜にとって不利な状況に流れてゆくかと思いきや、彼は落ち着いたまま、静かに上村を見下ろし続けていた。ここまで落ち込んだ上村なら、危険度は低いと判断していた

からだ。

廊下からも聞こえてくる楽しげな笑い声の残響とは反対に、冬夜と上村の周辺の空気は重く、冷たい。

上村のついた深いため息が、冬夜の耳に届く。少し同情心を抱き、フォローすべきか、とも考えた。しかし、無駄なフォローが気に障り、また激昂されても面倒くさいと考え、このまま去ることを決意した。

「それじゃ」

上村は答えず、そして顔も上げなかった。聞こえてないわけはない。冬夜は、彼に背を向けて、自分の席に戻った。席に着き、後ろから教室を見渡すと、やはり一箇所だけ空気の色が違うように見える。その空気を纏った本人は、微動だにせず、窓から差し込む陽光に明るく照らされながらも、どこか哀愁を漂わせていた。

見なかったことにしよう。あまりにも悲しそうな上村を見ると、冬夜は少しばかりの罪悪感を覚え、顔をしかめ、上村から視線を逸らした。

沸いた疑念が冬夜を苛む。罪悪感から顔をしかめたのではなく、罪悪感を覚えたからこそ、彼は顔をしかめたのであった。自分が罪悪感を抱く。それが、どれほど異質で、滑稽なことか。散々、人を殺してきた冬夜が、こんな小さなことで罪悪感を抱いてしまったことは、当人にとっても意外なことであった。

そんな暗い思考に中断をかけるようにして、二時間目の始業のチャイムが鳴り響いた。

また長く、退屈な時間が始まると思うと、憂鬱になるのが当然。しかし、冬夜は、そんな時間が嫌いではなかった。今まで多忙だった分、ゆっくりと心も体も休めよう。再び教室に姿を現した教師のガイドダンスが始まると、それを子守唄代わりに、冬夜は机に伏せ、瞼を閉じた。

筋トレの後にケアすることもなく、床で眠ってしまったために、全身が重く、疲労感に包まれていた。そこに暖かな春の日差しが優

しく降り注ぎ、心地よさに身を委ねた。

まどろむ意識の中、夢を見た。

それは、冬夜の初めての殺人の光景　異常なほどの興奮と狂気を抱き、そして狂喜した。その奥には横たわった体が、首や腕や胸や腹や、あちらこちらから血を流していた。その顔は上村だった。

冬夜の初めての殺人は、上村だった。ただ、そこに全くと言っていいほどに後悔は無かった。事後、落ち着いてからも後悔することがなかったのだ。むしろ、それで箍が外れてしまったかのように、警察に追われながらも、殺戮を繰り返した。

もう、その頃には狂っていたのかもしれない　そう自嘲しながら冬夜は、殺人の光景を苦い笑みで見つめていた。見る見るうちに上村の顔からは血の気が失せてゆく。傷の深さ、数、失血量から考えると、死は免れないことは明白であった。なのに興奮した冬夜は、更に刃をつきたてた。

(……もういい)

そんな醜悪な自身の姿を、冬夜は気づけば険しい表情で見つめていた。

上村の瞳は生気を失い、顔は苦痛に歪んだまま虚空を睨みつけ、そのまま動かなくなっていた。それなのに、いまだ刺し続ける自身の姿が、とても醜悪なものに見え、思わず目を背け

冬夜は現実に戻ってきたことを実感する。額に滲んだ脂汗のせいで、前髪がびったりと張り付いていて、気持ちが悪かった。

視線を上げると、教壇で無駄な話を続けていた教師の姿が無く、周囲も楽しげな雰囲気に含まれていた。二時間目を丸々、眠っていたことを理解するのに、そう時間は必要としなかった。

椅子にかけたまま、上へと伸びをして眠気を取り払う。この程度の睡眠で目に見えて疲労感が軽減するわけもなく、むしろ夢のせいで冬夜は深い憂鬱を味わっていた。

闇夜に蠢く者

厚い雲に覆われた夜空は、まるで暗幕がかかっているかのように、月明かりも星の輝きも全てを遮っていた。今にも雨が降り出しそうなほどの湿気をはらんだ空気が、闇夜の不気味さを一層に煽っているように思える。

交差点では信号が赤から青へと変わったが、横断歩道を渡る人はいない。時刻は午前一時を回っていた。この辺りはベッドタウンとして知られ、深夜に外出しても、楽しめるような店舗は少ない。だから零時を回れば、町全体が眠ってしまったかのような静寂に包まれる。

信号から少し離れたところで切れかけの蛍光灯が点滅し、不気味に夜道を照らしていた。そこを影が駆け抜けてゆく。それは闇に溶けるような黒い上下に身を包み、一定のペースでアスファルトを蹴つていった。

苦しい　走り続けている冬夜は、顔を苦痛に歪めながらも、足を止めようとしなかった。ここ数週間の筋トレのお陰か、足は動く。しかし、持久力を養うために深夜にランニングを取り込んだところ、肺と心臓がついてこないのであった。心拍は日ごろの倍ほどの速さで全身に血液を流し、肺は精一杯まで酸素を貪り喰おうとするが、それでも追いつかないのであった。

「もう……少しっ……」

ただでさえ苦しい最中、冬夜は小さく零した。それは自身に言い聞かせることによって、体に残った力を全て出し尽くそうとの試みであった。まだ行ける　そう、内心でも言い聞かせながら、冬夜は走り続けた。

いつの間にか肩を大きく上下に揺らしながら息をし、頬を汗が流れた。まもなく五月になると言うのに、いまだに夜の空気は冷たさを含んでいる。まもなく雨が降ることを嫌でも予感させる夜気も、

今の冬夜にとつては、流れる汗を適度に冷やし、心地よさをもたらした。

あの角を曲がれば、家まで一直線　冬夜は残った力を振り絞り、アスファルトをより一層、強く蹴った。しかし、圧倒的な酸素不足に陥った体は、思うように加速せず、一定の速度を保ったまま駆け続けた。肺が精一杯働いても息苦しく、心臓は張り裂けそうなほどの痛みを発している。言葉を吐く余裕も無くなってしまった冬夜は、もう少し、もう少し、何度も心の中で呟きながら目標の地点まで駆け抜けた。

そこで走っていた足を緩め、ゆっくりと歩きながら天を仰ぎ、大きく息を吸った。足を止めたいどころか、そのまま地べたに腰を下ろしてしまいたい衝動を抑え込み、ゆっくりと家までの道のりを歩いてゆく。その間で、既に荒れた息を整えていた冬夜は、深いため息をついた。

いつまで殺人衝動を抑えることができるか　それが冬夜にとつての大きな課題であった。今は、そんな余力を残さないほどの運動量で、鬱憤が溜まらぬように気を遣っているが、このまま続ければ、体力的に余裕ができてくる。そうなると、多大な時間を費やして、更なる運動量で発散させなければならぬ。

別に体力が欲しいわけではないのに、と冬夜は苦い笑みを零しながら、自宅の前まで戻った。家族は既に寝静まっており、周辺の家からも光が漏れてくることはなかった。そのまま帰るかと思いきや、冬夜は自宅に背を向けて、来た道を再び歩み始めた。

幹線道路を猛スピードで駆け抜ける車の音が、遠くから聞こえてくる。しかし、それ以外は物音一つ聞こえなかった。そんな闇夜に溶け込むような姿で、冬夜は歩いてゆく。街灯と信号だけが世界に僅かな光をもたらしていた。しかし、その灯りに安心感を抱くどころか、それすらを呑み込みまんとする今宵の闇は非常に深く、普通の人なら、それに恐れを抱いてもおかしくはなかった。

しかし、冬夜の表情には恐怖の欠片も感じられず、むしろ、僅か

な笑みを浮かべていた。微笑みと呼ぶのは相応しくない、邪悪と言つても過言では無い笑みを浮かべたまま、冬夜は闇の中を歩き続けた。

（これこそが闇……ここが俺の住む世界だ）

歩き続けること十分、冬夜は駅前には伸びる商店街にたどり着いていた。商店街と言つても、この時間に開いている店など無い。道中で見かけたコンビニだけが唯一、営業している店舗であった。

駅前まで来ると、やはり整備が行き届いている。一面を覆う、見た目が華やかなタイルは、雨の日に殺人的な滑り具合を発揮するのだろう、と冬夜は皮肉げに顔を歪めた。よく分からないオブジェなどが立ち並ぶ駅前に、どれほど無駄なお金を費やしたのだろうか、と嘆きを込めた息を吐きながらも、冬夜は商店街の奥に進んだ。

夜、眠る町 確かに遊び場の少ない町ではある。しかし、少ないだけで無いわけではない。逆に考えれば、深夜に遊ぶ人々が集まる場所を限定しやすいのだ。

冬夜は駅を視認できた頃、細い路地へと足を進めた。設備が整い、華やかな表通りとは違い、色とりどりの怪しい光に包まれ、空気が澱んだ路地裏をゆつくりと進んでゆく。近くの店から笑い声が漏れてくるのを、ぼんやりと聞きながら冬夜は首を振らずに、目だけで周囲を観察し始めた。

シャッターを下ろした店舗の前で、少年が数人、座り込んで騒いでいる。見た目は中学生から高校生といった、冬夜とあまり変わらない年齢だと思われる。その奥にも数名の少年少女が楽しそうに会話をしながら、路地の奥へと姿を消していった。時折、聞こえてくる怒声と物音に、妙な安心感を覚えながら、冬夜は夜の町に酔いしれていた。

（ここが……俺の世界）

場違いな柔らかい微笑みを浮かべた冬夜は、顔を伏せたまま更に奥へと進む。時折、向けられる男からの剣呑な視線に震えた。それは恐怖からではなく、期待と高揚から来るものであった。

見知らぬ男が、夜の町に侵入したのだ。撃退しに來い　いつの間にか冬夜の恍惚に浸った笑みは、悪意に染まっていた。その顔を悟られまい、と俯いたまま、危険な香りのする方に向かう。怒声の下へと。

角を折れ、ネオンの光すら届かない細い路地に入り込んだ。薄暗く、辺りにはゴミが散乱し、不衛生な環境であるにも関わらず、冬夜は狂喜に顔を歪めた。この奥から怒声が聞こえてくる。走ってもいないのに心臓の鼓動は速まり、息のペースが短くなるのを感じる。冷静に　と冬夜は自身に言い聞かせ、息を整えると、怒声と喧騒の混じる闇の奥へ誘われるように足を進めた。それにつれ、音に近づいているのが分かる。再び角を折れると、そこには目当ての場があった。

今は人だけが邪魔で見えない。しかし、煽る喧騒と時折、耳に届く音のお陰で、何が起きているのか察することができた。鈍い打撃音、それは人の肉を叩いた時に響く、それに似ていた。やっていゝるな、と表情を緩ませながら、冬夜も人だけに加わった。

「おらっ！」

頬を打つ打撃音が、耳に心地よく響く。人だかりの中央に立つ二人の男は血に濡れながらも、お互い一步も引かずに殴り続けている。それも数分後には一方的な暴力となり、早くも冬夜は興味を失い始めていた。

「所詮は喧嘩……か」

思わず、深いため息をつく冬夜。少しばかりの高揚があったのは否定できない。しかし、彼が求めていたのは、こんな甘いものではなかった。

冬夜が求める場所は、確かにここであった。しかし、それがもたらす高揚は期待外れと言っても過言ではなかった。その落胆は、先ほどの言葉にも込められた通りで、久々の感覚に一瞬は高揚しても、町の喧嘩では物足りなさを否めなかった。

「おい、お前」

もはや興味を失った、と言わんばかりに人だかりに背を向け、去ろうとする冬夜に向けて殺気が放たれる。声も明らかに冬夜に向けられたものであったが、面倒くさいと言わんばかりの表情で、ゆっくりと声の方向へと振り返った。

「今、何て言った？」

振り返った冬夜に、勝者の男が剣呑な目つきを向けていた。

「別に、大したことを言ったつもりはないね」

聞こえていたか、と舌打ちをしながら、冬夜は答えた。明らかに面倒くさい、と言う様子の冬夜であったが、期待していた展開に心が躍った。

「別に大したことじゃないし、もう一度、言おうか？ 所詮は喧嘩か、って言ったんだけど」

明らかかな挑発の言葉に、周囲の空気が一瞬にして変わる。気温が数度、下がったかのように感じられ、観戦していた男たちの目つきも鋭く変化した。

思ったとおり、と冬夜は狂喜に震え上がった。それとは反対に男たちは怒りに震え、今にも飛び掛ってきそうな様子に、冬夜も身構えた。

来る 冬夜が身構えて、まもなく勝者の男が一直線で冬夜の下に駆け付けた。構えられた拳の軌道を早めに見切り、余裕の距離でそれを避ける。予想より遙かな余裕をもってして避けたことから、身体能力は随分と戻っていることを確認しながら、次々と振り出される拳を避け続けてゆく。冬夜は更に、その距離感を少しずつ詰め、頬を掠める一歩手前の緊張感を楽しんだ。

相手の男は構えたところから一直線に目標を打つ、拳闘のようなスタイルで、蹴りを放つことは無かった。冬夜が距離を取って避けていた間は、ストレート系を主軸に攻撃を組み立てていたが、距離を詰め、紙一重で避けるようになってからは、フックやアッパーなども織り交ぜて、多角な攻撃を見せる。それがより一層、冬夜を楽しませた。

しかし、遊びすぎれば、周囲の者に襲われる可能性も否定できない。そうなると手加減ができなくなる。そう考えた冬夜は、そろそろ攻勢に出ることを決意し、目の前を拳が過ぎ去ったところで、強く地を蹴った。

打てよ、と言わんばかりに顔を相手に突き出した冬夜は笑んだ。相手もそれに応え、距離を詰められた中、コンパクトなフックを繰り出す。しかし、そのタイミングは冬夜にとって完全に読めていた。顔を突き出すことによって、的とタイミングを絞らせたのであった。それを軽く避け、体を密着させると、案の定と言うべきか、相手は距離を取ろうとする。ボクシングの試合でも見る通り、クリンチなど、あまり距離を詰められると技術に囚われた者は、攻撃手段を取り戻すために、得意とする間合いまで逃げようと試みる。もし、相手が技術に囚われていない本物だった場合、この距離は非常に危険ではあった。しかし、打ち出される拳からは洗練された技術こそ感じられても、本物の野性味を感じることは無かったので、危険は少ないだろう、と冬夜は読んでいた。

ぴたりと密着したまま離れない冬夜に、相手の表情は焦りに満ちてゆく。それとは反対に冬夜は早くも興味を失いつつあった。

(……早く終わらそう)

間合いを詰められ、焦りながらも拳を振り下ろす男のタイミングに合わせて、冬夜は手の付け根で相手の顎を打ち抜き、迎えうつ。絶好のタイミングでカウンターが決まると、その感触から終わったことを確信した。

他の者が動く前に、そして退路を絶たれる前に逃げなければ。それと同時に冬夜は反転し、来た道を疾走する。相手にできないこともない人数であったが、どうしても手加減して戦えない。そうなると、やはりポケットに忍ばせた武器によって、一人ひとりを実実に殺していくしかない。そうなると、本末転倒だ。事件を起こさなために、と考えた行為が全て無駄になってしまふ。ならば、と冬夜は逃げることを選択したのであった。

「ッ！ 待て！！」

路地裏に響く怒声、それらは全て冬夜に向けられたものであった。しかし、それに振り返ることなく、笑みを浮かべたまま彼は、細い路地を駆け抜けた。来た道をそのまま戻っていき、角を折れると、路地が一層狭くなる。そこで彼は足を止めた。

足音が近づいてくる。それを確認すると、冬夜は振り返りざまに後ろ回し蹴りを放った。その蹴り足は、角を折れ、追ってきた男の腹部にめり込んだ。蹴る力と、相手の向かってくる力でカウンタ―が成立したので、男は悶絶しながらも、重力に逆らう力も残っておらず、そのまま地に伏せた。

冬夜は、それを一瞥し、再び逃走を開始した。しばらく走り続け、路地裏を抜けると、風景は一変し、静寂に包まれた眠れる町が冬夜を迎えた。

満足とは言いがたい感覚ではあるが、しばらくは大丈夫だろうと瞳に暗い影をきざした冬夜は、ゆっくりと自宅に向かって、歩を進め始めた。

異常な日常

見上げれば、雲一つ見当たらない、吸い込まれそうになるほどの深い青に染まった空が広がっていた。冬の残滓も出し尽くしてしまつたのか、爽やかで暖かな風が肌を撫でてゆく。

風で揺られた木々のさざめきが、耳に心地よく響く。春、爛漫と咲き誇っていた桜の木々は、花を散らし、緑の葉が現れ、その色の濃さが生命力の強さを物語っているかのように見える。

「現代の五月晴れって、こういうのを言うのかなあ……」

随分と過ごしやすくなった風景の中で、空をぼんやりと見上げていた冬夜は呟いた。五月晴れとは本来、陰暦の五月のことで、梅雨の合間の晴天のことを指す。もちろん、そのことを知った上で彼は呟いていた。

時はゴールデンウィークを明けたばかりの月曜日。長い休暇を終えたクラスメイトたちは一同揃って、久々の授業に対して愚痴を零す。しかし、そこから五月病に派生する前に気持ちを切り替えようと、体育の授業で必死に体を動かし、汗を流していた。そんな光景を、眩しいものを見つめるかのように目を細めながら、「若いつていいなあ」と漏らすのであった。

時折、校庭に響く音が冬夜を現実に取り戻す。彼が立っているのはコートのご真ん中で、ぼんやりとしていれば、いつボールが飛んできて、被弾するか分からない。音が響くたびに、青く澄んだ空から視線を剥がさなければならなくなり、うんざりとしてきたところだった。

自陣のゴール前で、必死になってボールを外に蹴りだそうとしているチームメイトの奮闘など、他人事だと言わんばかりに、冬夜はコートの中央付近で、ぼんやりと空を眺めているのであった。しかし、いくら蹴りだそうとも、ボールは相手の下に渡り、再びゴールを脅かされる。相手チームは小学校からサッカーを続けている上村

を中心に、組織的な動きでボールを回しているのに対し、こちらのチームには統率できるような人物がいなかった。だから冬夜は、最初から勝ち負けなど決まったようなものだ、とため息をつきながら、ただゲームを見守るだけであった。

（ボール、こつち来るなよ）

冬夜は無表情のまま、攻められているゴール前を見つめながら、そう願った。ちらりと得点が記入されているボードに目をやると、四対一で圧倒的に冬夜のチームが負けていた。しかし冬夜は、それを見ても奮起することなく、ため息を漏らすだけであった。

（こんな授業の勝ち負けに何の意味がある……）

そう思った時だった。大きな音を響かせて、ボールが自陣のゴール前から離れてゆく。そのボールが向かう先は、冬夜だった。

あ、と漏らしながらも、飛んできたボールの勢いを殺すように胸で受け、足元に落とす。そして、次のタッチで前を向くと、冬夜は視線を上げた。残っている相手の守備陣は三人、行けないこともない。冬夜はボールを蹴り出し、加速し始めた。

本当はボールに来てほしくなかった。目立つようなことをしたくなかったから。しかし、一度触ってしまったえば、その懐かしい感覚に、どうしても笑みが零れる。駆け出した冬夜の後ろからは、行け、と声が上がった。

それを遮るようにして、上村が声を張り上げた。

「寄せる！ 少しでも遅らせるよ！」

上村が的確な指示を飛ばし、チームメイトを巧みに操る。

早速、一人が冬夜の前に立った。しかし、冬夜は遅らせる間も与えず、一瞬にして、それを抜き去る。素人に冬夜は止められなかった。何故なら、彼もまた上村と同じチームで経験を積んできたチームメイトだったのだ。

二人目が寄せてくると、冬夜はボールを蹴りだした。それは冬夜と相手、どちらが先にボールに触れられるか分からない微妙な距離で、普通ならミスタッチだと思われるだろう。しかし、冬夜は迷い

なく、笑んだままボールに向かって疾走する。一ヶ月の間、休むことなく鍛え上げた体が大地を力強く蹴ると、体がぐんと進み、相手の足がボールに届く前に冬夜の足がボールを掠め取っていった。

重要なのは間合い　間合いさえ合えばフェイントも何も必要なく、ただスピードだけで人は抜き去ってゆける。三人目を前に冬夜は、再びボールを蹴りだした。二人目の時と同じように、どちらが届くか分からない微妙な距離に。やはり先にボールに触れるのは冬夜で、三人目もあっさりと抜き去り、残すはゴールキーパーのみとなった。

「キーパー、出る！」

上村の叫び声に反応し、ゴールキーパーが弾かれたようにして前に出た。

抜くか、それとも打つか　迷いが生じると、それは全身に現れ、冬夜の速度が見る見るうちに落ちた。その間もゴールキーパーはペナルティーエリアを出て、冬夜の下に迫ってくる。

ここまで来れば、入る　ボールが手の使えないキーパーの頭上を越えて、ゴールネットに突き刺さる絵を脳裏に描いた冬夜は、爪先でボールをすくい、そのまま足を振り抜いた。ふわりと宙を流れてゆくボールは、絵の通りの軌道を辿り、ゆつくりとゴールに吸い込まれてゆく。

入った　冬夜がそう確信した時、視界に入ったのは、そのゴールに向かつて走る一つの影。上村であった。現役サッカー部の彼は、何と敵のゴール前から、自陣のゴール前まで駆け戻ってきたのであった。そのまま、ゆつくりとゴールに流れてゆくボールを、上村はギリギリのところまで蹴り出し、冬夜はそれを呆然と見つめていた。

そんな冬夜の様子を見て、してやったり、と言わんばかりに、上村は目を細める。

「読まれてた、のか」

所詮は授業、と割り切っていた冬夜だが、彼自身も驚くほど苦々しい表情で呟いた。

「お前の性格だと、キーパー出したら、絶対にループ狙うと思ったからな」

そう言つて、ほくそ笑む上村の表情が、非常に気に障つた。

今夜、町に出よう　　そう心に決めた冬夜は、苛立ちを一時的に沈めた。

夜、町に出ることは、冬夜にとって癖になり、そして習慣となりつつあつた。彼にとって特にやることがなかつたゴールデンウィークの期間も、たびたび夜の町に出かけては、喧嘩を吹っかけていた。まだ完全とは言えない筋力や体力なので、傷を負うことも少なくはない。殴ると鍛えられていない拳は痛み、蹴れば蹴り足を痛めることもあつた。足を痛めれば、逃走に差し障るので、最近では拳闘をベースにしている。そのために、拳を保護するためにバンテージなどを使用し、それを隠すために上から手袋をはめることが多かつた。これも時が遡る前に、本屋で立ち読みした漫画や雑誌から得た知識であつた。

ただ、相手の攻撃を被弾することは、ここ一ヶ月で一度も無かつた。それは間合いの取り方が非常に上手いが故の結果であつた。相手との間合いをしっかりと測り、フェイントをかけることで相手に拳を振らせ、その隙を突いて冬夜は一方的に攻撃を加えていた。また複数に追われた場合は、相手することなく、背を向け、潔く退散していたから、余計な怪我を負わなかつたのだらう。

そのせいから、子供同士のただの喧嘩ではなく、一方的な暴力として、これらの事件が目立つてしまい、最近では警察の巡回が非常に多くなつている。しかし、それに後悔することもなく、そして自粛することもなく、冬夜は夜の町を自由に駆け回つた。夜の住人たちからは目の敵にされ、警官からも追われている、現状が楽しくて仕方がないのだ。

そんな自分のことを知る者は、この学校に誰一人いない　　そう思うと、冬夜は愉快げに口角を吊り上げた。

時が戻る前、冬夜は世間を騒がせた殺人鬼であつた。そんな危険

人物である彼が、大勢の生徒が通う学校の中で悠々と暮らしていることが、非常に滑稽に見えたのだ。

ボールを蹴る音が校庭に響き、冬夜は現実引き戻される。見てみれば、再び自陣のゴール前まで攻め込まれていた。先ほどボールを持った時の興奮はどこに行ったのだろうか。それを見ていても、やはり奮い立つことのない冬夜は、ぼんやりとした表情で眺めている。

校舎に備え付けてある時計を見てみれば、間もなく授業が終わる頃であった。残り僅かな時間で、この点差を覆すことなどできないのに、必死にゴールを守り続けるクラスメイトの姿が不可解なものとして、冬夜の視界に映った。そもそも生きること自体に、彼は価値を見出せなかった。生きていて、何が楽しいのだろうか。必死にゴールを守るクラスメイトから視線を外し、俯いた。

生きるために、生理的欲求を満たす。生理的欲求を満たすために働く。働くために、学生時代に勉強する。それを当たり前のように処理し、理解して、従う人々をたくさん見てきた。しかし、冬夜はそれらを全くもって理解することができなかった。彼は根底にある『生きる』と言うことに対し、執着が持てなかったのだ。時が遡る前、殺人鬼である冬夜が逃げ回っていたのは、捕まるのが怖かったわけではない。その時ですら、彼にとつての逃亡生活は、鬼ごっこや延長線上でしかなかった。追われる立場を楽しみ、追い詰められた時でさえ、そのスリル感に狂喜した。そこまで追い詰められて、彼はやっと生きることを楽しみを見出せたのであった。

そう考えると、随分と平和な現状に対して、いつまで冬夜が耐え忍ぶことができるか、甚だ疑問である。現状は、冬夜は気まぐれによつて成り立っているだけであり、老朽化したまま補修されない原子炉のように、いつ壊れて、人に害を成すのか、分からない危険性をはらんでいた。

そして度重なる猛攻に、自陣の守備陣がついに陥落し、六度目のゴールを知らせるホイッスルと共に、終業を報せるチャイムも鳴り

響いた。それを合図に上村のチームは、圧倒的な勝利を喜び、騒ぎ立てながら校舎へと姿を消してゆく。それとは対照的に、負けた冬のチームはどことなく雰囲気が高く、気を遣って明るく振舞うクラスメイトの姿が非常に哀れで、冬夜は苦笑を漏らした。

冬夜は負けたことに対して、特に思うことは無かった。ただ早く夜になってほしい　よく晴れた空の下で、冬夜は夜に焦がれるのであった。

放課後の出会い

五月も半ばまで過ぎた頃のことであった。教室は異様な雰囲気に包まれ、授業中だと言うのに喧騒がおさまることはなかった。一人ひとりに手渡される一枚の紙切れ　恐々と覗き込むと、クラスメイトは大まかに分けて二つの表情のどちらかになる。一つは呆れと悲しみに暮れた表情、もう一つは自信と喜びに満ち満ちた表情であった。クラスメイトはお互いに渡された紙を見せ合い、悲しみに暮れていた者が突然、喜びだしたり、また悲しみをより一層深くする者など様々な反応が見られた。そんな中、冬夜だけは無表情で紙を一瞥し、誰に見せることもなく鞆の奥底にしまおうとした。

学校の成績ごとときで馬鹿馬鹿しい　配布された中間考査の結果に、いまだ教室は喧騒に包まれたままであった。彼の成績が特筆するほど悪かったわけではない。むしろ学年でもトップクラスに位置する成績を残していた。ただ、それは二度目の高校生活で抑えるべき要点が分かっているからであって、授業さえ聞いていれば、これぐらいの成績を残すことは容易い。特に頑張つて勉強したわけでもなく　むしろ家に帰つても教科書を一度も開くことなく、テスト当日を迎えた冬夜の生活を知らば、クラスメイトからは冷たい視線を浴びることは間違いないだろう。だから誰にも見せることなく、成績表を鞆の奥底にしまおうとしたのだ。

しかし、その冬夜の手を止めようとする者がいた。冬夜は手首を掴まれ、訝しげに視線を上げた。

「結果、どうだった？」

見上げれば、いつになく意地の悪そうな笑みを浮かべた上村が、冬夜を見下ろしていた。

「別に、大したこと無いけど」

「と、お前が言うことは良くもなく、悪くもなく、か。相変わらずだな」

そんなところだ、と返した冬夜は苦い笑みを作り、上村の勘違いを訂正することなく、済ませようとした。しかし、上村がそれを許そうとはせず、冬夜の手首を握り締めたまま、離そうとしない。

何か言うべきか　と冬夜が考えていると、先に口を開いたのは上村だった。

「ちよつとぐらい見ても、悪くないだろう？」

上村の女受けしそうな甘いマスクは、相変わらず何かを企んでいるような笑みを浮かべている。

冬夜としては見せても見せなくても、どちらでも良かった。この成績では弄るネタにもなりはしない。そう割り切ると、しまいかけていた手を机の上まで戻し、成績表を上村に渡した。

その後は上村の反応になど興味は無い、と言わんばかりに窓の外の風景に目をやった。開き放たれている窓から涼しい風が流れ込み、冬夜の前髪を揺らす。暖かな日差しが教室に差し込むと、昼食後の気だるいさも相まって、夢の世界へと誘われる。

「何だよ……これ」

震えて上ずった声が冬夜の耳に届く。窓の外から視線を戻すと、成績表を手にした上村が目を剥いたまま固まっていた。

何だよ、って成績表なんだけどな　と答えたようかと迷う冬夜だが、ここはただ黙って上村の反応を待った。

「何で、こんな順位に……」

そんなことを問われても　冬夜は返答に窮する。それと共に少しばかりの後悔を覚えていた。

先ほど上村も言ったとおり、中学時代の冬夜の成績は良くもなく悪くもなく、中ごろをふらふらと移動するだけであった。はっきり言えば、当時の冬夜がこの学校に受かったことは、奇跡と言っても過言ではない。それとは反対に上村は、中学時代も良い成績をキープしていた。ただ受験の際に、第一志望で受けていた私立の高校に落ちたことで、後に受ける公立の受験校のランクを少しばかり下げたのであった。そして上村と冬夜は、また三年間、同じ学校で時を

過ごすことになった。

そんな冬夜の成績が急に跳ね上がれば、誰もが驚くだろう。家族ですら彼を疑うかもしれない。そう思うと、少しばかり失敗したという思いが湧いてきたのであった。

「まあ……高校に入ったし、真面目に勉強しないと、ね」
「そ、そうだけだよ……」

成績表と冬夜の顔を見比べ、上村は呆然と立ち尽くしていた。それに苦笑で応えながらも、植村の手から成績表を抜き取り、再びそれに目を通した。一桁台の順位がちらほら見えるが、そこまで良い成績ではない。総合順位も十三位と、一度は大学まで行った者の成績とは思えないものであった。そこは忘れておくことも多いし、と言いつつ添えて、自身を納得させる。

「上村くん、そろそろ席に着いていただけますか？」

ふと視線を声の方に向けると、先ほどまで教壇に立っていた教師は姿を消し、代わりにクラスメイトの女の子がこちらを睨みつけていた。しかし、どこか気迫に欠ける。彼女の大きな瞳がもたらすイメージは可愛らしいもので、怒っている様子もどこか可愛げを感じさせるのだ。

「あ、悪い」

頭を下げ、そそくさと席に戻る上村に、彼女　西浦かなみは、呆れたようにため息を漏らし、後ろで一つに纏めた髪を揺らした。それを確認して、冬夜も成績表を鞆にしまい、ぼんやりと西浦を眺めた。

「では、文化祭の出し物を決めたいと思います」

プリントに目を通しながら、文化祭の説明をする西浦から視線を外すと、冬夜は机に伏せた。

（俺には関係の無い　相応しくない世界の話だ）

そして誘われるがままに夢の世界に身を預け、静かに寝息を立て始めた。

最初は何か夢を見ていた気がする冬夜だが、心地よい暖かさで爽

やかな風に少しずつ深い眠りへと誘われ、そのまま落ちていった。

肩に伝わる振動に、冬夜は突然、闇の底から引き上げられた。

「ちよつと起きてよ、南雲くん！」

語気を荒げながら肩を揺さぶり続ける何者かに、冬夜は苛立ち、伏せていた顔をゆっくりと上げた。片手をポケットに向かわせながら

「もう放課後だってば！ 本当にもう……ッ！」

放課後 その言葉で、ポケットに向かって伸ばしていた手を止めた。顔を上げた冬夜の視界に映るのは西浦であった。その表情には呆れの色が濃く、彼女は大きいため息をついた。

「文化祭の決め事しているときに一人爆睡してるし……誰も起こさなかつたら、どうするつもりだったの、日が沈むまで、ここにいるつもり？ それならそれで見回りの先生に見つかっているでしょうけれど」

「悪い」

「本当にそう思ってる？」

西浦は冬夜の顔に訝しげに覗き込んだ。その距離感が非常に近いことに、冬夜の心臓が高鳴ったが、得意のポーカーフェイスで動揺を表に出すことは無かった。

「全然、反省しているように見えないけれど」

そのポーカーフェイスが逆に作用したようで、西浦は顔を離すと再びため息をついた。

「迷惑かけて悪かった。それと起こしてくれて、ありがとう。……じゃあ」

そう言うつと冬夜は席を立ち、西浦を置いて教室を後にしようとした。しかし

「ち、ちよつと！」

西浦に呼び止められ、冬夜はゆっくりと振り返った。相変わらずの無表情で、面倒くさいなんて考えていることを微塵も疑わせない、見事なポーカーフェイスであった。

「何？」

簡潔に聞くと、西浦は冬夜の下に歩み寄り、手に持っていた紙を眼前に突きつけた。

「見事に票が真つ二つなの。後は南雲の意見だけ」

そんな馬鹿な 冬夜は紙の上を滑らせていた目を疑った。目を通した用紙には、確かに『演劇』と『展示物』が多数の票を集めながらも、同数を獲得しているのだ。こんなに真面目に文化祭に取り組むクラスだっただろうか、と必死に思い出そうとしても、記憶の欠片ですら浮かび上がってくることは無かった。

(それほどまでに無関心だった……か?)

一見、どちらにするか悩んでいるように見える冬夜。しかし、その思考は全く見当違いのものであった。よくよく思い出してみれば、確かに無関心であった。元々、生に執着の無い彼は何事に対しても無関心で、その他大勢であろうと努めていたのを思い出し、頭を抱えた。きつと当時は何も考えずに、どちらかを書いて票を提出したのだろう。

本来は演劇になるはず しかし、それを選ぶのは、少しばかり気が引ける冬夜であった。これを選んだばかりに、目の前の西浦に大変な役を押し付けられたりしたら、たまったものではない。

無難なのは展示物、しかし歴史を変えてしまうと、この先の事が読めなくなってくる。それはそれで構わないと冬夜は思ったが、嫌な予感として展示物を選ぶことを躊躇ってしまう。

展示物、と言おうとした時に背筋を抜けていった悪寒は本物であった。それが何故なのかは分からない。ただ、今までに幾度となく自身の勘に助けられた冬夜は、この時もそれに身を委ね、『演劇』を指差した。

「へえ……南雲くんなら展示物を選ぶと思ってただけれどなあ」
にやりと西浦は笑みを浮かべ、冬夜の顔を覗き込んだ。

「ごめんね、これウソ」

ちろりと舌を覗かせながら西浦は、紙を指差した。

「ウソ？」

「うん、実はもう決まってるんだ、演劇に。ほら」

そう言っつて、別の用紙を取り出して、冬夜に突きつけた。演劇が展示物を数票上回っており、冬夜の一票では覆ることのない結果が記されていた。

それを見て、冬夜は不思議そうに首を傾げた。そんな様子を見て、同じく不思議そうな顔になった西浦が口を開いた。

「ん、どうかした？」

「いや……」

歯切れの悪い冬夜。言おうかどうか迷っている間に問われた彼は、少し言いよどんだのであった。

「何故、こんなことを？」

「ん、寝てた罰」

悪戯を成功させた子供が見せるような無邪気な笑みを西浦は浮かべた。もう向けられることなどないと思っていた、そんな無邪気な笑みに、冬夜は胸がちくりと痛んだ。しかし、当人はそれに気づかず 否、気づこうとしなかった。

「えっと、大丈夫？」

ほんの一瞬だが、完全に停止していた冬夜を訝しげに覗きこむ西浦。それに対し、柔らかい笑みを浮かべ、冬夜は応えた。

「ああ、大丈夫」

「そう？」

あつさりと引き下がってくれた西浦の様子に、冬夜は安堵した。

「なら決まったことだし、そろそろ帰ってもいいかな？」

「え、あ、うん」

「じゃあ、また明日」

「うん、またね」

背中に張り付く視線を感じながらも、振り返ることなく、冬夜は教室を後にした。逃げるようにして西浦の前から去ったことに、少しばかり嫌な予感を抱きながら。

偽り

時は間もなく十八時になろうかというところであったが、夏が近づくとつれて日が長くなっていた。沈みゆく太陽の赤い射光が、放課後の教室を染め上げ、幻想的な雰囲気をかもし出している。静寂に包まれた教室には、ぴんと張り詰めた空気が流れていた。映る影は二つ、一人は髪の高い顔立ちの整った少女　緊張した面持ちで、もう一つの影を見つめていた。もう一つの影は、癖が少しある髪を長めに伸ばした少年が優しく、そして静かに少女を見つめ返していた。

少女は一欠けらの勇気ですら体内に残すまいと意気込むと、大きく深呼吸を済ませ、決意に満ちた瞳で少年を射抜いた。

「先輩……私……！」

先輩と呼ばれた少年は口を開いた少女に向けて、緩々と首を横に振った。先ほどと同じく、少年は微笑んだままであったが、それはどこか悲しみの色が伺える笑みであった。

「ごめん、僕は　」

「病気のことなんて、私は気にしていませんッ！」

少年の言葉を遮って、少女が叫んだ。静かな校舎に彼女の美しい声が響く。夕日に照らされ赤く染まった顔が、ますます赤くなっていた。そんな必死な様子の少女を、苦い笑みで少年は見つめた。

「違うんだ、聞いてくれ……僕には好きな人が　」

「ストップ！」

突然の乱入者に、教室の雰囲気から緊張感が一瞬にして抜け去った。喧騒が立ち始め、夕焼けに染まった教室にクラスメイトが現れる。

「何て言うかな……上村くんは、ちょっと感情がこもってないよね」
西浦が言葉にすると、数名のクラスメイトが頷き、同意した。

「感情って言われてもなあ……俺は役者ではないんだぜ？」

「そうだけれどさ、完成度の高いものにするには、この山場で切ない演技が必要な、分かるでしょ？」

「まあ、そうだけどなあ……」

歯切れの悪い上村は「難しいよ」と漏らしながら、そっぽを向いた。そんな様子を廊下から無表情で眺めていた冬夜は、内心では上村の様子を楽しんでいた。

教室で行われていたのは、文化祭の出し物として決まった演劇の練習であった。

こういった見世物では、整った甘いマスクが映える。そう言つて西浦に、上村を推薦した当人は、ちゃっかり雑用の任を授かり、演劇の練習を他人事のように眺めている。本当は小道具や背景の作成など色々と仕事があったはずなのだが、演技の練習中はクラスメイトのすべてが揃い、それを見守っていた。演技が中断すると、一同揃つて呑んでいた息を吐いて、教室を喧騒が包むのであった。

上村に、あれやこれやと演技の指導を続ける西浦を視界の端に止めながら、冬夜は小道具の製作に戻った。とは言え、学園恋愛物の演劇であるために作る小道具は少ない。慣れない手つきで飾りを作つてゆくクラスメイトの手伝いに加わりながら、冬夜はため息をついた。

(……帰りたくない)

冬夜の思ひは、それだけであつた。早く帰つて、筋トレを済ませ、夜の町に駆け回れたかつた。最近は警官の巡回が多く、それに見つからないように隠れながら夜の町を歩き回っている冬夜は少しずつストレスが溜まりつつあつた。

気づけば、冬夜の日常は深いため息が漏れてばかりの日々になっていた。しかし、人前ではそれを隠し通し、静かなクラスメイトの一人として作業を進めた。打ち合わせの会話には真剣な響きを感じることができると、そんなこと関係ないと言わんばかりに冬夜は再びため息をついた。

「どうしたの？」

突然、後ろから発された声に、冬夜の体は震えそうになった。何とか震えを堪えた冬夜はゆっくりと振り返る。

「いや、何も」

思ったより近い位置に相手の顔があり、少しばかり身を引きながら冬夜は答えた。しかし、彼女　西浦は冬夜の答えが納得がない、と言わんばかりの表情を浮かべる。

「そんな大きなため息ついておいて、何も無いの？」

強いて言うならば帰りたい　しかし、冬夜はそれを飲み込む。

「何だか、つまらなさそうに作業しているし、拳句の果てにため息まで盛大についてるからさあ……帰りたいのかなあ、って心配したのだけれど」

清々しさと同時に冷たさを感じる笑みを浮かべた西浦が、冬夜の顔を覗き込む。

彼女が放つプレッシャーに圧倒され、冬夜の背筋を冷たい汗が流れた。

「まさか、人を　上村くんを推薦しておいて、自分は帰ろう、とか考えてたりしないよねえ？」

バレてる　相変わらずのポーカーフェイスを保つ冬夜であったが、戦慄を覚え、体が震えることは堪えきれなかった。

「当たり前でしょ？」

西浦の太陽のような笑みを前に成す術のなくなった冬夜は、観念したかのように再びため息を漏らし、首を小さく縦に振った。

「何故、分かった？」

「見てれば分かるよ、退屈そうだもん」

まるで、かくれんぼで隠れていた子を見つけた鬼のような笑みを浮かべながら西浦は笑った。それとは反対に、冬夜は硬い笑みを返すだけであった。

「ちゃんと作業は進めているんだけどな」

「むー、そうだけれどさあ……それは何か違うと思うよ？」

何が　と冬夜は問うた。しかし西浦も明確な答えが導き出せて

いないのか、唸りながら考え込んだ。

「ちよつと趣旨が違つ気がするんだよねえ」

「趣旨つて何の？」

「文化祭のだよ」

「文化祭の……趣旨？」

冬夜は思わず首を傾げた。文化祭の趣旨なんて今まで考える余裕も無かつた。冬夜は、ただ静かに、何事も無く、生きていければ良かったのに、それを上村が、家族が、世界が許さなかつた。ただ漫然と生きる冬夜は、彼らに完全否定されたのであつた。

しかし、今はそんなことは関係ない　　悩む西浦を他所に冬夜は首を小さく横に振つた。

「ほら、成功させるのが目的ではなくて……楽しむこと？　その過程で団結して頑張ることが大事ではないかなあと思うんだけど」

「社会とは求めていることが正反対だな」

「む、嫌なこと言うなあ。けれど、ここは学校だもん」

頬を膨らませた西浦の言うことは正しい　　社会に出れば、過程より結論。結局は何を成せたか、が一番重要だが、学校は違つ。過程や方法を踏まえて結論を見てくれる。これほど甘い世界は他にない。最初から学校と言う甘いところに浸かつていた者は、それに気づくことなく卒業し、外に出てから辛さ、厳しさを思い知るのだ。

「だから精一杯楽しめばいいと思うよ」

そう言つて西浦は無邪気に笑つた。

もし彼女のように純粹に楽しむことができれば、どれほど良いことか　　冬夜の胸に去来するのは嫉妬の念であつた。しかし、それを認めたくない冬夜は、静かに首を振つた。

「ん、どうしたの？」

そんな冬夜の様子を不思議そうに西浦が眺めていた。

「いや、何でもない」

「何を聞いても、そう答えるよねえ？」

やや不満そうに冬夜を見つめながら、西浦は続けて言った。

「まるで自分を隠そうとしているみたい」

冬夜は心臓を鷲づかみにされたような感覚に陥り、上手に息が飲み込めなかった。西浦はいまだ何かを言っているが、冬夜の耳に届くことは無かった。それでも震える体を抑えきり、流れる冷や汗は何気ない動作で拭い、自然と冷静を装った。

「気のせいだよ」

「だと良いんだけどね。南雲くんにも楽しんでほしいからさ」

西浦が満面の笑みを冬夜に向けると、針の先で突かれるような僅かな痛みが彼の胸を苛む。彼女の笑顔を前にすると、ポーカーフェイスを保つことですら非常に難しいことに思えた。

それが何故なのか　冬夜は分からなかった。ただ、眩しすぎる彼女の笑顔から僅かに顔を背けることしかできなかった。

「おーい、かなみー。練習再開するよー」

「はーい、分かったー。じゃあ南雲くんも頑張つてね」

西浦は呼ばれたことで、冬夜が顔を背けたことに気づけなかった。その様子に胸を撫で下ろしながら、冬夜も作業に戻った。

ただ、作業は思うように進まない。一つの疑問が喉に刺さった小骨のように頭の中に引っかかって離れないのであった。

（以前なら、こんなことは無かったのに）

高校生活の三年間で西浦と言葉を交わした覚えなど無い。二人の接触など本来は無かったはずなのに　先日放課後の件もそうだが、冬夜は作業の手が止まっていることに気づかないまま、思考の海へと沈んでいった。

（何か致命的なミスでも犯しただろうか？）

この場合で言う『ミス』とは歴史に干渉、そして変化をもたらすことだ。少しの変化は認められるが、大したことをした覚えはない。そして今、起きている変化も大したことではなかった。

しかし冬夜は妙な胸騒ぎを覚えていた。放課後に西浦との会話の時も覚えた妙な胸騒ぎ　それは知らない未来に対するものであった。

変化を恐れるわけではないが、それによって生じるリスクを考え
ると気が重い。知らない未来に興味が無いわけでもないが、知らな
いことに対しては警戒心は高めなければならない。冬夜はただ、そ
れが面倒くさいのであった。

以前の歴史と違うことは、たくさんある。たとえば、冬夜が夜の
町を徘徊しながらストレス解消している行為なんて、その昔は無か
ったことだ。しかし、彼がここまで警戒を強めるのは何故か。そ
れは素性が割れている場面では普通を装いたい、と考えていたから
だ。だから学校や家では特に気を遣い、普通であろうと努めていた
のであった。

夜の町でいくら暴れようとも素性が掴めなければ問題ない。そし
て冬夜は長年の逃亡生活のお陰か、そう簡単に素性を掴ませるよう
な失態を演じることはなかった。

(いちいち気にしていたら切りが無い)

何とか思考から抜け出し、手も動きを取り戻した頃、冬夜の耳に
届いたのは演劇のセリフであった。より一層、真剣みを帯びた声が
静かな校舎に響き渡る。見てみれば先ほどより数段、力のこもった
姿を披露する上村の姿があった。

何故、こんなことを頑張れるのだろうか。これが学校の成績を
左右するわけでもない、ただの息抜きのような催しだと言うのに。
理解できない、そう思うと同時に羨望や嫉妬の念も混ざり合い、こ
れ以上彼らの姿を見ることができない、と言わんばかりに冬夜
は視線を逸らし、作業に没頭した。何故、嫉妬や羨望の念が沸いて
きたのか、冬夜本人にも分からなかった。ただ、その感情を認めた
くないという思いだけは非常に強いものであった。

しかし、次の瞬間には荒れ狂う感情の一切が消え去っていた。い
つも通りの無表情を携えた冬夜は作業を進めた。

変化(前)

「よし皆、今日も頑張ろう！」

一日の授業が終わると、西浦かなみは教室中に声を響かせた。それを合図にクラスメイトはそれぞれの分担された役割を果たそうと、作業に没頭してゆく。

まとめ役は大変だ。しかし、一つのことを成そうとクラスメイトが一致団結する姿を見ると、やりがいも感じる彼女であった。

(けれど)

演劇の小道具を作っているクラスメイトたち。その中に、浮いている人物が二人いた。

一人は黒田くろだ 陸りく 日ごろから大人しい性格の子で、今も教室の隅で黙々と小道具の作成を進めている。入学してから彼とも何度か言を交わした西浦であったが、いつも何かに怯えるように揺らく瞳しか印象に残っていなかった。

もう一人も黒田のすぐ傍にいたのだが、こちらも黙々と作業を進めている。彼 南雲 冬夜は黒田 陸とは対照的に、いつも堂々と、そして寒々とした雰囲気をもとっていた。

(どうせなら二人で一緒にやればいいのに)

それは世界がひっくり返っても、あり得ないことだと西浦は分かっていた。冬夜と黒田、どちらかが歩み寄ることなんてない。そんな二人を見ていた彼女は、何とも言えない物悲しさに満たされ、深いため息をついたのであった。

廊下で作業を進める二人から、教室へと視線を戻す。西浦が今やならければならないことは二人の世話ではなく、演劇の練習の監督だった。当初より随分と役柄が似合うようになった上村とヒロイン役の橘 彩華は真剣な表情で打ち合わせを進めている。

演劇に決まった時、男子陣はあまり乗り気ではなかった。今も廊下で小道具を作成している大半の男子は自ら進んで作業をしている

ように見えない。それでも帰ることなく、作業をしてきていることには感謝しているのだが、どうせなら楽しんでほしい。そう西浦は願っていた。

「西浦さん、ちょっといいかな？」

「ん？」

西浦は呼ぶ声に応じながら、廊下の方に振り返った。見れば小道具の作成グループをまとめている少年の姿が映った。枯れ枝のような肉の無い四肢に度のきつい眼鏡をかけた、いかにもインドアを好みそうな少年の名は山下 悟、このクラスの副委員長である。貧弱ではあるが、髪も短く、小綺麗な容姿をしているので女子受けも悪くない。それは見た目ほど固い人格者ではなく、時折見せる柔和な笑顔が人を惹きつけるのである。彼は今もそんな微笑を浮かべていた。

ただ、この時の山下の表情をよく見てみれば、少しばかり困ったような色をうかがえる。西浦は廊下まで出ると山下に問うた。

「どうしたの？」

「えっと、思ったより背景の塗る面積が広くてさ。マーカーでは追いつかないんだよ」

「あー、確かに」

今、廊下に広げられている背景となる画用紙を見下ろして、西浦は同意を示す。画用紙には大雑把に輪郭線が施され、ところどころに塗る色を文字で記している。しかし、それらをマーカーだけで塗りつづすには大変な労力を必要とすることは明白であった。

「そこで、まだ予算があつたら絵の具とかを使うのも悪くないんじゃないか、って相談してたんだ」

「うーん、そうだねえ……」

幸いなことに予算に余裕はある。買っても支障はないか。そう思った時、西浦は妙案を思いついた。

「よし、なららせて！」

そう言って西浦は廊下の端で作業をする二人の下へと歩み寄った。

「南雲くん、黒田くん、ちよつと良いかな？」

西浦に二人の視線が向けられた。一人は驚愕に満ちた瞳で見上げ、もう一人は緩慢な動きで無表情のままであった。

「な、何かな？」

先に口を開いたのは黒田だった。彼の声は震え、何かに怯えているようにも見える。

「二人に手伝ってほしいことがあるの」

もう一人 冬夜は黙ったまま西浦を眺めていた。相変わらずの無表情のようにも見えたが、前髪に隠れて見えにくくなっている眉を僅かに顰めたのを彼女は見逃さなかった。

「そんな嫌そうな顔しなくてもいいじゃない、用件も言っていないに」

「別に嫌な顔なんて……で、何か用があつたんじゃないのか？」

冬夜にしては珍しく、やや不機嫌そうに話題を逸らす。

「うん、二人に買出しを手伝ってもらいたいんだけど」

「何故、俺たちなんだ？」

「理由が必要？」

微笑みを崩さない西浦に対し、やや苦い表情で冬夜は押し黙った。

「ね、いいでしょ？」

「ぼ、僕は構わないけど……」

「わあ、ありがとうっ!!」

西浦は思わず黒田の手を取り、満面の笑みを向けた。

その時、冬夜の顔が僅かに引きつったのを西浦は見逃してしまつた。

「一人で充分だろう」

「分からないじゃない、荷物がどれぐらいになるか分からないし」

「ちよつと待て」

今度はあからさまに眉を顰めた冬夜が西浦の言葉を遮った。

「何を買うのか決めていないのに買出しに行くつもりなのか？」

「いや、決まっているのだけれど……」

西浦は痛いところを突かれてしまい言葉に詰まる。そんな彼女に向け、冬夜はワザとらしくため息をついた。

「い、いいよ、南雲くん。僕が行くから」

少しずつ険悪になりつつある雰囲気には耐えかねたのか、黒田が口を挟んだ。

しかし、冬夜の表情が変わることはなかった。

「お前もお前だよ。頼まれたからって、ほいほい釣られるな」

そう言っただけで冬夜は西浦を指差す。

「こいつ何か企んでるぜ？」

ぎくり、と音がしそうなほど西浦の体が揺れ、嫌な汗が噴出してくる。

何故バれているのか 疑問が頭の中でぐるぐると回り、西浦は否定することをすっかり忘れていた。そんな彼女に対し、冬夜は呆れた様子で再びため息を漏らした。

「だから、俺が行く」

「……え？」

西浦は一瞬、冬夜が何を言っているのか理解できなかった。黒田も隣でぽかんと口をあけたまま、冬夜を見つめている。

「俺一人で充分だろう、黒田は作業を頼む」

「え、っと……うん、気をつけて」

冬夜は黒田にそう言い付けると、立ち上がり、そのまま廊下を歩き出す。

「ほら、行くぞ」

「え、ちよっと待ってよ！」

予想外の展開にやや混乱しながらも、西浦は冬夜の後を追う。そんな二人の背に、クラスメイトの怪訝な視線が向けられるのであった。

西浦はクラスの委員長を務めている。文化祭のクラス予算も彼女が仕切っているので、買出しには必ず付き添わなければならなかつ

た。だから本来は西浦ともう一人いれば荷物運びは充分であったのだが、ここで冬夜と黒田を連れ出して交流させることができればそう考えていた。

「どうせ、廊下の端でひそひそと作業する俺たちに気を遣ったんだらう?」

下駄箱に向かう足を止めずに、冬夜は口を開いた。それに追いついた西浦は彼の言葉に苦い笑いを漏らす。

「……バレてた?」

「バレバレだ」

冬夜はあつさり肯定し、そのまま続けた。

「俺のことは気を遣わないでほしい」

無表情のまま紡がれた言葉に込められたのは拒絶であった。

「あの」

「さつさと買って帰ってこよう。そうしないと作業が進まない」

「……そうだね」

本当は「何で?」と問いたかった。しかし、冬夜の言葉に遮られ、西浦は言葉を飲み込んだ。

そして二人は駐輪場でそれぞれの自転車に跨り、最寄のホームセンターを目指した。最寄とは言え、校舎からは見渡す限りの田園風景が広がっており、歩いていくには少しばかり遠いのだ。

西浦も冬夜も目的地まで静かに自転車を漕ぎ続けた。田園風景を抜けると、ようやく見えてきたホームセンターに西浦はほっと胸を撫で下ろす。

「さて、と絵の具を探そうか」

無言で支配された重苦しい雰囲気を払拭しようと、西浦は努めて明るく言った。

「分かった」

しかし、西浦の声とは対照的に返ってくる言葉は小さい。そんな冬夜に、西浦は少しばかり苛立ちを覚えた。

何か言っただろうかと西浦は考えたが、そんな彼女を放って、冬

夜は一人店舗に踏み入れる。

「ちよ、ちよっと待ってよ!」

結局、西浦は何も言うことなく冬夜の背を追うことになった。そんな彼女に対し、冬夜は相変わらざる無表情で振り返る。

「ゆっくりしてる暇なんてないだろう?」

「まあそうだけれど……南雲くんって案外真面目だねえ?」

「そうでもない」

ただ厄介なことをさっさと済ませて帰りたいただけだ、とは言わずに胸の奥底にしまいこんだ。

「ほら、絵の具あつたぞ」

冬夜の指差す先には色とりどりの絵の具が並べられていた。

「何色が要つたっけ?」

「俺に聞かれても困る。聞いてこなかったのか?」

「え、だって南雲くんが先に行つちやうから……」

二人の間に沈黙が流れ、共に視線を逸らすことはなかった。まるで先に視線を逸らした方が負けだと言わんばかりに微動だにせず見詰め合っていた。

このまま見詰め合っても仕方が無い　西浦はため息をつきながら視線を逸らした。

「……ごめん」

しかし、先に口を開いたのは冬夜であった。ほんの少しであるが彼の無表情が揺らいだ。

そんな冬夜を前にして西浦は黙り込んだ。予想外の反応に、何を言っているのか分からなかったのであった。逸らしていたはずの西浦の視線が、再び彼に釘付けになる。西浦は思考が完全に停止したまま、冬夜をじっと見つめていたが、やがて我に返ると取り繕うようにして口を開いた。

「気にしなくていいよ。別に電話で聞けばいいし……」

ポケットから携帯を取り出して、西浦ははつとする。

「どうした?」

携帯を取り出して固まったままの西浦。それを不審に思った冬夜は訝しげに彼女の様子を見つめた。

「私、山下くんの番号知らない」

「それがどうした？」

「どうしたって……連絡取れないじゃないの」

西浦の言葉が心底理解できない、と言わんばかりに冬夜は首を傾げた。

「別に山下に電話しなければならぬ、ってワケではないだろう。教室にいる誰かにかければいいんじゃないか？」

「……あ」

間の抜けた声を発した西浦は、顔に血が上ってくるのを感じていた。見る見るうちに西浦の顔は赤く染まり、そのまま俯いてしまった。冬夜の冷静な指摘で自分が取り乱していたことに気づくと、抑えきれぬ羞恥が西浦を苛む。

「そこまで気にすることじゃないだろう」

西浦の様子を見かねたのか、やや苦さの混じった微笑みで冬夜が口を開いた。

「さつさと聞こう。早く買って帰らないと、それだけ作業が遅れる」

「やっぱり真面目じゃん」

俯いたまま携帯を操作してアドレス帳を開く西浦は小さく零した。

「早く帰りたいだけさ」

冬夜は、より苦みが濃くなった微笑みを向けた。

その軽口のお陰か、西浦は笑顔を取り戻せるぐらいにまでは落ち着き、顔から熱が引いてゆくのを感じていた。

携帯を操作し、通話ボタンを押す。コール音を聞きながら、しばらく待つと相手が電話に出た。

「あ、もしもし。山下くんいる？ うん、いたら代わってほしいんだけど」

変化（後）

電話する西浦から視線を外し、絵の具の陳列棚を眺めながら冬夜は待った。

何故、この女は自分のことを過大評価するのだろうか　帰りた
いから作業を早く終わらそうとするわけなのだが、それは協力的で
は無いし、真面目とは言えない。そう、冬夜は思うのであった。

ふと気づけば電話を終えて、同じようにして陳列棚を覗く西浦の
姿が視界の端に映った。

「これと、これと、これと……」

西浦は買い物がごにどんどんと絵の具を投げ入れてゆく。しかし、
所詮は絵の具であり、大した量や重さにならない。この程度の買い
物に連れ出された冬夜は少しばかり理不尽を感じていた。

「よし、これで大丈夫」

カゴに入っているのは絵の具だけで、冬夜は違和感を覚える。

「筆とかパレットとかは要らないのか？」

「うん、美術部の子が貸してくれるって。ね、レジ行こう」

邪気の無い笑みを満面に浮かべながら西浦は振り返った。やはり、
それを見ていると冬夜の胸は針の先で突かれるように痛んだ。それ
を表に出すことなく、冬夜は首肯で応じた。

レジで支払いを済ませ、レシートを受け取って店から出ると、橙
の日差しが二人を迎えた。もう少し日が沈めば、風景を真っ赤に染
め上げるような綺麗な夕日が現れるに違いない。携帯を開き、携帯
を見てみると時は間もなく十八時を過ぎていた。

「急いだ方がいいか」

下校時刻は十八時半で、それを回れば教室は施錠されてしまう。
それまでに学校に戻り、絵の具を教室に置いてから自分たちの荷物
を運ばなければならない。そう考えると、あまり余裕のある時間では
なかった。

「そつだね」

隣の西浦もやや焦った表情で頷く。

お互い自転車に跨り、ペダルを踏んだ。また無言の時間が支配するのかと思いきや、西浦は冬夜の後ろに続きながら言った。

「ねえ、一つ聞いていい？」

風の音に負けなかったためか、西浦の張り上げた声が冬夜の耳に届く。

「ああ」

ちらと後ろを振り返りながら冬夜は応じた。

「文化祭、楽しい？」

「楽しいよ」

「本当？」

確認を取る西浦の声は妙に透き通っていて、鮮明に響いた。

既に見透かされているような雰囲気、冬夜は黙ってしまった。普段の彼なら一時しのぎのウソさらりと口走っていただろう。しかし、この時は何故だか分からないが、言葉に詰まってしまった。

「やっぱり……楽しくないんだよね？ 見ていて楽しそうに見えないもん」

冬夜は黙ったまま、振り返ることもなく自転車を漕ぎ続けた。

「何で楽しめないの？」

それを知って、どうする 冬夜に答えるつもりは無かった。しかし、彼の口は自然と開いていた。

「むしろ」

「え？」

「何故、楽しめるんだ？」

振り返ることなく、無表情のまま冬夜は口を開いた。

「何で、楽しめるのか、って？」

「ああ、俺には分からない。何故、こんな下らないことで楽しめるのか いや、もつと分からないことがある。何故、人は生きようとするのだろうか」

「何で、生きるって……」

再び冬夜はちらと後ろを確認した。やはり、と言うべきか面食らったような表情の西浦が彼の後ろに続いていた。

「俺には分からないんだ。何故、人は生きたいと思えるのか。お前は 西浦はどう思う?」

「何でつて……」

唐突な質問に面食らった様子の西浦は答えられなかった。

たとえ、その質問が唐突でなかったとしても、答えられたかどうかは分からないが。

「人の人生って寝ている時間を除けば、八から九割は苦しいことや辛いことだと思うんだ。そんな中で極僅かの楽しい時間の為に生きようと思える人のことが俺には分からない」

冬夜は自転車を漕いだまま、前を見つめていた。

ふと冷静な思考が働くと、何故こんなことまで話しているのだろうかと疑問に思う。しかし、彼の口は止まらなかつた。まるで誰にも吐くことのなかつた弱音のすべてを吐き出すように彼は続けた。

「人は理由の為に生きるのではなく、生きるために理由を求めらるんだと思うんだ。だから誰もが無邪気な幼少期の頃に何か趣味を見つけてるのだと思う。俺も親に勧められて色々なことを経験してきた。だが、それらが生きるほどの理由になることはなかつたんだ。だから俺には分からない。何故、人はこんな下らないことを理由として辛いことが大半を占める人生を生きていこうと思えるのか。俺には全く分からないんだ」

西浦は答えない。ただ目を大きく見開いて冬夜の背を見つめるだけであつた。

「だから何故、君は生きようと思えるんだ? それと良かったら生きる理由や糧になつているものも教えてもらえれば嬉しいところなんだが」

視界に学校を捉えたころ、冬夜は振り返つた。西浦はどこか悲しげな色を浮かべた瞳で冬夜を見つめていた。それを見て、失敗したなと冬夜は思う。

「やっぱり、そうなるか」

冬夜は思わず漏れた苦笑を隠そうとしなかった。

こんなことを言ってしまうえば反応なんて予想できていた。普通なら引くか、哀れみを含んだ視線を向けられる。西浦の驚愕に染まった顔も、時間の経過と共にどちらかに変貌してゆくのだろう。

言うんじゃなかった　少しばかりの後悔を覚えながら、冬夜は校門をくぐった。西浦も無言を保ったまま、彼の後に続く。

お互いの自転車を置き、教室を目指す。教室は施錠されていてもおかしくない時間だったので、冬夜は歩を速めようとした。

「あの」

しかし、遠慮がちにかかった声に冬夜は足を止めた。そして声の主の方に振り返りながら冬夜は問う。

「何？」

「あなたは本当に……楽しくないの？」

西浦は眉を顰めながら言った。その顔は嫌悪でもなく哀れみでもなく、怒りのようなものを感じ取れる。

「楽しくないよ」

何もかもが　相変わらずの無表情で冬夜は答え、そのまま続けた。

「なら君は何が楽しいの？」

「すべて」

「すべて？」

思わず冬夜は聞き返してしまった。冬夜の頭に色々な疑問が湧いてくる。だが、それを問う前に西浦は続けた。

「楽しいこと、嬉しいことはもちろん。辛いことも、悲しいことも怖いことも、怒ったことも、すべて　すべてが私にとっては大切でかけがえのない時間」

それを聞いた冬夜の顔が歪む。苦い笑みが彼の顔を満たしていた。

「綺麗事だな」

「違つよ」

「辛いことや悲しいこと　それらの感情が存在するからこそ、楽しさ、嬉しさが際立つんだよ。確かに辛いことや悲しいこと、それらが圧倒的に多い人生かもしれないけれど、それらが無ければ、楽しさも嬉しさも半減しちゃうと思うんだ。そう思えば辛いことも、悲しいことも乗り越えようと思えるんだ」

顔を上げた西浦の瞳には迷いも哀れみも無く、ただ強い輝きをきざしていた。

「辛いこと、悲しいことが無ければ人は成長できないんだよ。それから目を背けて逃げ続ければ、その人は一生その壁を乗り越える力を身につけることはできないんだよ」

冬夜は黙って聞いていた。西浦とは違って、その瞳に輝きなど無かった。そして西浦の言葉が止まったのを確認して、彼も口を開いた。

「つまり人生のスパイスとして悲しみ、苦しみを受け入れ、それらを成長の糧にする　それがお前の考えか。それは理解できる」

しかし　と冬夜は続ける。

「それが俺の質問の答えになることはない。俺は最初に何故、生きようと思えるのか、と問うたはずだ。別に悲しみ、苦しみ、辛さ…それらの感情を否定するわけではない。人の成長のために、または人生のスパイスのためと言う西浦の意見は分かる。しかし、それが生きる理由には繋がらないだろう？」

「……難しいよ」

西浦の声は震えていた。目じりに涙をためて、泣きそうなのを必死に堪えながら彼女は言う。

「私にも分からないよ。何で生きるのかなんて分からない。けれど死ぬのは嫌だよ。それが当然じゃないの？」

「当然……か」

西浦から空へと視線を逸らし、冬夜は笑った。どこか悲しげな色を帯びた笑みだった。

「当然がどれほど恵まれているのか　それを分かった上で言うて

いるのか？」

冬夜は西浦に視線を戻さなかった。

「時間が無い……行こう」

話を遮り、冬夜と西浦は教室を目指した。

校舎からは既に人の気が去り、静寂が支配していた。そこに響くのは二人の足音だけ。時計は既に十九時になりかけて、下校時刻を三十分も回っていた。

西浦は気まずいのか口を開く気配を見せなかった。冬夜は無言に慣れているのか、平然と階段を上ってゆく。二人は教室のある階に到達し、廊下の奥を見つめた。下校時刻を過ぎ、本来人がいないはずの廊下にぼつんと人影があった。そこは二人の教室の前であった。教室を目指して歩いてゆくと、その人影も少しずつ大きくなってゆく。

「黒田くん？」

校舎を包む静寂の中に西浦の声だけが響く。それに反応するように影が揺れ、二人の方に振り返った。

「ごめん、待っててくれたの？」

影 黒田に向かって駆け出す西浦。その後をゆっくりと歩きながら冬夜も追った。

「教室の鍵、閉まっちゃうから荷物を……」

そう言った黒田を挟むようにして冬夜と西浦の荷物が置かれていた。

「ごめんね！ って皆は帰ったの？」

黒田は頷く。

「そっか……待っていてくれて、ありがとうね」

西浦は黒田の手を握り、必殺の笑顔を放った。黒田は苦笑混じりに彼女から視線を逸らした。

そんな光景を横目に見ながら、冬夜は自分の荷物を手に取った。

「ありがとう」

冬夜はその一言だけ残して、その場を後にしようとした。しかし、

異形が彼の足を止める。

いつもの冬夜なら見て見ぬふりなどお手の物　だが、この時は西浦との会話が彼の脳を活性化させたのか、疑問がそのまま口から漏れた。

「その痣はどうした？」

黒田の顔には僅かに内出血のような痣を見て取れた。日が沈み、蛍光灯が付いていない廊下は非常に暗く、見逃してもおかしくないほどの僅かな痣であったが、冬夜は見逃すことはなかった。

「え、痣？」

西浦もやつと気づいたようで黒田の顔を覗き込む。彼は、それに対し焦ったように顔を振りながら距離を取る。

「な、何でもないよ、ちょっとぶついただけだから……」

そう言っつて黒田は顔を再び背けた。

「ご、ごめん、僕も帰らなきゃ……」

「うん、ありがとうね。また明日」

西浦も手を離し、去ってゆく黒田の背に声をかけるが、彼が振り返ることは無かった。

そんな黒田の後姿を訝しげに見つめていた冬夜であったが、自分の荷物を肩にかけ、下駄箱に向かって歩き出した。

そこで冬夜は思い出したように振り返った。ぽつんと西浦は一人残されていた。

「帰らないのか？」

「え、でも……」

「今日のところは持って帰ろう」

教室は施錠されている為に置き場が無くなった絵の具を西浦の目の前にかざしながら、冬夜は言った。大した量は無いので、そのまま持って帰っても問題なかったが、このまま西浦を放って帰るのも少しばかり気になったのであった。

そして冬夜は手に持っている袋を鞆に押し込み、再び下駄箱に向かって足を進めた。先ほどの会話の気まずさを引きずっているのか、

後ろに続く西浦が言葉を発することは無かった。

その無言の時間に対し、気が楽と感じていたはずであった冬夜。しかし、その胸中に去来する何とも言えない感情を不思議に思いながら、彼も帰路につくのであった。

異変

普段より少しばかり膨らんだ鞆を肩にかけ、冬夜は家を出た。

冬の気配がすっかり抜け切った空気は生ぬるく、冬夜の肌を撫でた。

文化祭まであと三日を切った。演劇の練習にも力が入り、土気も上がってきている。なのに冬夜は冷めた視線を保つのであった。やはり彼は文化祭に全力を注ぐ一部のクラスメイトのことが認めるところとはできても、理解することはできなかった。

下駄箱を抜け、階段を上ってゆくと、ふと冬夜の耳に届く喧騒に異質なものを感じた。朝の爽やかな挨拶を交わすような、そんな喧騒ではない。どこか不穏な喧騒であった。

音源は遠くない。冬夜は嫌な予感を胸に抱きながらも階段を上り続ける。階段を一步踏みしめるたびに、大きく響く心臓の鼓動が耳に届く。常時忍ばせている武器を取り出しやすい位置まで移動させ、周囲の警戒を続けた。階段を上りきると左右に広がる廊下、その奥にある彼の教室の前が喧騒の中心であることを突き止めた。

嫌な予感は膨らむ一方だが、冬夜は教室を目指す。できることなら嫌な予感に従い、逃げ出したかった。しかし彼は足を止めない。教室の周囲を埋め尽くす野次馬を掻き分けて、彼は教室の前に立った。

そこで冬夜は絶句した。感情のコントロールには自信があったが、この時ばかりは抑えきることができなかった。

「な……なぜ？」

冬夜の言葉に反応したのか、先に到着していたクラスメイトの視線が向けられる。しかし、冬夜はそんなことを気にしていられなかった。

教室の中央には机と椅子があった。

それらは教室には当然のように存在する物で疑問に思うことは無

いだろう。

そう普段ならば 教室の床一面を覆うのは演劇で使うために描いた背景であった。その中心を突き破るようにして、椅子と机が存在していた。また同時に作っていた小道具も原型が分からないほどまでに碎かれ、紙くずになり果てていた。

これが何なのかは冬夜にも分かる。しかし、何故こんな状態になっているのか、全く理解が追いつかなかった。ただ呆然と目の前の光景を網膜に焼き付けるように見つめることしかできなかった。

クラスメイトの中は誰一人、口を開こうとしない。興味本位で教室を覗こうと集まった野次馬の喧騒だけが辺りを埋め尽くしていた。冬夜のように呆然と立ち尽くす者もいたし、目じりに涙をためながら、もう使い物にならない小道具や背景を見つめる者もいた。

「南雲くん……」

か細い声に対し、冬夜はゆっくりと振り返った。そこには西浦の青ざめた表情があった。よく見れば、彼女の目は真っ赤で、頬にかけて濡れた跡が見て取れる。

きつと西浦は泣いていたのだろう。その姿を見ていると何故か冬夜の胸は締め付けられるように痛んだ。

彼女の隠そうとしない素直な感情に中てられたのだろうか 冬夜に去来するのは悲しみや苦しみと言った感情であった。まだ人間らしい思考ができることに驚きつつも、冬夜は言った。

「大丈夫だろう」

冬夜の声が教室に響く。彼の低い声と対照的に野次馬の喧騒はウソのように静まっていった。それをチャンスだと言わんばかりに冬夜は続ける。

「まだ時間はある。それに今日からは下校時刻が二十時になるはずだ。作り直せばいいじゃないか」

冬夜は文化祭を成功させたいとは、微塵も思っていない。ただ目の前の西浦の涙が止められればいい そう思っただけの発言であったが、暗い雰囲気のある教室に一筋の光が差し込んだような気がした。

俯いていた者は顔を上げ、冬夜を見つめている。今まで、このよ
うな注目のされ方をしたことのない冬夜は集まる視線に体を震わせ
た。手にも汗を握りながらも周囲を見渡し、口を開く。

「できるさ。犯人は演劇の練習はどうしても俺たちから奪うことが
できないから、小道具や背景を壊したんだろう？　つまり、俺たち
のやってきたことは無駄ではない、半分ぐらいは残ったままだ」

冬夜は差し込んだ一筋の光が、小さな炎へと変化する瞬間を見た。
後は更に油を注ぐだけだ。

「ここで折れちまつたら犯人の思う壺だと思っぜ？」

その一言で冬夜は教室内のクラスメイトの炎が燃え上がるのを感じた。

「南雲の言うとおりだ、皆がんばろうぜ」

演劇の主演、上村の一言で教室に活気が戻り始めた。これで一安心だと冬夜は西浦の方に振り返る。泣き腫らして真っ赤になった瞳は驚愕の色と僅かに安堵の色を見て取れた。

「大丈夫、できるさ」

冬夜の言葉に対し、西浦はこくりと頭を縦に振った。

「とりあえず授業までに、これを片付けよう」

西浦の代わりにクラスメイトに指示を与え、教室内の清掃に取り掛かった。一時間目まで五分ほどであるが、皆で協力すれば時間内に済むだろう。冬夜も加わって、教室の後片付けを進めた。気づけば野次馬もそれぞれの教室に戻ったのか、廊下に人の気配はなかった。

クラスメイトの男子数人で協力し、破れた背景を折りたたんで教室の隅へと移動させる。残るは机と椅子を元に戻すだけ、と思ったところで冬夜は背を叩かれた。

「お前にしちやあ珍しく協力的じゃないか？」

上村は訝しむような表情で、冬夜を見つめていた。

「そっか？」

「ああ、不自然なほどにね」

上村は更に声を大きくして続けた。

「話の持って行き方が上手すぎやしないか？ 皆、気づいているか？」

クラスメイト全員に語りかけるように上村は言った。

「俺たちさ、こんなことをやった犯人から上手く視線を逸らされたいと思わないか？」

「何が言いたい？」

上村は瞳に宿った敵意を隠すことなく、冬夜を射抜いた。

「昨日、最後まで残っていたのは買出しに行っていたお前と西浦さん……そ」

「誰が犯人か分からないといけないのか？」

上村の言葉を遮るようにして、冬夜は語気を強めた。

しかし、上村も怯むことはない。

「誰が犯人か特定しなければ同じことが起こるかもしれない」

上村の言うことは正しい。しかし、ここで冬夜は犯人探しをしなくなかった。彼は自身の無罪を知っている。そして西浦がこんなことをするとは思えない。

「誰が最後に施錠するか決めればいい」

「そいつが犯人だったら？」

「破壊が起きた時点で犯人だと疑われる」

「それを覚悟で行うかもしれない。犯人の目的が俺たちの演劇を失敗に終わらせることだとしたら、前日まで何食わぬ顔で施錠し、無事を装う。そして」

「確かに当日の朝、壊されている小道具や背景を教室で目にする可能性は否定できないな」

上村は相変わらず敵意のこもった視線を冬夜に向け続ける。

「だが、犯人探しをしている間なんてあるのか？」

「間があるか無いかではない。しなければ安全は保障されない」

片付け作業をしていたクラスメイトもいつしか動きが止まっていた。誰もが冬夜と上村の口論を固唾を呑んで見守っていた。

再び訪れる静寂と共に嫌な雰囲気は教室に充満する。募る不信感
は、冬夜に向けられるクラスメイトの視線から感じる事ができた。
しかし冬夜は笑った。それと同時に教室の前方の扉が開いた。

「ん？　こら、早く片付けんか。授業始めるぞ？」

事情を知らない教師の言葉に、クラスメイトの視線は冬夜から教
師に向けられた。不審どころか殺意を含んだクラスメイトの視線に、
教師も異変を感じ取ったのか怪訝そうな顔つきになった。誰かが事
情を話せばいい　ただ、それだけのことなのに誰一人言葉を発そ
うとせず、暗い雰囲気の中、片づけを進めてゆく。

動かず睨み合っていた二人。冬夜と上村も渋々と言った様子で片
付けに戻った。

何気ない動作で冷や汗を拭い、冬夜は胸を撫で下ろしていた。上
村は気づいているのかどうかは分からない。しかし、冬夜は犯人に
見当がついていた。だからこそ、あそこで犯人について上村に言及
されると大事になってしまう。

だから冬夜はあえて時間を稼いだ。犯人について語るのではなく、
犯人を見つける利便性について話を逸らし、教師が来るまでの時間
を繋いだのであった。

それは何とか成功し、教師の登場にとって話は強制的に終了させ
られた。そこまでは良かったが、この後はどうするべきか　授業
を進める教師の言葉を聞くこともなく、冬夜は考えた。

やるべきことは三つ。

犯人へのアプローチ、上村のケア、西浦のケア、クラスメイトの
不審の解消　これらが冬夜の当面の目標であった。どうにかして
上村をケアし、犯人探しの動きを止める。その上でクラスメイトの
不審を解消し、作業の為に士気を上げる。そのためには落ち込んで
いる西浦に復活してもらった方が手っ取り早い。そして

(犯人、か)

冬夜は教師に見つからないように教室の隅に目をやった。

そこに座るのは一人の少年　黒田　陸。西浦が犯人でないと仮

定した時、彼がもつとも怪しい。

冬夜は犯人が分かった上で話を逸らした。それは事件にしたいくないという思いが強かったからだ。決して黒田を庇おうとしたわけではない。冬夜は上村や西浦、クラスの件を済ませた上で黒田にも接触するつもりであった。犯人かどうか確証はない。しかし、釘ぐらい刺していても構わないだろう。

面倒くさい　冬夜は小さく呟くと、黒田から視線を逸らした。それと同時に一つの疑問が頭の中に浮かぶ。

以前の冬夜なら、黒田が犯人と決め付けられても関係の無いことだと切り捨てただろう。

(なのに何故、俺は黒田を庇うようなことをした?)

こんな面倒くさい手順を踏んでまで、黒田を助けようとしたのは何故なのだろうか。

ただ事件にしたいくないだけで、ここまで出来るだろうか　いや、出来ないだろう。冬夜は緩々と首を横に振り、皮肉めいた笑みを浮かべた。

(俺も甘くなつたもんだぜ)

そして一時間目の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。教師に対して礼を終えると、行動開始だと言わんばかりに冬夜は席を立った。向かうところは上村　彼に何か言わせる前に冬夜は口を開いた。「ちよつといいか?」

ミッシヨンスタート、と冬夜は珍しく意気込んで行動を開始した。

任務開始

冬夜の声に応じるように、上村は振り返った。上村は凄く嫌そうな顔を隠そうとせずに答える。

「何だ？」

「今後のことについて話がある」

そう切り出すと上村の顔に刻まれる皺が一層深くなる。訝るような視線は冬夜の真意を測りかねているのか、それとも冬夜自体を疑っているのか。

「場所を移そう」

「場所を移さなければ話せないことなのか？」

上村の言葉で教室を包んでいた喧騒が止んだ。背中に視線が集まるのをひしひしと感じながらも冬夜は一切動じた様子を零すことはなかった。

「ああ、ここでは話せない」

はつきりと言い切る冬夜に、敵意を込めた視線が射抜く。それは上村だけではなく、背中から感じる視線にも混じっていた。ここで立場を悪くしても良いことなどないのだが、手順としては仕方が無い。そう割り切って、「ついてこい」と冬夜は上村に背を向けた。

椅子が引かれ、上村の気配が冬夜の背後を追う。一つ間違えれば殺意になるのではないかと錯覚するほどの敵意を放ちながらも、上村は冬夜に従った。

歩くこと数分で人気の少ない美術室や音楽室の並ぶ校舎の一角にやってきた二人。そこで冬夜は足を止め、振り返った。

「お前が何をしたいのか、俺にはさっぱり分からん」

上村はやや呆れたように言った。

「何で、犯人を庇う？」

「お前は俺が犯人だと疑ってはいないのか？」

「小道具を精一杯作ってる奴らが自らの作っている物を壊すか？」

「確かに」と相槌を打ちながら、こいつはダメだ、と冬夜は内心で呆れる。冬夜の見込みだと、製作に携わっている黒田 陸が犯人だ。そして、これは間違いないだろう。

証拠が多いわけではない。ただ、いくつか気になる要素を勘に従い組み立てていくと、結論がそうなたただけの話であった。

「今、誰が犯人だと決め付けるのはよくない」

「だから、何でだ！」

「その前にやるべきことがあるからだ。せつかくクラスメイトが丸となって苦境を乗り越えようとしている時に、矛先を犯人に向けるべきではないと思うんだ。お前らが不安になるのは分かる。しかし、犯人がクラスメイトの中にいるとも限らない」

「いや、絶対にクラスメイトに違いない」

自信に満ちた上村の発言に、冬夜も内心では頷く。

「いや、刹那的な快樂主義の通り魔的犯行かもしれない」

「なら、何で俺たちのクラスだけが？ 何故、施錠されていたはずの校舎は無事なんだ？ そんな犯人が外から侵入するなら、どこか窓ガラスが割れていてもおかしくないのではないか？」

上村の言うことは的を射ている。そして畳み掛けるように彼は続けた。

「再び、こんなことを起こさないためにも犯人を特定する必要がある」

上村は言い切った。断固たる決意をその言葉に込めながら。

しかし、冬夜は折れるわけにはいかない。そして、その言葉を待っていたと言わんばかりに微笑みを零した。

「ならば再犯を起こさせなければ、犯人の特定はしなくても済むんだな？」

「出来るのかよ、そんなこと？」

「皆、揃って目の前で鍵を閉めれば、どうだろうか」

「忘れ物をした、とか言って後で鍵を取りに行けば」

「その件は先生に事情を話し、鍵の管理をしつかりしてもらえば

いい。そうすれば鍵を借りに来た人物を犯人と特定できる」

「だから言っただろう！ 二度目の犯行をバレることを覚悟した上で行われたら、どうするんだ！」

声を荒げ、顔を紅潮させる上村。それに対し、冬夜は無表情で淡々と言葉を紡ぐ。

「その時は俺が許さない」

見た者に恐怖を植えつけるほどの濁った色を、冬夜の瞳は宿していた。

そして聞いた者の背筋を凍りつかせるほど低く、冷たい声色だった。

上村も冬夜の凄まじい変貌に背筋を震わせ、黙った。

その雰囲気壊すように冬夜は笑みを向けながら続けた。

「まあ、そういうことだから今は皆で頑張ろうぜ」

冬夜は、上村の肩を軽く叩いて緊張を解いてやった。それに上村はぎこちなく頷いた。

「あ、それと最後に」

思い出したように冬夜は言う。

「もし犯人が小道具製作班にいないと思っているなら、それは間違いだと思っぜ」

その言葉に上村はびくりと跳ね上がった。

「お前は……犯人が分かっているのか？ 分かっただけ隠そうとしているのか？ それとも、まさか」

お前が？ と上村は目を大きく見開いて言った。

「俺の無実は自身が一番知っている。まあ証明できないこともないしな」

「どういうことだ？」

「西浦に聞けば分かる。俺と彼女が買出しから帰ってきたとき、既に教室の鍵は閉まっていた。だから俺たちは絵の具を家まで持って帰った。だから、次の日に持ってきた絵の具は無事だったんだ。俺が犯人だったら再び作り直すとする、その芽も摘む。だから絵の

具だけを無事に済ませる道理は無い。そこで無理しても教室の鍵を借りて、絵の具を教室に置いて帰ったはずだ。まあそれはともかくがな。お互い、そこまでのアリバイは完璧だと言っわけだ」

「ならば引き返して」

「鍵を借りたと言いたいのか？ それなら職員室に言って聞いてみればいい。俺と西浦が学校に帰ってきたのは十九時前だ。その後西浦と別れ、学校に戻ってきたとしたら、それは十九時を回っている頃だ。その頃になれば職員室に訪れる生徒の数も激減しているはず。忘れ物をしたなど言っつて、のこのことやってきたなら残っていた先生方の目に留まっているはずだぜ？」

「しかし、共犯という可能性も」

「共犯、だと？」

顔が引きつるのを感じながら、冬夜は即座に返した。

「俺と西浦が共犯だと言いたいのか？」

「い、いや、そうだった可能性も否定できないのでは……」

語調が強くなった冬夜の言葉に気圧されたのか、上村は言いよどんだ。

「西浦が犯人に見えるのか？ 先頭に立ってクラスを引いてきた彼女が？」

「いや、可能性の話を」

「黙れ」

「ま、待て！」

冬夜は上村の胸倉を左手で掴み、右手はポケットの奥底に伸びていた。右手に触れる物。それは人の肌を容易に切り裂く凶器であった。

「西浦は違う」

「……分かった」

左手を上村の胸倉から、右手を凶器から離し、冬夜は息を吐いた。冷静にと何度も言い聞かせて、沸騰しかけた頭を冷やしてゆく。

「疑って悪かった」

苦々しく上村は呟いた。

「俺の方こそ悪かった。少し感情的になりすぎた……まあとにかく、今は犯人探しよりも文化祭を成功させるために全力を注いでくれ」

冬夜は再び淡々と言葉を紡ぐ。

その変貌に振り回された上村は啞然としていた。そして当人は「一つ目はクリア」と呟き、早々と次の対策に頭を切り替えていた。

二人が教室に戻ると間もなくして、始業を知らせるチャイムが鳴り響いた。次の課題は西浦のケア。それは次の休み時間に行おうと決め、冬夜は授業の時間をぼんやりと過ごした。

しかし、その必要はなかった。西浦は思っていたより強かった。

休み時間になると、冬夜が励まさなくても修復計画を副委員長の山下と相談していた。そこで休み時間も利用して作業を進めることになったようで、クラスメイトに協力を仰いでいた。

一人ひとりに懇切丁寧に頼み込む西浦の瞳には強い光が宿っていた。それを見る限りは、もう大丈夫だと冬夜は思った。

冬夜の行動は大半が上手く進んでいた。

上村とは話をつけたし、そして西浦と山下を中心にクラスも明るさを取り戻している。このまま行けば問題は無いだろう。

後は容疑者 黒田 陸と接触するだけであった。

しかし、これがまた難しいことであることを冬夜は実感する。必死で作業を進める教室から黒田を抜け出させて話をするわけにはいかない。そんなことをすればクラスメイトの大半は気づいてしまうだろう。冬夜はやむを得ず、作業を手伝った。黒田との接触は帰路につく前に誰にも見つかることなく事を済ませねばならない。妙に難易度の増したミッションに、少しばかりの興奮を覚えながらも冬夜は作業を進めた。

そして時は訪れる。

二十時半を回って、クラスメイトが帰宅の準備に入った。鍵を閉

めるのは委員長の西浦ということになった。少しばかり涙目になりながらも、その役目を引き受けた彼女はクラスメイトが見守る中、教室を施錠し、職員室に鍵を戻した。既に事情は学校中に広まっているのか、教師たちも教室の鍵をしっかりと確認していた。

皆、散り散りに門から出てゆく中、冬夜は一人自転車置き場で人を待った。

「よう、ちよつといいか？」

空は雲ひとつ無い夜空に浮かぶ月が冬夜の笑みを照らした。

「な、何かな？」

それとは対照的に黒田は固い表情で答える。その瞳は怯えの色が酷く現れていた。

「釘を刺しと思うてな」

黒田は答えない。それに構わず冬夜は続けた。

「場所を移そう。他の人に聞かれた嫌だろう？」

黒田の横を過ぎ去り、人気の無い体育館の裏に向かおうと考えていた冬夜の耳に、僅かに声が届く。酷く震えた声であった。

「ない」

「ん？」

振り返った冬夜は、黒田の言葉の続きを待った。

「僕は何もしていない、僕じゃない」

そう言つて黒田は視線を上げた。血走った眼が冬夜を射抜く。

その瞳に冬夜の背筋を悪寒が抜けてゆく。その瞳は常人のものではなかった。過度のプレッシャーに襲われ、精神が疲弊し、狂人になる一歩手前のものであった。

「ぼ、僕じゃない、僕は関係ない……だ、だから聞かれて困ることなんてないッ！」

黒田は唾を撒き散らしながら喚く。

「……そうか、悪かつたな」

少しも悪びれた様子を見せずに冬夜は謝罪の言葉を述べた。その表情は余裕に溢れており、笑みすら零れていた。

「とりあえず、釘だけ刺しておいたからな」

黒田に背を向けた冬夜は、自転車置き場へと足を進める。その途中で、冬夜は一度だけ振り返った。冷ややかな光をきざした冬夜の瞳に黒田の姿が映る。

「これが最初にして最終の警告だ」

それだけ言うと黒田を残して、冬夜は去っていった。

冬夜にしては珍しく協力的に作業を手伝った。演劇の練習の合間には上村たちも小道具の製作を手伝ったお陰か、作業はスムーズに進んでゆく。

またクラスメイトが揃ってから目の前で鍵を閉めるようにしてからは、何事もなく時が過ぎていった。

そして文化祭の前日が訪れる。演劇の練習は総仕上げで、最後まで通して行われた。出来も悪くない。壊滅的だった背景の絵も見事に復活を遂げ、後は当日を待つだけとなった。

クラスメイトが一丸となって作業を進めてゆく姿。それに少しばかり安堵し、冬夜はため息を漏らした。作業を終えて、教室の鍵を閉めるためにクラスメイトが荷物をまとめ出てゆく。それを確認して、西浦が教室の鍵を閉めた。

他のクラスでは作業に残っている生徒が多いのか、喧騒が廊下を埋め尽くしていた。しかし、西浦の鍵を閉める音はクラスメイトの耳にやけに大きく響いた。そして鍵を閉めた西浦が振り返り、クラスメイトを見つめた。

「皆、お疲れ様。そしてありがとう。後は当日を頑張りましょう！」
彼女の言葉で締め、皆が散り散りになってゆく。クラスメイトの顔は皆、満足感や達成感に満たされている。本番は明日なのだが、と苦笑を漏らす冬夜に誰一人気づくことはなかった。

(さて……俺も帰るか)

教室の前に残っているのは主役の上村 祐介と橘 彩華、鍵を閉めた西浦かなみ、それに南雲 冬夜の四名だけであった。ゆっくりと下駄箱に向かって足を進めようとした時、冬夜の服の裾を僅かに引かれた。

冬夜はゆっくりと振り返ると、どことなく嬉しそうな色を滲ませる西浦が服の裾を握っていた。

「どうかしたか？」

「まだお礼言っただけな、って思っただけ」

「お礼？」と冬夜は首を傾げる。

「ほら、壊されていた日の朝……南雲くんがクラスを立て直してくれたじゃないの」

ああ、と納得がいったように冬夜は頷いた。

「大したことしてないよ。ただ、あそこで不毛な犯人探しなんてして、演劇に支障が出たら本末転倒だったろうに」

そこまで言うと、隣で話を聞いていた上村が顔をしかめた。

「まあ何はともあれ、間に合っただけ良かったじゃないか」

「うん、そうだね。本当にありがとう」

そう言った西浦は無邪気な笑みを冬夜に向ける。あの無敵で眩しい笑顔だった。しかし、このときの冬夜は笑い返すことができた。心の底から溢れてくる暖かい何かを彼を満たしていた。

冬夜は少し頬の筋肉がぎこちなく動くのを感じていた。心の底から笑えたのは、随分と久しぶりのことだったからだろう。

そして西浦は笑みを一層深くした。

「南雲くんの笑顔、初めて見た気がするよ」

「うん……同感」

隣で上村と話していた橋も意外そうに目を丸くしていた。

「かもな」

いつの間にか、いつの間にも眠そうな無表情に戻っていた冬夜はさらにと答える。

「勿体無いなあ、格好いいのに」

橋が茶化すように言う。それが面白くない、と言わんばかりに上村が不機嫌そうに視線を逸らした。

そして橋が爆弾を投下する。

「かなみが南雲のこと好きって言った時は気が狂ったのかって思ったけれど、これは案外英断だったと認めざるを得ないのかしら」

黒さの見え隠れする笑みをたたえたまま橋は言った。上村はその

場に固まった。冬夜は耳を疑った。そして西浦は橋を大きく見開いた目で見つめたまま微動だにしない。

四人の間には無言の時間が流れ、廊下を満たす喧騒がやけに耳に障る。

「え？」

上村が間の抜けた声を発して、時が流れ始める。橋は口が滑ったと言わんばかりに、片手で口元を隠している。固まっていた西浦の顔はいつしか真っ赤に染まり、目じりに涙を溜めたまま、ぷるぷると震えていた。噴火数秒前の活火山を思わせるような挙動に冬夜は耳を塞いだ。

「あ、彩華ああ！！」

西浦の絶叫が廊下に響き渡り、何事かと他の教室からも視線が集まる。

しかし、確信犯の橋は相変わらず微笑み、余裕を見せている。

「ごめんごめん、口が滑ったんだって」

橋はケタケタと笑いながら西浦の頭を撫で、続けて言った。

「それじゃ、お邪魔になりそうなので私たちは退散するね。ほら上

村、行くよ」

いまだ驚愕から立ち直っていない上村の背を押して、橋は去ってゆく。

残された冬夜と西浦の間には、とてつもなく気まずい空気が漂っており、お互いに口を開くことを躊躇っていた。立ち尽くす二人に興味を失ったのか、他の教室から向けられていた視線も少なくなつてゆく。

どうしたものか　顔を引きつらせたまま冬夜は頭をかいた。そんな些細な動作に、西浦はびくりと体を揺らした。

「まあ……鍵を返しに行こう」

このままでは埒が明かないと冬夜は切り出した。それに西浦は黙ったまま頷いた。

職員室までの道のりを俯いたままの西浦と並んで歩く。その道中、

まだ作業中の教室からは楽しそうな雰囲気も漏れてきていた。携帯を取り出し、時間を確認すると二十時四十分を回っている。下校時刻まで残すは十分と少しなのだが、灯りのついている教室は多い。窓の外に目をやれば闇に覆われていた。周辺は田畑に囲まれているために道路を照らす街灯は少なく、闇に吞まれそうなほど弱々しい灯りをともしていた。

見慣れた昼間の学校と違って、闇が侵食する校舎はどこか不気味な印象を受ける。独りだったら、さぞかし心細いに違いない。しかし、教室の前を通るたびに漏れてくる喧騒がそれを緩和する。きつと彼らにとつては、この不気味な雰囲気も非日常を味わえるスパイスのようなものだろう。

その喧騒も少しずつ遠くなってゆく。冬夜と西浦は階段を下りて職員室を目指していた。目的はもちろん教室を施錠した鍵を返しに行くためだ。

先ほどの廊下と違い、静寂が不安を煽る。それに耐えかねたのか、先に行く西浦が振り返った。

「ごめん、ね？」

喧騒から遠くなったせいも、西浦の声が静かな廊下に響く。しかし何故、謝るのか理解できない冬夜は首を傾げた。

「何が？」

「……さっきのこと」

耳まで赤く染めた西浦が再び俯いた。

「ああ」

無表情のまま冬夜は返す。

「気にするな」

「う、うん」

そうは言つものの、一番気になって仕方がないのは冬夜自身であった。

本当は西浦に聞いたかった。何故、こんな自分のことを気にしたのか、と。

冬夜は自身のことが何よりも嫌いだった覚えがある。それは随分と昔の記憶であったが、思い返せば何故そこまで嫌ったのか分からなくなっていた。理由はともかく、嫌いと言う感情だけが根強く残った。だから他人が自分のどこに惹かれたのか、それが気になって仕方がなかったのだ。

今すぐにも「何故」と問いたかったが、冬夜はそれを抑え込んだ。そして今は忘れてしまったかのように完璧な無表情を装っていた。だから、ここで話を蒸し返して欲しくなかった。他に人がいないと言う状況は自分に甘く囁く 聞けばいいのに、と。

二度目の誘惑の流れは予想以上に強く、決壊寸前の堤防を必死に補修する作業に冬夜は追われていた。これ以上、何も言わないでくれ そう切に願っていた。

「あのね」

しかし願いは届かず、西浦は言葉を紡ぐ。冬夜に答える余裕など無かった。ただ彼女の言葉を受け入れることしか出来なかった。

「私、南雲くんのことか」

やめる、と悲鳴を上げる堤防が嫌な音を立てて、大きな亀裂が走るのを感じた。

「とても気になっているのは事実なの」

先ほどまで荒れ狂うようにして堤防を攻め立てた感情の流れが、一瞬にして止まるのを感じた。それは西浦の冷静な物言いに違和感を覚えたからであった。

「……何故？」

「買出し行った時の話、覚えてる？」

冬夜は少し考えて、答えた。

「覚えてない、な」

「何よ、自分から聞いてきたくせに」

半ば呆れた様子の西浦は、冬夜に非難の視線を向けた。

「何で生きようと思えるのかって言っただでしょ？」

ああ、と思い出したように冬夜は頷く。それを見て西浦は続けた。

「あれから、いくら考えても私には分からなかったよ。きっと、それは私にとつて生きることが当然になつていいるから　なら、何で南雲くんはそんな疑問を抱くようになったのかな、って考えるようになったんだ」

「何故こうなつた、か？」

「うん」

西浦は真剣な眼差しで冬夜を見つめていた。

「私と対比すれば　それはね、南雲くんにとつて生きることが当然ではなかつたからつてことになるの。なら、何で南雲くんは生きることが当然だと思えなかつたのか」

冬夜は黙つたまま西浦の言葉の一つ一つに聞き入つていた。

「何で生きること疑問を持つのか？　生きることが辛い？　なら、それは何で？　私に教えてほしいの」

あなたを救いたいから　西浦の真剣な眼差しに混じるのは優しさ。それに気づいた時、冬夜は再び荒れ狂う感情の波に吞まれてしまった。既に亀裂の入つた堤防は悲鳴を上げる間もなく決壊してしまつたのであつた。

「何故、生きることが辛かつたのか、か。それは少し違うな……何をしてても楽しくなかつた」

「楽しくなかつた、つて……それは何で？」

理解できない、と言わんばかりに西浦は眉を顰めた。

「それは分からない。けど、わざわざ辛いことを乗り越えてまで、やりたいことなんて無かつた。だから生きることに対して魅力を感じないんだと思う」

腕を組み、首を傾げながら西浦は考え込む。冬夜は、その仕草が少し可愛いと思つた。

「辛いことがあるから、楽しいことも映えると思うんだけど」
少し考えて西浦は口を開いた。冬夜は考える間もなく、それに對し即座に返す。

「楽しいこと自体が無いのに　辛いことの先に希望が無いのに、

お前は頑張れるのか？」

再び考え込む西浦の姿を眺めながら、冬夜は答えを待った。遠くから僅かに声が聞こえてくる。楽しげな喧騒だ。きつと、まだ作業で残っている生徒が騒いでいるのだろう。しかし、それですら冬夜は疑問に思う。何故、彼らは楽しめるのか と。

ふと視線を西浦に戻すと相変わらず考え込んだままで答えが返ってくる気配は無かった。このままでも埒が明かないと、冬夜は廊下の途中で止まったままの足を進め始めた。

冬夜の足音が廊下に響く。それと同時に西浦は口を開いた。

「かな？」

予想以上に響いた足音のせいで、冬夜は西浦の声を聞き取れなかった。

「ん？」

ゆっくりと西浦の方に向き直る。彼女の瞳は戦意を失ってはいなかった。

「楽しもうとしないんじゃないかな？」

「楽しもうと……する？」

今度は冬夜が首を傾げる番になった。

「物事が楽しいから、人はそれを楽しめるのではないのか？」

違うよ と西浦は首を横に振った。

「どんな苦境であっても人は楽しもうと思えば楽しめるんだよ」

「たとえば忙しすぎて、一周回ってきて笑いがこみ上げてくるとか、そういう意味か？ あれは怒りやら悲しみやら、感情の制御が利かなくなつて、やむを得ず笑いに逃げていただけだと思っただが」

「違うよ」

再び西浦は首を振った。しかし、その表情はぱつとしない。

「何て言えばいいのかな。要は気の持ちよう、だと思っただけれど」

「

「なら何でも楽しい、と思えば楽しくなるものなのか？」

「ちよつと違うかな？ 何でも無駄なことはない、って自ら率先し

て楽しもうとすることが大切なんじゃないかな？ だって物事の楽しさに頼るだけじゃ受身すぎない？ もっと能動的に物事の楽しさを見出してみようよ？」

「そんなことができるのか？」

疑う冬夜に、西浦は頷く。

「そう難しいことじゃないよ。楽しもうとする心を常に持ち続けようって意識するだけでいいと思う。すべてを楽しもうと思うことで物事の楽しみを見出そうと動ける。でも逆に最初から受動的で嫌々物事を進めたら、楽しさからも目を背けてしまうと思うんだ」

それが出来れば困らない　そう言っただけで冬夜はため息をついた。難しいことではない、と西浦は言ったが、冬夜はそうは思えなかったのだ。

「それが出来れば世の中の自殺者も、ここまで増えなかったと思うんだけど」

う、と西浦は言葉に詰まった。そんな彼女に、今まで見せたことのない柔らかい笑みを向けて冬夜は続ける。

「でも、まあ気をつけてみるよ。ありがとう」

返事するのも忘れた西浦は、冬夜を見つめていた。そこにあつたのは今までに見たことのないほどの柔らかい笑みであつた。冬夜と言えば、いつも無表情か嫌そうに顔を歪ませるイメージしか無かつたために、西浦はその新鮮な表情に思わず息を呑んだ。

時が止まったかのように固まった西浦　それが不思議なのか、

冬夜は僅かに眉を顰め、彼女の顔を覗き込んだ。

「どうかした？」

「う、ううん、何でもないよ」

怪訝そうに問う冬夜から慌てて距離を取り、西浦は繕うように固い笑みを浮かべた。

それで誤魔化せた、と西浦は思えなかった。しかし、冬夜が追求してくることはなく、頷いて職員室に向かって足を進めだした。そ

れを見て西浦も気まずそうに彼の後を追った。

「なるほど。楽しもう、とすることか」

冬夜が静かに呟く。たった、それだけのことに西浦は過敏に反応し、体がびくりと跳ねた。

「ならば文化祭においては何を楽しむべきなのかな？ 君は何が楽しい？」

冬夜は進める足を止めずに質問を投げかけた。

「え、えっと文化祭？ そうだねえ……皆と協力して物事を成せること、かな？」

「それは楽しい、か？」

冬夜が僅かに顔を引きつらせたのを西浦は見逃さなかった。本心で楽しいとは思っていないようであった。

「うーん、南雲くんは一匹狼で大丈夫、って雰囲気だもんねえ」
でも、と西浦は続ける。

「それって寂しくない？ そう思ったことはない？」

冬夜は答えない。ただ、それを肯定しているわけではなく、腕を組み、本気で考え込んでいる。

「分からない」

「わ、分からないって自分のことじゃないの」

冬夜は言葉を選んで、少しずつ口にした。

「より正確に言うなら、忘れた……んだと思う」

「自信のない言い方だねえ」

西浦は呆れたように、ため息をついた。

「もう慣れてしまったからな。それが当然になってしまっただけ、今となっては分からないんだ」

やや苦さの見て取れる笑みを浮かべながら冬夜は言った。

でも と彼は続けようとして言いよどんだ。

「分かっているんだ すべては逃げだったんだ、ってね」

遠くを見つめたまま冬夜は呟くようにして言った。

西浦は、そんな冬夜の様子がどこか悲しげに見えた。

「行くう」

西浦の視線に気づいた冬夜は苦い笑みを保ったまま、少し恥ずかしげに廊下を進んだ。これで話は終わり、と言わんばかりに打ち切られたので西浦も追求することはなかった。

職員室で教室の鍵を返してから校門を出て別れるまで、二人の間は無言に支配された。別れ際も「またね」と一言だけ交わし、それぞれの帰路についた。

冬夜は思う。少し話すぎたかな　と。しかし彼は自身の変化に対しては気づくことはなかった。

荒んだ大地が雨で息を吹き込まれるように、冬夜の中でも何かが息を吹き返そうとしていた。

文化祭 当日

文化祭当日 校舎を包む喧騒は普段より一層強く、そして活気に溢れるものであった。

時間はまだ八時を回ったところだが、大半の生徒は既に学校に到着しているようだ。冬夜も普段より早く家を出たが、教室についてみると既に揃っているクラスメイトに驚きを隠せなかった。

「遅いよ、南雲くん！」

冬夜を見つけ、西浦は声を上げた。しかし、咎めるような声色ではない。むしろ、どこか嬉しそうな西浦の笑顔が冬夜を安心させた。とは言え、冬夜は携帯を開いて時刻を確認する。普段よりは十分以上も早く、遅いと言われるような時間ではなかった。

教室を見回すと、寝不足を思わせる容貌のクラスメイトが多い。ある者は目の下に薄くクマがあり、ある者は真っ赤に充血した目であった。教室を満たすのは緊張感だろうか。楽しそうにも見えるが、どこか動きが固かった。

「すまない」

少しも悪びれた様子を見せず、冬夜は相変わらずの無表情で一言発した。

「それにしても早いな？」

「そりゃ、そうでしょう？」

西浦は教室に置かれている背景や小道具を指差した。

「皆、心配だったんだよ」

無事を確認して安心したのか、西浦は無邪気な笑みを爆発させる。その目は少し赤い。彼女もやはり眠れなかったのだろうか、と冬夜は頭の隅で考えた。

「でも大丈夫だったんだよ。あとは皆で頑張るだけ」

教室に西浦の声が響くと、皆が頷いた。

何と言う団結力だ そう思いながらも、あれほどの困難を乗り

越えてきたのだから当然か、と冬夜は納得し、頷いた。彼は柔らかい笑みを向け、それに西浦も応える。

しかし、根付いた不安の種は冬夜を苛み続ける。

その日、冬夜が目覚めたのは、まだ日が昇っていない頃であった。珍しく夜の町に出ることなく、早い時間に布団に潜り込んだせいか、五時前に目が覚めてしまったのだ。

冬夜は上半身を起こすと、額から流れ落ちる汗を拭った。汗をかくほど暑いわけではない。

「……また、あの夢か」

そう零した冬夜の顔は険しい。額から流れる汗が新たに筋を作った。

何度も上村を刺す、あの後姿が脳裏にこびり付いて離れなかった。それが以前と変わらぬ夢だったら、まだ良かった。しかし、今回見た夢は少し違うものであった。

以前と同じように冬夜は上村を刺し続ける自分の後姿を見つめていると思っていた。湧いてくる嫌悪感にも慣れている。表情は険しいものの、目をそらすことなく冬夜はそれを見つめていた。

そして異変が起きる。上村を何度も貫いていた刃が振り上げたまま、ぴたりと止まった。今までに見たことの無い変化に冬夜は訝しむように後姿を見据えた。

そして自身だと思い込んでいた、それが振り返った。その目はありったけの絵の具の色を混ぜ合わせたかのような濁った色を宿している。その両眼に捉えられた冬夜は悪寒が背骨を抜けてゆくのを感じた。

「誰だ!??」

冬夜は叫んだ。それは、こちらを向いているはずなのに顔を認識できない。ただ混沌を宿す瞳だけが強く印象に残り、そこで夢が途切れて目覚めたのであった。

何事もなければいい　そう願ってはいるが、冬夜は今までと違った夢に嫌な予感を拭いきれなかった。

毎朝の日課になりつつあるトレーニングを済ませ、朝の支度を済ませると、家を出るまで随分と時間が余ってしまった。だからと言って早く学校へ向かうのは怖かった。何か起きているのを目の当たりにしたくなかったのだ。しかし家でじっと待っていると、気になつて仕方がなく、落ち着くことができなかつた。

散々悩んだ挙句、冬夜は中途半端な時間に家を出た。早くもなく、遅くもなく　そんな時間であつた。

教室では最後の打ち合わせか、上村と橘を中心に出演するメンバーが真剣な顔で話し込んでいた。

ここまで頑張つてきた姿を見ていただけに、この演劇が失敗することなんて見たくない　そう、冬夜は思つていた。それと同時に彼は気づく。自分が、まだ人間的な思考ができることに。

思わず漏れる笑み　そこに苦々しさはなく、優しくクラスメイトを見守る眼差しがあつた。

（変わった、のか？）

冬夜は何が変わつたのかまでは分からないために、つい疑問系になつてしまつが、何となく変わった自分を認識しつつあつた。以前のような破壊衝動に駆られることも少なくなつたからだ。

騒がしい教室で、冬夜は机に頬杖をつきながら窓の外を眺めながら、そんなことを考えていた。

ふと肩を叩かれ、振り返ると満面の笑みをたたえた西浦の姿があつた。

「何？」

冬夜は簡潔に問う。しかし、以前のように刺々しい雰囲気は無かつた。

「私たちの公演は午後からだし、一緒に文化祭、回ろうよ？」

その言葉に一瞬だけ教室が無音と化した。そして冬夜は、やっぱりとした敵意を含む視線を向けられ、たじろいだ。それは西浦の背後から発されており、主に男子からのものであつた。

綺麗と言つにはやや幼い顔立ちの西浦だが、整つた顔立ち是非常

に可愛らしい。そのために密かに男子から想いを寄せられていた。そんな彼女からお誘いを受ければ、クラス いや同級生の男子の大半を敵に回しかねない。その事実気づいた冬夜の額に冷や汗が浮かんだ。

どう断れば と考える間もなく西浦は続ける。

「せつかく一年に一回しかない文化祭なんだから楽しまないと損だよ」

向けられるのは反則的な強さを誇る、あの無邪気な笑み まるで走ってきた一トントラックに轢かれたかのような衝撃が冬夜の脳髓を揺らす。

ああ、そうか 西浦にも聞こえないほど小さく呟き、冬夜は笑った。

「そうだな」

そう言っただけで冬夜は席を立った。そして西浦に腕を引かれるがままに、教室を後にした。その背に恨みがましい視線を感じながら。

しかし、そこで一息つけるわけもなく、やはり廊下に出ても視線が集まってしまふ。何とかならないものか、と冬夜は考える。しかし、どれだけ腕を引かれても乱暴に振り払うことはしなかった。

小さな背中では冬夜を引つ張って、どんどん進んでゆく。廊下ですれ違ふ同級生たちは西浦に声をかけ、そして冬夜に奇異なものを見るような視線を向けた。

しかし、それも当然だと冬夜は思う。西浦は活発で、成績も良く、運動も出来る。そんな凄い彼女がクラスでも目立たず、まだ同学年の大半が知らないような少年 冬夜を引つ張りまわしているのだから。

逃亡生活の時とは一味違った注目の集まり方だった。冬夜は顔を伏せ、じつと西浦の背中だけを見つめていた。

（たぶん、俺は西浦のお陰で変わったんだらうな）

自分の中で何が変わったのかは分からないが、きつかけをくれたのは、きつと西浦だらう。向けられる無邪気な笑みを、冬夜は失い

たくなかった。そのためならば、この命を懸けることですら厭わな
いだろう。

今まで散々、人々を傷つけてきた自分が何かを守るために全力を
注ぐ。そのことに冬夜は違和感を覚え、つい自嘲するように苦い
笑みが漏れてしまった。

「どうしたの？」

その表情を見逃さなかった西浦が問う。先ほどと違って、少し表
情が曇っている。

「あ、ごめん。無理やり引っ張り」

「いや」

西浦の言葉を遮るように、冬夜は否定する。

「こちらこそ、ごめん。少しだけ考え事をしてたんだ」

「何を考えてたの？ 前の話のこと？」

隠すことなく冬夜は頷く。

「ああ、何が楽しいのか今でも分からないはまだ」

その言葉を聞いた西浦の表情が不安なものへと変わってゆく。

「でも生きたい、とは思えるようになったよ」

理由は言わない。否、言えなかった。この気持ちが一体何なのか
理解できていない冬夜は、それを口にすることを恐れたのだ。

きよとんと冬夜を眺めていた西浦の顔に表情が戻ってくる。厚い
雲が覆う空ですら切り裂き、快晴に変えてしまいそうなほどの威力
を持つ笑顔が、そこにはあった。

「そっか」

嬉しそうに呟く西浦は止めかけていた足を進めだした。その後を
淡い微笑みをたたえた冬夜は追うのであった。

同学年の教室を回り終えた二人は、一度教室に戻った。楽しい時
間が過ぎるのは早いもので、気づけば冬夜のクラスの演劇の時間ま
で三十分しかなかったのだ。

先ほどまでと違い、教室の空気が張り詰めていた。橘と上村、他
数名は着替えを済ませて、静かに時を待っている。その雰囲気は吞

まれたのか隣の西浦も表情が固くなった。そんな中、相変わらずの無表情で冬夜は、西浦の後に続いて教室に姿を現した。視線 主に男子から向けられる、それは軽やかに無視する。

そして向けるのは教室の隅、そこにいる一人の少年であった。寝不足でも、そこまで酷く血走るものかと思わせるほどの赤い目で床を見つめたまま彼は動かない。演劇に出るわけでもないのに、上村や橘より酷い緊張感漂わせていた。

これは何かが起こる、むしろ起きない方が奇跡だろう。冬夜は思わず、ため息を漏らした。

そして視線を西浦に移した。少し緊張しているのか表情は固い。ふと冬夜の頭を過ぎったのは、目を真っ赤に泣き腫らした西浦の顔であった。

何かが起きれば、この子はまた泣くだろう。ならば

(何かを起こさせないための努力が必要か)

西浦の涙は見たくない、彼女には笑っていて欲しい 　　そう願う
冬夜は、誰に知られることなく拳を強く握りこんだ。

文化祭 舞台裏

演劇は順調に進んでいた。

舞台では降り注ぐスポットライトの熱で額に汗を浮かばせながら上村が叫んでいた。マイクを使っていないので、声を張らなければ観客に届かないのだ。そこに橋も加わり演劇が進んでゆく。

舞台の袖では西浦や、その他のクラスメイトが固唾を呑んで演劇を見守っていた。しかし、そこに冬夜の姿は無かった。

体育館から漏れてくる笑い声が耳に届くと、冬夜は安堵したように息を吐いた。きつと演劇は順調に進んでいるのだろう。

満足そうに体育館を眺める冬夜 彼は体育館のすぐ傍にある倉庫の裏にいた。人目の届かない場所を選ぼうとした結果であった。

そして思い出したように冬夜は視線を戻す。目の前にいるのは落ち着かなさそうに血走った眼を忙しく走らせる少年が一人 彼に向けて冬夜は静かに口を開いた。

「いい感じで進んでいるみたいだな」

冬夜の声は穏やかなものであった。しかし、少年はそれを殺意のこもった視線で射抜く。

少年 黒田 陸を舞台の袖から連れ出したのは冬夜であった。

薄暗い舞台裏で黒田の狂気に満ちた笑みを見た冬夜は、即座に行動に出る。口を押さえ、喉元を絞めながらも、僅かな物音で済ませて、外へと引きずり出したのだ。

そのためか、冬夜を射抜く黒田の視線には敵意を通り越して殺意が込められていた。そんな様子の黒田を眺めながら、冬夜は苦笑を漏らす。

「まあ落ち着けよ。そんなに睨まなくても」

「うっ、うるさい！」

唾を撒き散らしながら黒田は叫んだ。これ以上騒がれて、人が集

まると都合が悪くなる　冬夜はさつさと事を済ませようと、微笑みを一瞬にして消し去り、冷たい視線を黒田に向けた。

「何をしようとした？」

一変する冬夜の雰囲気気圧されたのか、黒田の目が泳いだ。

「聞いているんだ、答えるよ。隠し持っている、それで何をするつもりだった？」

容赦なく冬夜は追求した。それに対しても答えず、黒田は俯いたまま体を小刻みに震わせている。

黒田が隠し持っている物　冬夜は、それが何なのか見当がついていた。全長二十センチを超える、それは使い方によっては人を絶命に至らしめる物だろう。それを見破ることができたのは、黒田の動きが普段とは比べ物にならないほどに酷くぎこちなかったからであつた。きつと抜き身のまま懐に隠し持っているのだろう。それに気を遣つて、派手に動き回ることができないに違いない　冬夜はそう推測していた。そして、それは正しかつたことを次の瞬間には理解する。

黒田は冬夜の問いに答えることはなかつた。しかし、その代わりに彼が懐から取り出したのは、鋭利な輝きを放つナイフであつた。その行動が何よりも冬夜の問いに応えていた。

「話で済ませることはできないか？」

黒田は答えない。そのまま彼は地を蹴り、冬夜に向かって突進を開始した。お互いの距離は五メートルほど、どれだけ運動神経が悪くても一秒あれば詰められる距離だ。

ため息をつく間すら与えられなかつたことを冬夜は嘆きながらもナイフを携えた突進に対応した。腕で黒田の服を掴み、突進の起動を逸らしながら身を擦る。自分の勢いに負け、黒田はよろめいた。その隙に冬夜は大きく間合いを取り、一息ついた。

「もう一度だけ聞く、話で済ませないか？」

願うように冬夜は言った。しかし、黒田は聞く耳を持たないと言わんばかりに二度目の突進が開始される。

仕方ない　冬夜は再び繰り出されるナイフを躲して、ため息をついた。しかし、今度はよろめくことなく、素早く体勢を立て直した黒田がナイフを突き出す。狙いは首　頸動脈の辺りを狙ったのだろう。しかし、それは首に届くことはなかった。

金属がぶつかり合う鈍い音が周囲に響く。

ナイフの一撃を受け止めたそれを見て、黒田は声にならない驚愕を顔に張り付かせた。黒田のナイフによる一撃を防いだのは、裁ちバサミであった。そんな物で止められたことが信じられないのか、追撃が来ることはなかった。

冬夜はナイフを弾いて、再び間合いを測る。先ほどより、その間合いは近くなっていた。

「三度目……これで最後だ。話で済ませることができないか？」

黒田は黙ったまま、驚愕から殺意へと瞳の色を変えてゆく。

やむを得まい　冬夜もハサミを構えた。それと同時に黒田は吠え、混沌の色が濃く目を大きく見開いて、ナイフを突き出す。それを難なくハサミで受け流しながら、冬夜は考えた。

どうすれば事を大きくすることなく、この場を乗り切れるだろうか　しかし、相手は聞く耳を持っていない。そんなことを考えながら繰り出されるナイフを避け続けていた。思わず漏れるため息と同時に頬をナイフが掠めた。

頬に電気が走ったかのような衝撃が走り、じんわりと熱くなってくるのを冬夜は感じていた。

（まずは武器を何とかしないとダメだな）

その判断と同時に冬夜の瞳に冷たい色が映る。振り回すナイフをハサミで受け流すと同時に、バランスを崩した黒田に向かって冬夜は力強く踏み込んだ。振るうのはハサミを持っていない逆の手　拳を握り、渾身の力で黒田の頬を打ち抜いた。

鍛えられた体躯が振り絞る力は予想以上に強かった。その上に黒田がバランスを崩したタイミングに、冬夜は体重を乗せるように打ち下ろしたせいも、黒田は激しく転がってゆく。それと同時に握っ

ていたナイフが地を滑り、二人と少し離れてたところで止まった。しばらく転がって止まった黒田は仰向けのまま動かない。やりすぎたか、と冬夜は思った。

今まで人を殺してきたことはあった冬夜だが、手加減をしたことはない。その為に力加減が上手く出来ずに、予想以上に飛んでいった黒田に驚き、ただ見つめることしかできなかった。

「……大丈夫か？」

襲い掛かってきた相手を心配するのも変な話だな、と苦笑を漏らしながら冬夜は言った。

黒田から言葉が返ってくることはなかった。ただ、じつと空を見つめたまま体を震わせている。意識はあるようだ。

冬夜は先にナイフを回収してから、黒田の下まで歩み寄った。

「大丈夫、か？」

冬夜は黒田の顔を覗き込んだ。その顔は涙と鼻血でぐしゃぐしゃになっていた。彼は何度も小さく「クソ」と呟いていた。

「何故こんなことをしようとしたんだ？」

「な、何でだつて？」

黒田の目がぎよろりと動いて、冬夜を睨みつけた。

黒田の顔をよく見れば、顔中に痣が見受けられる。それらは薄い物から最近出来たような濃い物まで多数あった。そこで冬夜は理解する。

「いじめられてるのか？」

黒田は答えることなかったが、その言葉にびくりと体を震わせた。

「誰にやられたんだ？」

「こ、答えたら助けてくれるのか？」

にやりと黒田は凶悪な笑みを浮かべたが、涙がその威力を半減させた。

どこまでも反抗的な態度の黒田にため息をつきながら冬夜は答える。

「ああ、手伝うぐらいならできるだろ？ で、誰にやられてるんだ

「？」

迷いなく答える冬夜から目を逸らした黒田の口が僅かに動いた。

「ん？」

「う、上村……とその取り巻き」

冬夜は黙ったまま、それを聞いていた。そして更に呆れたように、深いため息をついた。

「あいつは……誰か苛めてないと生きていけない体質なのか？」

「え？」

怪訝そうに見上げてくる黒田に「何でもない」と答えながらも、冬夜は頭が痛くなってくるのを感じていた。

「で、まあ苛められた仕返しに、このナイフで刺そうとでも考えていたのか？」

黒田は冬夜から視線を逸らした。その表情は苦々しい。分かりやすい反応から肯定と受け取り、冬夜は話を進めてゆく。

「まあ、その気持ちは分からなくないけどなあ……」

そう言っただけで冬夜は黒田のすぐ傍に腰を下ろす。それを驚いたように黒田は見つめていた。

自分も経験したことからこそ、彼の辛さを冬夜は理解できた。苛められてる間は肉体的にも精神的にも地獄であった。誰にも苦しみを理解されず、助けられることなく、見てみぬふり。ただ無いものとして扱われ、冬夜の心は疲弊していった。

それが一つの要因で冬夜は狂うに至ってしまった。生きるということに大して執着を持てなかったことも、狂うに至った要因の一つだろう。

きつと黒田も苛められる日々に絶望してしまったのだろう。それが故に、このような凶行に走ろうとしたのだ。まるで冬夜の代わりに殺人鬼の道を守るかのように。

それに気づいた時、冬夜は慄然とした。

（俺の……代わり？）

苛められたのも冬夜の代わり、そして上村を殺そうとしたのも冬

夜の代わり。だとしたら。

「南雲……くん？」

黙りこんだ冬夜を覗き込むように、黒田は身を起こした。

「いや……何でもない」

馬鹿げた推測を振り払うかのように、冬夜は頭を振った。

とりあえず　そう切り出した冬夜は話題を変えるようにして続けた。

「苛められないようにするには、一発がつんと殴ってやればいいんだ。それで充分だ」

そう言って冬夜は立ち上がった。

「場は整えてやる。武器は無しだ、拳でやり合え」

「で、でも」

「なら、このままじつと耐え続けるのか？」

黒田は黙って俯いた。

「こんな物に頼るなよ。自らの力で道を切り開け」

殺人鬼の道を進まないためにも　黒田から奪ったナイフを手で器用に回しながら、冬夜は言った。

「ぼ、僕にはできないよ」

「人を殺すほどの覚悟決めたお前に出来ないことなんてないだろう？　全力で殴ってやればいいのさ。それだけでお前の未来は劇的に変わるはずだ」

黒田は再び俯いて黙り込んだ。

「希望を持って　と俺が言うのも変だけどな。案外、捨てた物じゃないんだ、この世界は」

空を仰ぎながら冬夜は言った。その表情は柔らかく、何かに満たされていた。

「なるほど、西浦の言っていたことは、こついうことだったのかな　ぼんやりと呟いた冬夜は続けた。

「すべては本人の心持次第で世界は変わる、変えられるんだ。俺が出来ることはお膳立てまでだ。後はお前次第ってことさ」

冬夜は視線を黒田に戻した。相変わらず俯いて表情は読めない。「どうするんだ？」

立ち上がってくれ　そう願いながら冬夜は再び問いかけたが、黒田は答えない。俯いているために表情も読めず、冬夜は静かに待った。

どれぐらいの時間が経ったのか分からなくなりそうになったこと、黒田はゆっくりと顔を上げた。その目を見て、冬夜はほっと胸を撫で下ろした。

「分かった、やってみる」

強い意志を感じさせる光をきざした黒田の瞳が冬夜を射抜く。良い顔になった黒田を見て、冬夜は思わず笑みが漏れた。

ほぼ、それと同時に体育館から漏れてきた歓声と拍手に二人の視線は体育館へと向いた。

「終わったみたいだな」

冬夜は小さく零したが、黒田は何も言わなかった。そんな黒田の反応は気に留めず、何事もなく終演を迎えたことに冬夜は満足して頬を緩ませた。

しばらくの間、二人は体育館をぼんやりと眺めていた。歓声が弱まってくるにつれて、冬夜も無表情に戻ってゆく。

「さて、と」

小さく呟いて、冬夜は携帯を取り出した。それに反応した黒田は、じっと冬夜を見つめている。その視線に冬夜も気づいているが無視して手を進めた。

「これでよし」

携帯を閉じ、満足そうに冬夜は呟いた。

耳がおかしい 体育館を埋め尽くす歓声のせいか、耳が小さな音をなかなか拾ってくれない。それに加えて、このメールだ。

南雲 夏樹は苛立っていた。はつきり言うならば、歓声を送られるほど劇の完成度は高くない。なら何故 大半の歓声は上村に送られたものであった。女の子を虜にする甘いマスクに勉強もでき、サッカーにおいても一年生でレギュラーを獲得する彼は、夏樹だけでなく想いを寄せる女性が多い。

しかし、夏樹は外面だけで上村に群がる女性を蔑視していた。

(上村さんのこと、何も知らないくせに)

小さく零して夏樹は先ほど届いたメールの対応を済ませる。

それにしても何故こんなメールが届いたのか夏樹には理解できなかった。夏樹はもう一度、先ほど届いたメールの本文に目を通す。時間と場所を記してるので、そこに行ってみれば分かることだ。一体、何が目的でこんなメールを送りつけてきたのか、相変わらず分からないままの夏樹であったが、その足は記されていた場所へと向かっていった。

演劇が終わると同時に、上村は嬉しそうに体育館を後にした。そして、いつの間にか冬夜の姿も消えていた。

西浦は可愛らしい顔を不機嫌そうに膨らませ、愚痴を零しながらも、冬夜を必死に探す。

「まったたく……何してるのよ」

西浦は体育館の周辺を一回りしてみたが、冬夜の姿はどこにもない。先に教室に戻ったクラスメイトにメールで聞いてみるが、教室にもいないらしい。

一体どこにいるのだろうか 西浦の表情は、先ほどまでの不機嫌そうなものと違い、心配の色が見て取れた。人気のない体育館の

裏で考え込むように腕を組んでいた西浦の肩がそつと叩かれる。

「あの」

遠慮がちにかけられた声に振り返ると、整った顔立ちに少し幼さを残した少女が立っていた。私服なので、ここの生徒ではないことが分かった。

「体育倉庫つて、どこにありますか？」

「倉庫、ですか？」

文化祭なので生徒以外の人が校内にいることは、そう珍しいことではない。しかし、問われた場所が倉庫となると違和感を覚える。

「はい……えつと、そこで知り合いの人と待ち合わせしてるんです」
返事の後、少し考えてから少女は続けた。それを聞いて西浦も納得したのか、先ほど抱いた疑問のこともすっかり忘れ去り、歩き出した。

「案内しますよ」

「え、あー……どうも、です」

少女は驚いた後に、少し表情に陰りが見えた。しかし、それを見逃した西浦は「こちらですよ」と満面の笑みで少女を案内してゆく。二人の出会った場所から間もなくして、倉庫が見えた。西浦は少女に振り返って、倉庫を指差した。

「あれで」

「どういうつもりだ！」

西浦の言葉を遮るように怒声が響いた。西浦も少女もそれに驚いたのか、その場に固まってしまった。

二人の位置から、その声の主は見えない。先に動き始めたのは少女の方だった。

「……上村さん！」

この先は何やら危険な気配がする。少女を行かせてはならないと西浦は判断したが、止める間もなく少女は駆けて行く。

「ま、待って！」

少女の後を追って西浦も駆け出した。

「どういうことだ？」

倉庫の裏に姿を現した上村の表情が固まった。

そこには冬夜と黒田がいた。黒田は頬を腫らしているし、冬夜も頬を切っているのか血を流している。夏樹に呼ばれて、この場にやってきた上村としては現状が理解できずにいた。

「よう、いじめっ子」

冬夜がにやりと意地の悪そうな笑みを浮かべ、上村の背筋が凍りつく。

何故だかは分からないが、ここに来たのは間違いだったと上村は考える。鳴り響く警鐘に従って、この場から逃げるべきか　そう考えていた時、黒田が冬夜の前に出た。

「南雲くん、ありがとう。ここからは僕が……」

「分かった、頑張れよ」

そう言つて後ろに下がった冬夜は楽しそうに二人を眺めている。その視線で気が散りそうになる上村であったが、今は目の前の黒田に視線を向ける。

「何だよ？」

訝しむように上村は問う。しかし、それに答えることなく黒田は駆けだした。二人の間は一瞬にして詰まる。そして黒田は拳を力強く握り、それを振り下ろした。

「うお!？」

上村は咄嗟に後ろに飛んで、拳を避けた。驚愕の滲んだ表情で黒田を睨みつけ、彼は吠える。

「どういうつもりだ!」

黒田を満たすのは興奮か、それとも恐怖か　体を震わせながら、上村を睨みつけていた。その瞳ははまだ戦意を失っていないことから、前者だろう。

そんな黒田の背中を見つめながら、冬夜は相変わらず微笑みをたたえながら静観していた。

「答えるよ、黒田！」

「うるさいっ！」

黒田の言葉に、もはや震えはなかった。そのまま彼は続ける。

「僕は、僕の道を自らで切り開く！」

そして黒田は拳を再び強く握り締めた。

それを満足そうに頷きながら冬夜は眺めていた。彼は変わりつつある。どちらに転ぼうとも悪い方には行くまい。そう考えていた。叫び声と同時に黒田が上村に向かって駆ける。それを牽制するよう上村はサッカーのボレーのように黒田の側面に蹴りを入れた。それに何とか反応し、腕で直撃を免れた黒田であったが、体勢が大きく揺らぐ。それを見て、上村は黒田から距離を取った。

しかし、体勢を立て直して、再び上村に駆けてゆく黒田の瞳は戦意が漲っていた。

それを迎えたんと放たれる上村の蹴り。しかし、目測を誤ったのか、それとも予想以上に黒田が速かったのか。蹴りは充分な威力を発揮する前に黒田を襲う。しかし、黒田の突進の勢いに負け、上村の体が大きく揺らいだ。

上村の表情が驚愕で歪む。だが黒田の瞳に迷いはない。

しかし、そこで誰よりも驚愕していたのは冬夜であった。倉庫の影から姿を現した人物が、上村と黒田の間に割って入ろうとしたのだ。黒田はそれに気づいていない。振り上げた拳はゆっくりと上村の。いや割り込んだ少女の下へと向かう。

少女を見つけたと同時に飛び出していた冬夜は、既に三人の下まで距離を詰めていた。少女に向かってゆく拳を、冬夜は横から叩いて軌道を逸らす。フルスイングを空振った黒田は勢い余って地を転がったり、上村の横で仰向けになった。

上村と少女は、冬夜以上の驚愕を顔に張り付かせて、その場に固まっていた。

「あ、れ？」

黒田が声を漏らした。何が起きたのか理解できていないらしい。

しかし、冬夜は黒田に視線を向けることなく、少女に怒鳴った。
「何をしている！」

冬夜の様子を、固まったまま見つめる少女の目じりには涙が浮かんでいた。今まで冬夜に怒鳴られたことのなかった夏樹は怯えた表情で冬夜を見つめていた。

「だ、だって」

「どけ」

冬夜は言い訳を聞かず、夏樹を引っ張って上村から離す。

「おい、待てよ！」

それが気に入らない、と言わんばかりに上村の瞳に怒りが浮かぶ。夏樹を押さえたまま、冬夜は上村の方を振り返った。

「後ろがお留守だぜ？」

にやりと意地の悪そうな笑みを浮かべた冬夜。その刹那、上村は頬に衝撃を受け、世界がぐるりと回ったような感覚に陥った。冷たい地面を頬で感じ、やっと現状を把握する。

「おお、ナイスパンチ」

「上村さんっ！」

感心したように黒田を褒める冬夜は、その腕の中で暴れる夏樹を軽々と押さえつける。

息を切らしながらも、満足そうな笑みを浮かべた黒田を視線が合った。

「簡単なことだっただろう？」

黒田は頷きながら、その場に崩れ落ちた。仰向けに倒れた彼は満足そうに空を仰ぎ見た。

「離せっ、馬鹿兄！」

黒田から暴れる夏樹に視線を戻し、冬夜は呆れたように苦笑を漏らす。そこで彼は固まった。

夏樹の更に残るで、こちらを見ている人物。彼女は強張った表情のまま、じっとこちらを見ていた。冬夜は心臓の鼓動が速まるのを感じていた。

「見てたのか？」

冬夜の言葉に、西浦はこくりと頷いて答える。

面倒くさいことになった　冬夜は苛立ちを隠そうとせず、頭をかいた。

「説明が必要か？」

再びこくりと頷く西浦に、簡潔に説明してしまおう、と冬夜は口を開いた。

「おい、夏樹。お前も聞け」

暴れる夏樹を無理やり制し、西浦と二人並べて、冬夜は説明を開始した。

上村のいじめの件。そして、いじめられていた黒田の件。それを解決するために上村を呼び出し、黒田と殴り合いの喧嘩をさせたことを話した　黒田がナイフを持ち出していたこと以外は伏せることなく、二人に説明した。

少し落ち着いた夏樹だが、相変わらず敵意の籠った視線を冬夜に向けている。西浦は最初は驚いていたが、今は落ち着きを取り戻して、やや悲しそうに俯いた。

「こんな方法しか無かった、のかな？」

ぼつりと西浦が呟いた。

「さあ、どうだろうな。ただ俺には、こんな方法しか思いつかなかった」

「なら相談ぐらいしてくれればいいのに」

そう口を尖らせた西浦。彼女の言葉に反論はできたが、冬夜は黙って苦笑で応えた。

冷静に考えると、黒田を落ち着けた後なら西浦にも相談できたかもしれない　そう思ったからであった。事を早急に済ませようと少し焦ったのかもしれない。そこは冬夜にとっても反省点だ。

「それでも喧嘩させることはなかったんじゃないの」

憚然と夏樹が言った。

「だから俺には、これ以外の方法を思いつかなかったと言っただろう」

？ 体験談だ。俺はコイツを殴ったことで自身へのいじめを止めることができた」

いつの間にか、上半身を起こしていた上村を指差しながら冬夜が言う。それに反応して上村は体をびくりと震わせた。その奥では、所在無さそうに静かに佇んでいる黒田の姿もあった。

「まあどちらにせよ、こいつにはそろそろ下らんことをやめてもらうべきだと思うんだが？」

「だから、ってその方法がダメだって言ってるんでしょが！」

夏樹が声を荒らげるが、今更そんなこと言われたって仕方が無い。冬夜は「お黙り」と夏樹の脳天に手刀を振り下ろし、静かにさせた。涙目になりながら頭を押さえた夏樹の視線に恨みがましいものを感じたが、冬夜はそれを無視して話を進める。

「で、上村に問う。お前は誰かいじめてないと生きれないとか言っってしまう新しい人種だったりするの？ 俺をいじめれなくなつて、即座に次のヤツを見つけるとか、どれほど人をいじめたいんだ、お前は？」

上村は悔しそうな表情を一瞬見せたが、何も言わずに俯いた。

「お兄は何にも知らないくせに！」

夏樹が再び声を荒らげた。今回は冬夜も止めることなく、彼女の言葉を促した。

「上村さんがどれほど苦しんできたか知ってるの？ 何も知らないくせに……ッ！」

「ああ、知らないね」

肩を竦めながら冬夜は答えた。それは夏樹を挑発しているようにも見える。

「おい、夏樹。もういいか」

「よくない！」

夏樹を止めようとした上村は一蹴され、再び黙り込んだ。それを見て夏樹は口を開いた。

「どれほど、お兄が上村さんの負担になっていたか知ってるの？」

どれだけ努力しても、お兄にだけは勝てないって何度も何度も零してたんだよ。それでも諦めることなく、努力を重ねてきた上村さんに、お兄は何て言ったか覚えてる？」

そんなことがあったのか　そんなことを考えている冬夜が当時、何を言ったのなんて覚えていないはずも無く、彼は首を横に振った。「そう、の一言だよ」

自分らしい反応だな、と冬夜は苦笑を漏らした。それを「笑い事じゃない！」と夏樹は咎める。

「どれほど努力してもお兄には勝てなくて、その上に眼中にすら入ることができなかったことが、どれほど上村さんを苦しめたか知ってる？　私はね、このとき思ったよ。無関心って、ここまで人を傷つけるんだな、って。それなのにお兄の態度は変わらなかった」

冬夜は黙ったまま聞いていた。どうやら自分の行動が上村を追い詰めていたらしい　それは分かったが、具体的に冬夜がどうすれば上村が納得するのかまでは分からなかった。

「だったら、俺は結局どうすればいいんだ？」

冬夜は答えを求めたが、それに夏樹は答えない。何かを言おうとして彼女は口をつぐんでしまった。

「……俺の視界に入らないぐらいまで、先に進んでくれれば良かったんだ」

一斉に声の主に視線が集まる。上村は俯いたまま、言葉を紡いだ。「俺より後にサッカーを始めたのに、気づけばお前はレギュラーになって、あつという間に俺を抜いてしまった……だから夏樹に聞いたよ、あいつは一体どんな練習してるんだ、ってね。だが、返ってきた答えは家で練習なんてしてない、だった」

顔を上げた上村の表情は疲れが滲んでいた。静かに彼は続ける。「勉強だつてそうだ……お前は大した努力もせずに俺を軽々と超えていった」

「努力してない、つてお前が何故、断言できる？」

「夏樹に聞いた」

静かに答える上村に、冬夜はつい苦笑が漏れる。その視線を一度、夏樹に向けてやると、彼女はばつが悪そうに視線を逸らした。

「まあ間違つてはないから否定はしない」

冬夜は上村に視線を戻しながら答えた。それに対し今度は上村が苦笑を漏らす。

「そうだろうな……学校でもお前の授業中の態度を見て、啞然としたよ。一切、ノートを取らずに教科書を開きながら、教師の話聞くだけ　酷い時なんて話を聞いてすらいない。それであの成績が取れるんだ。こういうのを天才なんだ、って思い知らされたよ」

薄く上村は笑いながら話を続けるが、冬夜はぴんと来なかった。自分が天才だなんて言われたって、そうは思えない。ただ自分の振る舞い、行動が上村を追い詰めていたことだけは分かった。

「お前みたいなヤツは努力して、先に進んで……凡人の見えないところまで行つてくれよ」

上村は言葉を搾り出すように言つて、俯いた。その後ろで話を聞いていた黒田も、どことなく哀れみの色を帯びた瞳で上村を眺めている。

冬夜も黙つて、上村を見つめていた。いつものように表情は無く、ただ静かに彼を見据えていた。誰もが重い雰囲気呑まれ、口を開くことを躊躇つた　ただ一人を除いて。

「そんなこと言われてもなあ……」

困つたように冬夜は頭を掻いた。夏樹は「空気読めないのか、この馬鹿兄は」と言わんばかりに冬夜を睨みつけているし、西浦は啞然とした表情のまま冬夜を見つめている。黒田もすべてはお前が原因だったのか、と非難の視線を向けているが、それらの全てを無視して冬夜は口を開いた。

「俺がどうしようとか何を選ぼうと俺の勝手だろう。何故、お前の都合を加味して俺が進路を選ばなければならぬんだ？　それは仲良しこよしで同じ学校に行こうぜ、って言っているのと同じぐらい愚かなことだろう？」

大体　と冬夜は続ける。

「お前は俺のこと天才とか言ったし、それを羨むような発言してたけどさ、俺だつてお前の社交性とか容姿とかに嫉妬を覚えた事だつてあつたんだぜ？　人は自分が持つてないものを欲するんだよ。無い物を得ようとすることも大事かもしれないが、今ある物で現状を打破しようとするのが一番大切ではないか？　もっと自分の持つている物に目を向けてみる」

「俺の……持つている物？」

上村が静かに呟いた。

「ああ、色々持つてるじゃないか。俺に無くてお前が持つ物も多いもつと自分を見つめなおせ」

疲れた表情の上村だったが、その顔に少しだけ生気が戻るのを見て取れた。

これで大丈夫だろう　冬夜は上村に背を向けて、歩き出した。

「これでお仕舞、だ」

手をひらひらと振りながら冬夜は去つてゆく。その後姿を残された者たちは見つめていた。

（それにしても柄に無いことを言ったな）

先ほど言ったことを思い返すと、冬夜は苦笑を漏らした。

微塵も思つていないことを、もつともらしく言つてみただけの冬夜であつたが、上村が予想以上に立ち直つたので満足していた。

文化祭の翌日、頬に青い痣を作つた二人が注目的になつていた。クラスメイトに「大丈夫か？」と問われる上村は、その度にやや固い笑みで大丈夫、と返していた。

その反面、黒田は教室の隅で一人大人しく教科書を開いていた。しかし、その姿に以前のおどおどとした様子は無く、静かにペンをノートの上に走らせてゆく。

クラスメイトは二人の間に何があつたのか勘ぐつたが、不機嫌そうなおーラを発する上村に聞く勇氣もなかつたのか、話題として上

がることは無かった。

そんな中、冬夜は満足そうな笑みを浮かべるでもなく、眠そうな眼で窓の外を眺めていた。初夏を感じさせる暖かな風が眠気を誘う。それに誘われるがままに、彼は大きな欠伸を漏らした。

「まるで他人事ね？」

思ったより近い位置から聞こえてきた声に、冬夜は視線を教室に戻した。すると彼のすぐ横で、西浦は呆れたような表情でため息をついた。

それに対し、冬夜はにやりと意地の悪そうな笑みで応える。

「何のことかな？」

「皆、気づいているよ。上村さんと黒田くんの間何かあったんだ、って」

そうか、と冬夜は相槌をうつが、反応の悪さに西浦は眉を顰めた。

「首謀者のくせに……」

こめかみを押さえながら西浦は首を横に緩々と振った。

「でも、まあ良かったじゃないか。上村は大人しくなったし、黒田がいじめられることもなくなり、ほら見てみる、あの堂々とした姿を」

冬夜の顎で示した先の黒田は相変わらずノートにペンを走らせていた。

以前までの気弱な雰囲気は感じられないことに、西浦も反論できないのか、渋い顔のまま唸っている。

「まあすべては解決したんだ」

そう言って冬夜は席を立つ。

「どこ行くの？」

「トイレ」

そう言って冬夜は、教室から姿を消した。

彼にとって昨日の出来事は既に終わったことであった。その後も極自然に学校での一日を終えて、帰路についた。

家に帰ると、不機嫌そうな夏樹に無視されたり、少し落ち込む出

来事があつた冬夜だが、何事もなく文化祭を終えることができ、満足していた。

これからも何事もなく、二度目の人生を歩むことができれば、それでいい。この先、何が起こるか分からないほどに歴史が変わつてしまつたが、それでも冬夜は後悔していなかつた。

冬夜

夜が明けて、東の空が青くなってくる。静寂満たす早朝の中、遠くから僅かに聞こえてくる、雀のさえずりを聞きながら冬夜は目覚めた。

最近夜に出歩くこともないために、目覚めは悪くない。携帯を開いて時刻を確認する。ディスプレイに大きく表示された時刻は五時二十九分。間もなくアラームが鳴り響く時間であったが、その前にアラームの設定を解除し、冬夜は身を起こした。

大抵はアラームが鳴る前に目覚めて、冬夜は行動を開始する。のそりとベットから立ち上がって、着替えを始めた。長袖のシャツを脱ぎ、タンクトップ一枚になったところで、冬夜の細く引き締まった腕が露出する。三ヶ月間、一度も欠かすことなくトレーニングを続けてきた結果であったが、彼はまだ満足してはいなかった。もっと丹念にトレーニングを続け、さらに筋肉を増やしたい。そう考えていた冬夜は一日三度もトレーニングを行う。まず早朝、そして夕食前、最後に就寝前だった。

それにしても暑い。冬夜はタンクトップのシャツ一枚で階段を下りた。台所でコップ一杯の水を飲み干して、誰もいないリビングで軽くストレッチを始めた。ぐつと上に伸びると背骨が小気味のよい音を立てる。その後も入念にストレッチを行って体をほぐしてゆく。それを一通り終えて、冬夜は家を出た。

まだ日が昇りきっていないためか、気温は低い。しかし、夏場特有の湿気を帯びた空気がまとわりつく。冬夜は靴ひもを絞めなおし、ゆっくりとアスファルトを蹴った。

無表情で坦々と地を蹴ってゆく。温い風を切り裂きながら。

もはや日課になっているトレーニングであったが、今更ながら意味を問う。文化祭の直前に、突然消え去った破壊衝動。当然ながら、それに気づいた時は彼も困惑した。しかし、それはそれで良い

とあっさり受け入れて、日常に馴染みつつあった。

日常に 否、世界にどれほど無くてはならないモノがあるのだろうか。そう考えると自分のことも些細な存在だと感じてしまう。そして、その些細な存在が抱く疑念なんて、どれほど小さなことか顕微鏡クラスで覗かなければ見えないのかもしれない と冬夜は自虐的な笑みを浮かべた。

本当にどうでもいい 思考から弾き出して、冬夜は走るペースを上げた。

破壊衝動があろうとなかろうと実際にそれは些細な問題であった。生きることに大した理由を見出せないために、生きることに執着も持てない彼は生きることに拘らない 最悪、死ねばいい、と考える彼に問題らしい問題は存在しないのであった。

だから冬夜は走り続ける 毎日の当然を繰り返してゆく。その中で何事もなければいい。過度な幸せはいらぬ代わりに、痛みも苦しみも何も要らない それは人としてどうなのだろう、という疑問が沸いたが、一瞬にして霧散してゆく。

結局のところ、冬夜は何かを強く考えることがなかった 否、考えようとしなかったと言うべきか。つまり、それは逃げである それを分かった上で、彼は変われることを望まない。むしろ変わる必要性を感じることが出来なかった。

(いや、違うな)

冬夜は自ら否定を繰り返す。結局、変われることを恐れている、それと同時に変わろうと努力することを避けている。自分は変われない と諦め、逃げているだけなのだ。

結局は辛いことが嫌なだけ。きつと、そうなのだろう もはや自分に対して苦い笑みが漏れる。そして走るペースを上げた。全ての雑念を振り払うかのように、冬夜は夜明けの町を颯爽と駆けていった。

一通りトレーニングを終えた冬夜は、シャワーを浴びて朝の支度

を手早く済ませて、家を出た。

家を出る前にリビングに向かうと、先に食事を取っている夏樹と出くわしたが、ただ睨まれただけで言葉を交わすことはなかった。文化祭以降、不機嫌そうな彼女の態度は変わらない。これも日常の風景となりつつあった。

テレビから流れてくるアナウンサーの声だけが、静かな部屋に響く。相変わらず不機嫌そうな夏樹に、冬夜は朝食を飲むように済ませて、席を立った。

逃げるように。

いつまで逃げ続ければよいのだろうか　ぼんやりと自転車を漕ぎながら、冬夜は考える。

逃げすぎて、もはや何から逃げてきたのか分からなくなりつつあった。ただ、残ったのは全てから逃げたと言う事実だけ　そして、これからも逃げ続けるのだろうか。

冬夜は逃げが悪いことだと思っていない　ただ、過度な幸せを望まない限り、ではある。だから幸せを諦めた。逃げると同時に色々なことを諦めてきた。しかし、先ほども言ったとおり、何から逃げ、諦めていったのかは、もはや分からない。ふと歩んできた道を振り返ったときに、その事実が残っているだけであった。

否、歩んだことなどあるのだろうか　下手をすると以前振り返ったときと景色が変わっていない、ということもあり得る。

自分は変わってない、進んでない　冬夜は、それを非常にもどかしく思った時期もあった。

しかし、変わることも逃げて、諦めて　彼は停滞し続け、腐っていった。

きつと、そうなのだろう　もはや笑えない結論に冬夜は顔を顰めて、首を横に振った。

(考えても仕方ない)

結局は、ここに行き着く。ペダルを一漕ぎ、二漕ぎしている間に冬夜は、いつもの無表情に戻っていた。

今は何事もなく、日常を過ごせばいい。そのためには奇異な行動を取らないこと　つまり、目立たないように真面目を装って学校に行くのだ。

とは言え、文化祭の件で一部のクラスメイトからは訝しむような視線を向けられるようになった。その為に、今まで以上に気をつけて行動を取らなければならない。

大きく息を吐いて、冬夜は強くペダルを踏んだ。もう時間に余裕はない。仕方ない　と小さく呟いて彼は学校に向かって加速していった。

予感

結果論を述べるなら、辛いことから逃げると成長は無いが、変化は関係なく訪れる。何故なら人は環境から受ける影響を無視できないからだ。『他人のせい、環境のせいにしてはいけない』とよく聞くが、それを理由に逃げることは、確かに良くない。しかし、環境や他人が自分に影響を及ぼすのは当然なことだ。それが故に人は自分が他人や環境に対して与えている影響についても、もっと考えなければならぬ。そこまで把握した上で、他人や環境のせいにしてはならない。と自分に戒めることは悪いことではない。

閑話休題、つまり人は変わる。それは些細なことかもしれない。気づいていないだけで外から見ると大きなことだったのかもしれない。それでも時と共に少なからず変化する。

誰であろうと。

何であろうと。

そう考えた時に、冬夜はあえて変化を望まず、そこに留まったのかも知れない。

変わろうとしない。誰もが自分のどこかを嫌い、自己変革を目指すのに、それは稀有な存在だったと言える。動くことによって生じる抵抗を嫌ったのか、それとも動くことで周りに与える影響を恐れたのか。もはや定かではない。ただ、彼は変わろうとせず、そして変わらないことを成功させた数少ない人物だと言えただろう。

徹底して他人や環境から自分を切り離し、殻に閉じこもった。

そして彼は変わらないことに成功した。

しかし、変わらなかつたが故に腐り。そして狂った。

狂った、も一つの変化と見て取れるのかもしれない。しかし、冬夜のそれは変わらないまま溜め込んだ感情の爆発であって、変化とは少し違った。

そんな思考を組み立てているうちに、冬夜は自分は狂わないため

の変化を遂げることができたのだろうか　と自問自答する。しかし、変わることに対して、今まで深く考えたことのない彼が明白に答えることはできなかった。

ただ、変化と言うものは外から見れば、よく分かる　黒田のよう。

何食わぬ顔で話を続ける黒田の顔に、以前のような弱々しさを感じることはできなかった。それを見て、人はここまで劇的に変わることができるのか、と冬夜は思い知る。

ただ狂わぬ為に変わることを迫られる身としては、やはり焦りを覚える。そんな考えは今までに無かったものだ　そう考えると自分分は少しでも変わったのだろうか、と冬夜は思うが確信が持てずにいた。他人からは、どう見られているのだろうか　そんなことを考えながら、冬夜は小さくため息をついた。

「で、つてどうしたの？」

黒田は、ため息をついた冬夜の顔を怪訝そうに覗き込んだ。

しかし、冬夜は思考を一瞬にして脳内から弾き出して、曖昧な笑みを浮かべる。

「何でもない」

冬夜は半ば諦めながら、考える。

黒田と同じことをしても、冬夜は変わらない。変わったのは歴史だけ　なら自分はどうすれば狂わない人生を歩めるのだろうか。

他人から見れば、人生を左右するような大事な変化のだが、当の本人　冬夜は出来たらいいな、という程度でしか考えていない。

根本的な問題　生に執着の無い彼が何かに対し、真剣に悩むことはありえない。それこそ劇的な変化を遂げなければなるまい。

「そう」

黒田も大して追求せずに、話を元に戻そうとする。

「えっと、どこまで話してたっけ？」

首を傾げながら黒田が尋ねたが、ほとんど話を聞いていなかったために冬夜も同じように首を傾げた。

「悪い、聞いてなかった」

それでも悪びれず、飄々と冬夜は答えた。

それが変わらぬ彼らしさであった。黒田も苦笑を滲ませながらも、話を再開した。

「うん、それでさ、冬夜くんの妹　えつと夏樹さんだっけ？」

冬夜が頷いてやると、黒田は一瞬ほつとしたように表情を緩ませた。

「あれから大丈夫？」

「大丈夫、とは？」

質問の意味を理解できず、冬夜は思わず聞き返した。

「ほら、随分と怒ってたでしょ？　その後、大丈夫かな、って」

恐る恐ると言った様子で尋ねる黒田に、冬夜は無表情のまま答える。

「あれから一度も話しかけられてないな」

それを聞いて黒田は、顔を引きつらせた。

「ご、ごめん」

ほんの一瞬だけ、以前の面影が見えた気がしたが、冬夜は笑って応える。

「気にするな、勝手にやったことだ　　と言っか俺の不手際だ」

「で、でも」

「何度も言わせるな、気にするな」

冬夜がやや真剣みを帯びた声を出すと、黒田は一瞬体をびくりと震わせたが、静かに頷いた。

「そう言えば　最近、変わったことって無いかな？」

「変わったこと？」

「うん、と黒田は頷いて続ける。

「誰かから　女の子から何か言われた、とか」

「はあ？」

思わず冬夜は声を漏らした。こいつは一体何を言っているんだと内心で呟く。日頃の生活を見ていれば分かるように、冬夜が誰

かと接触するシーンは多いとは言えない。文化祭の前後はやむを得ず付き合ったが、それ以降は落ち着いた生活を取り戻している。

愚問だ　冬夜は、そう答えるつもりだった。しかし、黒田があまりにも真剣な表情だったので、訝しげに首を傾げるだけに留めた。「特に何も無い　それが、どうかしたのか？」

質問に答えながら、今度は冬夜が尋ねる。すると安堵したかのよう息を漏らして、黒田は脱力した。

「そっか、なら良いんだ」

「良いって……俺の質問にも答えてくれよ」

「ううん、何でもないから」

ウソだ、と冬夜は断言できた。黒田の瞳が一瞬揺らいだのを彼は見逃さなかったのだ。しかし、追及することですら面倒くさく感じて、冬夜は口をつぐんだ。

そちらに答える気がないなら、もうお話はお仕舞だ　と言わんばかりに視線を窓の外に移して、ぼんやりと風景を眺めていた。

そんな二人を少し離れた席から、見つめる者がいる。

「　で、そんなに南雲くんが気になるの？」

凜とした声が耳に届くと、西浦の体がびくりと跳ねた。

「な、なっ、違っつてば！」

頬だけではなく、瞬時に耳まで赤く染め上がった西浦の様子を楽しむように、橘は微笑んだ。本当に分かりやすい子で、可愛いなあ　と小さく呟きながら。

「だーかーらー違っんだって！」

「んー分かった分かった。で、いつ告白するの？」

「全然、分かってない！」

そう絶叫しながら西浦は頭を抱えて、がっくりと頂垂れた。目じりに涙を溜めて俯いた西浦を見て、少しやりすぎたか　と思いつつも、橘は相変わらず微笑を崩さない。彼女は、そっと手を伸ばして西浦の頭を撫でた。

「ごめん、て」

「うー……」

顔を真っ赤に染め、目じりに涙を溜めたままの西浦は唸りながらも、撫でる手を振り払うことはなかった。

そんな微笑ましい光景に教室の男子の大半が頬を緩ませていた。そして、その視線を一変させて冬夜に向ける。

冬夜は訳も分からずに向けられる殺意に、汗を滲ませながらも知らないふりを通した。

「で、何で南雲くんに熱い視線を送っていたのかな？」

「だから違っつてば！」

(だから火に油を注ぐなっつて)

西浦の言葉と冬夜の突っ込みは、ほぼ同時であった。涙目で真っ赤になった西浦は非常に可愛い。しかし、それをのんびりと鑑賞できるような余裕は無かった。向けられる視線に怨念のような物を感じ、冬夜の頬を冷たい汗が流れた。

やむを得まい　冬夜は静かに席を立って、逃亡を開始した。

「どこか行くの？」

ああ、と頷くと黒田は眉を顰める。

「もうすぐ休み時間、終わるよ？」

「腹痛で保健室行きました、と伝えといてくれ」

西浦と橘のすぐ横を通って、教室を後にする。いい性格してるぜ

とすれ違い様に、冬夜は小さく呟いた。それに対して返ってきたのは橘の微笑みであった。

冬夜は思わず深いため息をついて、後ろ手で教室の扉を閉めた。

その刹那　冬夜の背筋を悪寒が抜けていく。先ほど向けられていた温い殺気ではなく、本物と称するに相応しい冷徹な視線を感じて、冬夜は思わず身構えた。

左右を目だけで確認するが、授業開始直前のためか、廊下に出ている生徒は少ない。特定はそう難しくないだろう　そう思って、廊下を進み始めた。殺気に向かつて。

幸い、その方向に進めばトイレもあるので、誤魔化すことも可能

だろう。

冬夜は殺氣の出所を探りながら、足を進めた。

「おい、お前」

冬夜の耳に届く声は女性を思わせる響きがあったが、妙に低い。

きつと、こいつが殺氣の出所だろう。冬夜はポケットに入った得物に手を添えながら、ゆっくりと振り返った。

「えっと、俺ですか？」

冬夜は小首を傾げながら問い返した。彼の視界には首肯する少女が映し出されていた。

肩ほどまで伸びた髪は黒い。その黒さは冬夜が今までに見たこともないほどに深く、そして美しかった。少し釣りあがった目じりに、大きな瞳が宿すのは明らかな殺意。美人が勿体無い、と軽口が漏れそうになったのを、冬夜は自制する。

「お前は黒田 陸を知っているか？」

「はい」

今度は冬夜が頷きながら答えた。しかし、必要以上のことは答えない。冬夜は得体の知れない殺氣を放つ、相手の出方を伺っていた。

「文化祭の後……陸が顔に大きな痣を作って帰ってきたの」

「はあ……」

冬夜は氣の抜けたような声で答えるが、心臓の鼓動は少し速まっていた。

黒田のことを下の名前で呼ぶことから、彼女はきつと黒田と親しい関係であることは簡単に推測できる。しかし、それだけではない。帰ってきた、と彼女は言った。つまり、一緒に住んでいる肉親だろうか、と冬夜は検討をつけた。

（しかし……何故、今更？）

文化祭が終わって一ヶ月が経とうとしている時期に、わざわざ彼女が現れた理由が分からなかった。

「あの子に直接聞いても教えてくれないの。あなたは何か知らないかしら？」

「えっと……俺は分からないです」

少し考えたふりをしながら、冬夜は答えた。あまりに即答すると怪しまれるからだ。

知らないも何も、黒田の痣を作ったのは冬夜本人だ。知らないはずもない。しかし、彼女の話聞いて、冬夜は確信した。彼女は黒田 陸の代わりに、痣を作った犯人に復讐するつもりだ、と。
「そう、なら良いわ」

面倒くさいことになったなあ、とぼんやりと考えていると、始業を知らせるチャイムが鳴り響いた。それに舌打ちをしながら、彼女は冬夜に視線を戻す。

「ごめんなさいね、時間を取って」

そう言い残して、彼女は去っていった。その後姿を黙って見送った冬夜は、妙に胸が騒ぎ始めるのを感じていた。

黒田 海里 高校二年生、つまり彼女は冬夜の一年以上上だ。

剣道部の次期エースとして校外にまで名を馳せながらも、学業も優秀。文武両道ここに極まると言わんばかりの人物であった。

そして苗字から察する通り、黒田 陸の姉らしい。冬夜は情報を整理して、ため息をついた。

(また厄介なことになったな……)

海里が探しているのは、もちろん冬夜だろう。実際に彼は黒田 陸を殴り飛ばして、大きな痣を残してしまった。

しかし、どうしたものか。冬夜は頭を掻きながら、今後の対策に思考を切り替えようとしたところで、声に遮られる。

「ねえ、ちよっと聞いてる？」

「ん、悪い。聞いてなかった」

冬夜に呆れたような視線を投げかけながら、橘はため息をついた。「こっちは自分の立場を危うくしてまで情報提供してあげてるのに、私の質問は答えてくれないの？」

綺麗な顔立ちの橘は頬を膨らませた。その仕草が妙に子供っぽく、

いつも大人のような雰囲気を纏う彼女とのギャップに冬夜は噴出しそうになった。

「悪い。で、何が聞きたいんだ？」

「さっきも言ったけど、何で海里先輩のことなんて聞くの？」

どう答えたものか　冬夜は一瞬悩んだが、表情を変えずに答える。

「気になったから」

「……あ、そう」

どうも釈然としない様子だったが、橘は頷いた。

「で……あの子のことは、どうするの？」

橘が指差す先を辿ると　西浦がこちらを険しい表情で睨みつけていた。冬夜と視線が合うと、彼女は慌てて視線を逸らした。

「何故、西浦のことが出てくるんだ？」

冬夜は視線を橘に戻しながら尋ねた。

「あれ、気づいてないの？　あの子、あなたのこと好きみたいだけど」

それに　と橘は続けて言う。

「今こうしてあなたと話していることも、私の立場を悪くしているんだよ。なのに……ねえ？」

僅かに口の端を上げた橘の微笑は柔らかかったが、どこか偽りの仮面のような固さがあった。

そんな彼女を見て、冬夜は思う　こいつだけは敵に回したくないな、と。冬夜は観念したように深いため息をついた。

「で、何が聞きたいんだ？」

「さっきの答えをもう少し詳しく」

魅力的な　大人の色気をまとった笑みで微笑まれる。きっと男性なら誰もが　もしかすると女性ですら落としかねない魅力的な笑みだった。

「お前の期待しているような事情はないと思うが」

「それでもいいわよ。それなら、それであの子を安心させられるじ

やない」

橘の笑みが少し和らぐ。きつと西浦のことを本当に大切に思っているのだろう。だから冬夜は渋々ながら事情を説明することにした。

もちろん全容を話すつもりは冬夜になかった。文化祭の日に黒田陸と喧嘩して、顔に痣を作ってしまったこと。それと、その痣を作った犯人を追って黒田 海里が情報収集を行っている、とだけ伝えれば、橘は随分と興味深そうに頷いた。

「ふうん……あの日、上村さんと黒田くんだけじゃなかったんだ」「まあ、そういうことになる」

冬夜が肯定すると、橘は小首を傾げた。

「んー、なら何で南雲くんは黒田くんと喧嘩したの？」

「……それは言いたくない」

冬夜は正直に言った。中途半端に誤魔化しても、橘の追及を逃れられないだろうと察したからだ。

こちらが完全に拒絶すれば彼女も踏み込んでくるまい。その思惑は当たりだったようで、橘は「そっか」と小さく返して、話を切り替えた。

「ちよつと話変わるけどさ。かなみのこと、どう思ってるの？」

「可愛いと思うよ」

「ふうん……」

無表情でさらりと答える冬夜を、橘は興味を失った瞳で見つめていたが、しばらくして深いため息をついた。

「何で、あなたみたいなのを好きになっただらうねえ、かなみは海里先輩のことだって、かなみに聞けばよかったじゃないの？」

「ふん、よく言うぜ」

今度は冬夜が呆れたように、ため息をついた。

「普段から色々な情報収集してるくせに」

「あら、バシてた？」

「ちなみに文化祭前後の尾行もな」

あらあら、と口元を手で隠しながら橘は笑った。冬夜は以前の記憶が活きていることに感謝しながら、僅かに口の端を吊り上げた。

橘 彩華 高校一年の終盤には、情報屋として校内で知らぬ者はいないほどにまで名を馳せることになる。人との接触を極限まで断ち切っていた冬夜であったが、あまりにも有名なウワサだったので耳にしたことがあった。放送部の部長を務めながらも、情報を上手く操り、過度に恨まれることもなく、無事卒業したはず と僅かな情報であるが冬夜は記憶している。

「何だか、もつと興味湧いてきたなあ、あなたに」

にこやかに笑う橘に、少しばかりの恐怖を覚えながら冬夜は苦笑を漏らす。

「俺のことなんて調べても面白くないと思うけれど」「何でかしら？」

橘は相変わらず楽しそうに尋ねた。

それに対し、どう答えたものか と冬夜は逡巡した。

(自ら墓穴を掘ってしまった気がする)

この時ばかりは即答できなかった。何故なら、冬夜は言ってしまったからだ 尾行に気づいていた、と。しかも尾行の期間もぴたりと当ててしまった。つまり、そういった行動に対し慣れていることを示してしまったのだ。

もはや偶然気づいたと言っても橘は信じてくれないだろう。やむを得ず、冬夜は適当に言葉を紡いだ。

「まあ……あれだけ露骨に追われればね」

「あら、気づかれたのって、あなたが初めてだけれど」

今日、何度目か分からないため息を漏らしながら、冬夜は苦笑した。

「俺から君にお願いできるのは、これ以上は俺に付きまとわないでくれ、ってことだけだ。彼女 西浦が不機嫌になるんだろう？」

「あ……うーん」

やられた、と言わんばかりに顔をしかめて、橘は唸った。そして、

渋々と言った様子で頷いた。

「そうだなあ……また、かなみのいないところで話そうよ」
「出来れば遠慮したいな」

楽しそうに笑う橘に、冬夜は苦笑を返した。

進行

教室を満たすのは、教師の声と僅かな筆記音。それぞれが義務を自覚しているのか、その音は止まることを知らない。それとは対照的に、しんと静まり返った中庭からは温い風が吹き込んできて、カーテンを揺らした。時折、カーテンの隙間から差し込んでくる強い日差しにうんざりしながら、冬夜は考えていた　黒田　海里のこ
とを。

陸の件については憶測やウワサばかりで、真実を知るものは少ない。よって冬夜自身に危険が及ぶことは無いだろう。

そうなれば上村が危険だ。今のところ、あの件に一番深く関わっているとうワサされているのが、彼だからだ。海里がどこから情報を仕入れているかは分からないが、冬夜と出会ったときのように不特定多数に聞いて回っているかもしれない。そうならば彼女の耳に入ってしまうのは時間の問題だろう。

ならば、どうする　冬夜は考えた。しかし、今更対策を考えたところで、どうにもならないことは分かっていた。情報操作をするにしても遅すぎる。それに情報を流せるような伝手もない。簡単に言えば友達がいけないのだ。この時ばかりは、冬夜も行き着いてしまった結論に嫌気が差し、深いため息をついた。

閑話休題。

事件性さえ帯びなければ、上村に対してもいい機会になるのではないか、と冬夜は考えた。今までやってきたことの報いを受け、大いに反省するべきだ。だから今回は様子見でいいのかもしれない。そう思いながらも、別の予感が冬夜の不安を掻き立てる。

海里と出会った時から消えない不安　それは彼女の瞳に燃えるような憎悪を見て取れたからだろう。あそこまで憎悪に満たされた瞳を見たことがない、とは言わない。

むしろ時が遡る前は、それを向けられるのが日常であった。憎悪

だけでなく、怒りや悲しみと言った負の感情の中に晒され続けた。しかし、それは当然のことであり、世界から忘れ去られるよりも強く認識されることで、冬夜は妙な安心感を抱いていた。

最初は自ら狂うための殺人であった。そして狂ったことを正当化するために殺し続けた。しかし、どこかで罪の意識に苛まれていたのかも知れない。だから後付の理由を拾って言ったのだろう。

忘れられないようにと。

殺人と言う名の自己主張で世界と自分を繋ぎとめていたのだろう。自分がどれほど愚かで幼稚だったか、今なら分かる。不変の仮面を脱ぎ捨てた冬夜は、激しい自己嫌悪に苛まれ、顔を歪めた。

「凄い顔してるけど、大丈夫？」

聞き覚えのある声で顔を上げると、西浦が遠慮がちに冬夜の顔を覗き込んでいた。その瞳は心配の色をきざしている。

いつの間にか授業は終わり、クラスメイトは帰宅や部活に向かう準備を進めている。それに気づかないほど、冬夜は思考に没頭していた。

これ以上心配をかけまいと冬夜は感情の全てを心の奥に押しやって、笑顔を作った。

「大丈夫だ、ありがとう」

すんなりと出てくる感謝の言葉に驚きながらも、これほど自分に似合わない言葉もないと冬夜の笑みに自虐の色が浮かんだ。

「あ、また何か良くないことを考えてるでしょ？」

眉を顰めながら西浦が言った。

「何故、分かる？」

「前と同じ……悲しいと難しいを混ぜたような顔してた」

きつぱりと言う西浦に否定できず、冬夜は苦笑を漏らした。また、この短期間でよく、そこまで見分けがつくようになったものだ、と感心させられる。きつと彼女の洞察力は凄いものなのだろう。冬夜は、そう結論付けた。それは見当外れのものであったが。

しかし、冬夜は考えることすらできなかつた。西浦のような明る

くて優しい人気者が自分に興味を持っているなんて考えも及ばなかったのだ。

そんな空想で遊んでも、最後に傷つくのは自分だから、彼は徹底して自らを貶めた。

万が一の希望ですら赤の罰マークで消し、黒で塗りつぶした。捻挫を恐れて、僅かな段差ですら回避するように冬夜は生きてきた。

過度な幸せを求めない。その代わりに過度な不幸も避けた。元々、生きることに執着を持ってない冬夜は事なかれを貫こうとしたのであった。

(……なのに)

目の前の彼女　西浦　かなみは、冬夜に接近するだけでなく、内部にまで踏み込んでこようとす。そして冬夜の心をかき乱す。彼女と話しているときは、自分も変わったのではないか、と錯覚に陥った。こんな自分でも、人に戻ることができたのではないかと。

誰に対しても別け隔てなく、接してくれる西浦の悲しむ顔なんて見たくなかった。冬夜は脱ぎ捨てた仮面を今一度拾って、素顔を隠した。感情を偽った。

「大丈夫だ、心配するな」

冬夜が無機質な笑みを浮かべると、西浦は更に訝しげに顔を覗き込んだ。

「ウソつき、絶対無理してる。いつも、そうだよね？　肝心なところは話してくれない」

悲しそうな視線を冬夜に投げかけながら、西浦は言った。

それに冬夜は苦笑で応えた。きつと全てを知れば西浦も離れていくだろう。そう考えた冬夜に去来したのは恐れであった。

今は彼女との関係を壊したくない　その感情が冬夜の中に確かに存在した。

最初は小さな波紋であった。しかし、冬夜はその波紋を無視する

ことをできなかつた。人らしい感情を示した自分を疑ってしまった。この先を考えたなら良い変化であるはずなのに、冬夜は信じるこゝとができなかつた。

自分が人ごっこをしているだけなのかもしれない。そう思ってしまうのは、長年に渡る逃亡生活のせいだろうか。他人を疑うことは当然、そして自分ですら疑い、熟考し、結論を導く。それが冬夜のスタイルだつた。

もちろん、時と場合による。素早い判断を迫られることが多かつた冬夜は、現状に合わせて判断の速度を変化させてきた。その環境で何度も思考を繰り返し返しているうちに、彼は現状の把握を素早くかつ正確に行えるようになっていた。

まずは現状を把握し、その上で思考に時間を割いてよいかを即座に判断し、行動に移す。迷う時間は持たない。それが南雲。冬夜であつた。

「そんなことないと思うけどな」

西浦を安心させるために、冬夜は答えた。先ほどまでの仮面と違い、柔らかな笑みで彼は続ける。

「西浦以上に俺の本質を知ってる人はいないと思う」

「他の人と比べて、でしょう？ それは私の言っていることと関係ないよ」

西浦は不満を隠そうとせず、唇を尖らせた。

「鋭いな」

「当然」

冬夜が認めると、西浦はその愛らしい顔を笑みで満たした。

それを見るたびに冬夜の胸は心地よさで満たされ、それと同時に締め付けられるような感覚に陥る。そして内外両方から圧力を受けた胸は、痛みを発した。それを罪悪感だと彼は気づかない。

「だから……って、ちよつと待って！ このタイミングで帰るの！？」

素早く帰宅の準備を済ませて席を立つ冬夜の後を、西浦は慌てて

追いかけていった。

「別に歩きながらでも話はできるだろう?」

「そ、そうだけどもさ。ちょっと待って、私も帰る準備するから……
って待ってよう!」

少し涙目になりながら叫ぶ西浦の姿に、冬夜は微笑まずにはいられなかった。それと同時に、あちらこちらから向けられる殺意溢れる視線に辟易して、思わずため息をついた。

最近はずっと見られている。それは気のせいではない、と逃亡生活中に培った経験が物語っていた。

学校での視線は主に西浦関連の男子だと納得がいく。帰宅中はきつと橋だろう。

しかし、最近は帰宅中に向けられる敵意を孕んだ視線を受けることがある。それも複数。何かが起きると言う予感、既に確固たるものになっていた。

冬夜は思う　これはきつと避けられない。そう考えると自分の近くにいる西浦にも危害が及ぶだろう。冬夜は、それだけは避けたかった。絶対に彼女を巻き込むまい、と誓う。

(お前は笑ってればいい)

楽しそうに話し続ける西浦。その横を歩いていた冬夜の瞳に暗い決意が宿った。

しかし、冬夜は気づかない　既に進行しつつある悪意の存在に。

上村は壁に背を預けたまま、大きく肩で息をしていた。

どうして、と何度も考えるが答えなど出ない。上村は彼女のことを何一つ知らなかったからだ。情報が無いために、自分が何故こんな目に遭っているのか想像もつかなかった。

「クソ……」

小さく漏らした罵声は、焦りと怒りの色が感じられる。

「何なん……ッ!」

続けて不満を漏らそうとした上村を、廊下に響いた音が遮った。

軽く固い物がぶつかり合うような音、それに身を震わせながら上村は、そつと聞こえてきた方向に目をやった。

肩ほどまで伸びた漆黒の髪。普段は整った綺麗な顔を、修羅のごとく怒りで盛大に歪めた少女。彼女の右手には木刀が握られていた。その姿を見ただけで、上村の心臓は素手で鷲づかみされたかのような痛みを発した。整えたはずの息が、恐怖によって再び乱れだす。「見つけたぞ、上村 祐介」

呼吸と同様に、荒れ狂う心臓。冷たい汗が上村の頬を伝って落ちていき、制服にシミを作った。恐怖で足を縫い付けられたかのように、上村は微動だにしない。目の前に迫る木刀を携えた少女 黒田 海里を大きく見開いた目で見つめていた。

ゆっくりとした動作で正面に構えられる木刀。それを目の前にして、上村はようやく足を動かすことに成功した。素早く体を反転させて、海里から距離を取ろうと廊下を強く蹴る。部活動で鍛えられた脚力を活かせれば逃げることは容易い。しかし「遅い」

海里の言葉通りであった。背を向けたタイミングで彼女は既に距離を詰めていた。海里に背を向けている上村は、容赦なく振り下ろされる木刀を避けることも叶わず、打ち付けられた。上村は一瞬だけ鋭い痛みを後頭部に感じて、意識を闇の底へと沈ませていった。

進行（二）

橘 彩華は廊下を駆けていた。その光景は珍しいことではない。何か興味を引くような情報を手に入れれば、彼女はいてもたってもいられず、現場へ直行するからだ。

しかし、今の彩華の表情に余裕は微塵もなかった。流れる汗を袖で拭い、息を切らせながらも、彼女は決して足を止めない。

渡り廊下を駆け抜けた彩華の視界に、いくらかの人影を捉えた。耳に届くのは怒声や悲鳴、それが橘の中で恐怖となつて、その身を蝕んでいく。

見たくない 直感がそう告げていた。しかし、彩華は進む。角を曲がり、視界に広がったのは人ばかり、彼女はそれを掻き分けてゆく。

赤かった。見た者を恐怖に陥れるほど濃い赤が、彩華の視界に広がった。足から力が抜けて、彼女は膝をついてしまった。喉は一瞬で干上がったかのように渴き、上手く声が出ない。目を背けることもできず、震えながら、その光景を網膜に焼き付けることしかできなかった。 クラスメイトが血の海に沈んでいる光景を。

冬夜と西浦 かなみは下駄箱を抜けて、駐輪場へと向かっていた。その間もかなみは、今日の出来事を楽しそうに話す。冬夜は相槌を返すだけで、聞き手に回っていた。それも嫌々聞いているようでなく、冬夜は自然と笑みを返していた。

少しずつであったが、冬夜も変わってきていた。かなみと話す時間が彼にとって大切になりつつあった。

だから、冬夜は気づけなかった。

いつものように周囲に気を配っていれば、その異変に気づくことができただろう。しかし、この時は警戒を解き、かなみの話に耳を傾けすぎた。

学校を覆う不穏な気配に気づくことなく、彼はその中心へと踏み込もうとしていた。

校門を出れば帰る方向が別々なので、冬夜とかなみは校門まで自転車を押していった。

しかし、ぴたりと冬夜の足が止まった。それに気づいて、かなみは彼の顔を不思議そうに見つめた。

冬夜は校門を見据えたまま、険しい表情のまま立ち尽くしていた。その視線を追って、かなみも校門の方を見た。

「何あれ？」

かなみの視線の先には他校の制服に身を包んだ男が十人近くもいた。それを訝しげに眺めながら、彼女は冬夜の袖を引いた。

「……裏門から帰ろう？」

相変わらず険しい表情を崩さない冬夜は、かなみの言葉で我に返ったように、ゆっくりと身を翻した。そして男たちから見えないところまでやってきて、大きく息を吐いた。

「あの様子だと、恐らく裏門も固められているだろうな」

先ほどまでの険しい表情を解き、冬夜は呆れたように呟いた。

「え？」

「意外と頭が回るようじゃないか」

低い笑いを漏らす冬夜の瞳に怪しい色が宿った。かなみは彼の言葉の意味が分からず、今にも泣きそうな笑みで首を傾げた。

「お前はここで待ってる」

冬夜はかなみに言って、自転車を駐輪場に止めた。そして、カゴに鞆を置いて身軽な格好で校門へと歩いていった。

かなみは呆然と立ち尽くして、冬夜の背を見送ってしまった。後を追おうかとも考えたが、得体の知れない恐怖が足を地面に縫い付ける。彼女はしばらくの間、その場で震えていたが、やがて決心したかのように震える足で一步を踏み出した。

冬夜は柄の悪い男たちに向かって、笑みを零しながら歩いてゆく。

彼は、かなみからは見えない位置で武器を取り出し、ポケットにねじ込んでいた。ただ、それらを使うのは最終手段である。できることなら穏便に済ませたい。しかし、それは叶わぬ願いだろう。

冬夜は校門の前に集まっている男たちに見覚えがあった。確信を持って言えるわけではないが、恐らく夜の街で叩き伏せた男たちだろう。ならば学校を突き止められた時点で、どう足掻いても逃げられはしない。ならば　と彼は攻勢に出ることにしたのだ。

（奇襲をかけて、一気に潰す）

そこで冬夜は方向転換して男たちから遠ざかってゆく。そして彼らからは見えない位置で、冬夜はフェンスを乗り越えた。ポケットに忍ばせた金属がぶつかり小さく音を立てたが、着地の音は消し去った。

冬夜は木陰に身を寄せて、男たちの様子を伺った。数は十人はいないが、それでも充分に脅威だ。最初の奇襲で半分は削りたいところだが、それは叶わぬ願いだろう。二、三人を一時的に無力化できれば良いほうだ。失敗すれば、一瞬にして危機に陥る。冷静に言い聞かせて、冬夜はゆっくりと思考した。その顔には笑みを浮かべたまま。

しかし、それは一瞬にして凍りつく。僅かに耳に届く音に冬夜は顔をしかめた。聞きなれたサイレン。それは救急車のものだと気づくのに、大した時間を必要としなかった。

それは冬夜の下に確実に近づいてくる。一体、何が　と振り返った瞬間、視界に救急車が現れた。それは冬夜の横を過ぎ去って、校門の前でスピードを落とす。

「悪いが道を開けてくれ！」

切羽詰った救急隊員の言葉に、門の前で集まっていた男たちも困惑しながらも散ってゆく。そして冬夜の学校の敷地内に救急車が入り込んできた。

一体、何が　冬夜はフェンスを再び乗り越えて、男たちに見つからないように校舎へと駆けていった。大勢が移動する足音は階段

から響いてきている。それを頼りに冬夜も階段を駆け上った。先ほどの高揚よりも遙かに心臓が暴れているが、それでも冬夜は足を止めない。嫌な予感が彼を突き動かしていた。

音が近い階で、冬夜は廊下を見渡す。すると奥に人だかりが見えた。それに向かつて、彼は再び駆けた。近づくにつれて濃くなる血の臭いに、冬夜の心臓は早鐘を打つ。人だかりの下までたどり着いた時、その臭いは死を連想させるほどにまで濃く、慣れているはずの冬夜にすら悪寒を誘った。

冬夜は無理やり人を掻き分けて進んでゆく。そして視界に広がった光景に眉をひそめた。

真っ赤な血の海の中に誰かが沈んでいた。しかし、それを取り囲む救急隊員で影になり、顔が見えない。垣間見えた腕が変な方向に曲がっていることだけ、辛うじて確認できた。

冬夜は無表情のまま、その光景を眺めていた。すると救急隊員の背中が僅かに動き、倒れている人物の顔が露見した。

血の海に沈んでいたのは上村 祐介だった。顔から血の気が失せ、土気色になっている彼が生きているのかどうかは一瞥しただけでは判断しがたい。しかし、周りで応急処置をしている救急隊員の手際から察するに、まだ生きているようであった。

冬夜は無表情のまま、運び出される上村の姿を見送った。もはや誰がやったかなんて分かりきったことであった。彼はやや呆れたようにため息をついて、血の海に背を向けた。

そこで見覚えのある顔を視界の端に捉えて、冬夜は足を止めた。

「橘？」

廊下に座り込んだまま震えている彩華は、冬夜の呼びかけに反応しなかった。普段の大人びた彼女の面影はどこにもなく、青ざめた表情でじつと上村を見つめていた。

「おい、大丈夫か？」

彩華の肩を少し揺らしてやると、我に返ったように冬夜の方に振り返った。

「な、南雲くん……？」

「とりあえず、ここを離れよう」

彩華は短い息を繰り返していた。過呼吸の恐れがある。冬夜は彼女に手を貸し、人ごみを掻き分けて渡り廊下に出た。生暖かい風が肌を撫でる。その感触に、冬夜は気味の悪さを覚えた。

連れ出した彩華は、いまだ短い呼吸を続けていた。過呼吸には袋を口に当てるのが良いと聞くが、冬夜の手持ちにそのような物はない。鞆を自転車のカゴに置きっぱなしであることを今更思い出した。「落ち着いて、ゆっくりと息を整えろ」

異性の体に触れることに若干の戸惑いを覚えたが、冬夜は優しく彩華の背を撫でた。

「ありがとう」

彩華の言葉は小さく、僅かに震えていた。

無理もない、と冬夜は思う。むしろ、あの血の海を見て、意識を失わなかった彼女の精神力を賞賛したいとさえ思った。

しばらく経って彩華の呼吸は落ち着いていた。しかし、顔色はいまだ優れないままであった。

「ごめん、取り乱しちゃって。もう大丈夫だから」

弱々しい笑みを浮かべながら彩華は言う。

「保健室で休めばいいし、無理して一人で帰ることもない。親に迎えに来てもらえば」

「大丈夫だから」

冬夜の言葉を遮った彩華の言葉は先ほどより語調が強かった。

「それに、こんなところで二人つきりなんて変なウワサが流れたら、お互い困るでしょう？」

いつもの悪戯っぽい笑みも今は強張っている。無理をしているのは明らかだった。

「俺は困ることなどないが」

「……優しいんだか、天然なんだか」

彩華は呆れたような苦笑を漏らした。ほんの少しだが、表情が柔

らかくなつたのを冬夜は見逃さなかつた。

「私が困るのよ」

「……そうか」

この子は強いな、と冬夜は思う。いや強くなつてない。今見ている姿からは弱さしか見出せない。しかし、彼女は強くあろうとしている。それは無理をしているとも言えるのだが。

無理をして限界を超えていかなければ人は強くなれない。しかし、今は無理をさせるような場面ではないと判断し、冬夜は彩華の下を離れなかつた。

「本当に過保護だなあ」

再び苦笑を漏らす彩華　顔も血の気が戻り、普段の笑みへと戻つていった。

「こんな非常事態に無理して、どうする？」

そう返しながらも、冬夜は頭の中で過保護という言葉を反芻していた。

以前の自分なら見て見ぬふりをしていても、おかしくはない。なのに冬夜はこの時、放っておけない　確かにそう思った。

人らしく戻りつつあるのだろうか、と冬夜は自問する。しかし、答えは出なかつた　否、出せなかつた。あれほどの殺戮を繰り返ししておきながら、人らしくあろうとするなんて許されるはずがない。彼は確実に変化を遂げている、しかも良い方向に。なのに、それを彼自身が無意識に止めようとしていた。彼は変わることによって、過去の罪を強く意識するようになってしまったのだ。

「非常事態、ねえ……よし」

冬夜の思考を遮って、彩華は言う。

「情報屋の名にかけて、犯人探してもしますか」

「馬鹿か、貴様」

冬夜は思わず吹き出しながらも、何とか突っ込みを入れる。対して入れられた側は可愛らしく首をかしげている。

「そんなことをしてみる、上村二号になりはてるぞ」

「なら南雲くんにボディガードしてもらおうかしら」

彩華は悪戯っぽい笑みを浮かべながら言った。

「一緒にいるところ見られて困るんじゃないのか？」

「それはお互い様だし、弁解するのは一人で済むから大丈夫」

その一人が少々気になったが、冬夜は尋ねなかった。何となく想像がついたからだ。

「まったく……どうなっても知らないからな」

離れていく彩華の後姿を見送って、冬夜は呆れたように呟いた。

人に非ず(一)(前書き)

ちつと進行速度が遅いので、一話辺りのボリュームを落として更新しております。追記：すみません、ボツネタにしたのが混じってました。修正中です。

人に非ず（一）

冬夜は彩華を追うべきか悩んだが、その足は正反対に向かっていた。待たせている、かなみが気になったのだ。しかし、迅速に行動しなければ、今度は彩華にも危険が及ぶ。そう考えた冬夜の足は自然と速まった。

しかし、ここからどうするべきか。冬夜は答えを出せずにいた。校門周辺には今も尚、他校の生徒が集まっている。この状態でかなみを無事に帰らせることができるだろうか。あの男たちの目的が冬夜だけならば問題ない。しかし、彼女と一緒にとなると難易度が恐ろしいほどに増すだろう。

冬夜は廊下を足早に抜けていきながら、窓の外から様子を伺った。そこで彼の足は止まった。

「あの……馬鹿野郎！」

普段、崩れることのないポーカーフェイスを盛大に歪めた冬夜は、唸るように声を絞り出した。

もはや迷うことなく、冬夜はポケットの奥底に眠っている凶器を強く握り締めて、廊下を駆け出した。

「……あの、すみません」

かなみは声を震わせながら言った。それに対して剣呑な視線を向ける男たち。早くも後悔しながらも、彼女は心を奮い立たせた。

「あの……迷惑なんです、帰っていただけませんか？」

男たちの目つきがより一層険しいものに変化して、かなみの足は震えだす。自分の足のはずなのに感覚が遠のいてゆく。これでは咄嗟に逃げられないなあ。と、かなみは冷静な判断を下していた。

「女の子に手を出しちゃダメだよ」

場違いな柔らかい声が、張り詰めた空気を解かす。それに少し安堵したのか、かなみは深いため息を吐いた。

「ごめんね、迷惑なのは分かってたんだけどね」

他の者より頭一つ分飛びぬけた男が、ゆっくりとかなみの前に現れた。小柄なかなみは彼を見上げる形になるが威圧感のようなものはなく、柔和で整った顔立ちが印象的な男だった。

「けどね、ここの生徒の一人だけにちよつと用事があるんだ。それ以外には手を出さないと約束するからさ」

「ひ、一人って……」

かなみの言葉に、男は苦笑を返す。

「実は僕らも名前は知らなくて、ただ顔を知ってるだけなんだ」

彼らが探しているのは、きっと冬夜だ　　かなみはそう確信していた。

「そ、その人と会って、どうする気なんですか？」

「できれば……話で済ませたいんだけど」

相変わらず優しいが苦笑を漏らしながら、男は言った。

しかし、かなみは二人を会わせてはならない気がしていた。

「ともかく」

男が言葉を紡ごうとしたのを遮って、かなみの目の前を黒い影が抜けていった。先ほどまで目の前で優しい笑みを浮かべていた男は仰け反り、妙な大勢のまま固まっていた。

それに構うことなく影は、他の男へと踊りかかってゆく。暴風のような荒々しさと、針の穴を通すかのような的確な打撃で次々と男を沈めていった。

普段、見せることのない鬼のような形相で、冬夜はかなみの方に向き直った。

「さっさと逃げろ！」

冬夜の叫びに、かなみは肩を震わせた。

やめて、と叫びたかった　　しかし、喉は引きつり上手く動かなかった。ただ目の前で繰り広げられる光景を、網膜に焼き付けることしかできなかった。

「……こらこら、落ち着けよ」

仰け反ったままの男が、静かに言った。先ほどと変わらない、のんびりとした口調に冬夜の動きが止まった。ゆっくりと傾いた体を起しながら男は続けて言う。

「お前たちもだ、手を出すな」

その一声で、周りの男たちも動きをぴたりと止めた。それを満足そうに眺めて、男は冬夜に向き直った。その瞳は相変わらず優しげな色を宿しており、かなみは少し安心した。

「うん、その動きを見ている限り間違いない無さそうだね。何故、君は僕の友人を傷つけたんだい？」

冬夜は答えず、険しい表情のまま男を睨みつけた。

「あれ、君だと思っただけだな。違ったかい？」

「だったら、どうする？」

冬夜はぶっきらぼうに言う。しかし、男は余裕な態度を崩そうとしない。それが冬夜の苛立ちを増徴させた。

「だから聞いたじゃないか。何故、僕の友達を傷つけたのか、って」「いちいち覚えてないね、ただイライラしてたんじゃないかな」

男の余裕な態度が気に入らず、自分でも幼稚な挑発だと分かっている。冬夜は言葉を止められなかった。それと同時に、どこまでも余裕な態度を保つ男に警戒心を強めていった。

「うーん、そっか……」

悲しそうに表情を歪めて、男はため息をついた。

「なら、僕が君を傷つけることも躊躇する必要は無いね」

「できるものなら、やってみな」

冬夜が不敵に微笑む。それに向かって男はゆっくりと歩を進めた。「ち、ちよつと待つ」

かなみは二人を止めようとするが、一歩遅かった。冬夜は地を蹴り、男へと疾走する。それを迎えうたんと、男は拳を振りかぶった。遅い 既に冬夜は拳を打ち出している。先制攻撃で相手の攻撃を潰しながら、追撃を狙おうと目論んだ。

しかし、得体の知れない悪寒が冬夜の背筋を抜けていく。一歩手

前で急ブレーキをかけて、冬夜は身構えた。男の拳は、冬夜の顔にまっすぐ向かってくる。軌道は読みやすく、受け流すのも難しくないだろう。そう考えて、冬夜は受け流す体勢に入った。

繰り出される拳を腕で受け流す。しかし、恐ろしいほどの力で進んでくる拳の軌道は僅かに逸れただけで、冬夜の顔に向かってくる。

(……何!?)

間一髪で顔を横に逸らし、拳を躲す。僅かに掠めた頬が切り裂かれたかのように痛み、冬夜は一気に距離を取った。

男の表情から余裕が初めて消え、驚きの色に満ちていた。

「あのタイミングから躲すのか、凄いな」

男の言葉に答えることなく、冬夜は腕で頬を拭った。血が付着している腕を見つめて、冬夜は笑う。心の底から楽しそうに笑う。狂気と恐怖を高揚に変え、彼は駆け出す。男はそれを見ても焦ることなく、拳を構えた。

間合いは三メートルほど。しかし、冬夜はそこでびたりと足を止めた。恐怖からではない。相手の力を見て、これが最善の判断だと確信していたからだ。

腕力は凄いが、速さはない。打ち終わりを狙いながら、ヒット

アンド アウエーで翻弄する。だから、まずは男に拳を振らせなければならなかった。高揚で熱くなっていく体とは対照的に、脳髄は恐ろしいほど冷えていた。深追いは危険だと自分に言い聞かせて、冬夜は小さく息を吐いて、脱力した。

そして、目の前で動かなくなった冬夜を静かに見つめる男も構えを解かなかった。

二人は睨みあったまま、微動だにしない。重い空気に、かなみも止めることを忘れて息を呑んだ。

冬夜の靴がじり、と音を立てた。アスファルトに強く押し付けたまま、彼は地を蹴った。二人の間合いが一瞬にして縮まる。それを待ち構えていたかのように、男の拳が放たれた。しかし、冬夜は男

の拳を避けた。耳元で唸りをあげる風に、肝を冷やしながらも冬夜は拳を放つ。それは男の顔に綺麗に突き刺さり、肉を打つ鈍い音が響いた。

拳に伝わる感触は充分　しかし、冬夜の表情は真剣なままで、男から大きく距離を取った。

再び大きく仰け反った男の姿が視界に入る。先ほどと同等どころか、カウンター気味に入った拳に伝わってくる感触は一撃目より遙かに良かった。それなのに冬夜は、相手が倒れる気がしなかった。

「いやあ驚いた、本当に速いね」

緩やかな動作で仰け反った体勢を立て直す男。あそこで追撃を加えていたら、一体どうなっていたのだろうか　それを想像した冬夜の頬を冷たい汗が伝ってゆく。

「しかし、一発一発が軽い。それじゃ僕は倒れられないな」

苦い笑みで男は言う。しかし、それが虚勢で無いことを、冬夜は分かっていた。もし、先ほどの一撃で倒れるならば、出会いがしらに不意打ちで放った一撃で倒れていたはずだからだ。

あまりに余裕な態度に、冬夜は戦慄を覚えた。打たれ強いなんてレベルではない。

「……化け物か？」

苦々しく冬夜は呟くが、その表情はどことなく楽しげであった。

「よく言われる」

男は戦闘中とは思えない笑みで、冬夜に答えた。それは今までの打撃よりも、遙かにダメージが大きかったのではないかと思わせるほどの悲しげな笑みだった。

人に非ず(二)

「まあ喋りにきたんじゃないんだろ、行くぜ？」

冬夜は返事を待たずに、再び地を蹴った。男が振り下ろす一撃必殺の拳を掻い潜りながら、素早く的確に拳を叩き込んでゆく。

男の拳のように一発の力は無いことは、冬夜も重々承知であった。一発貰えば、それで戦況は一変してしまうだろう。なのに、冬夜はヒット アンド アウエーの作戦から少しずつ離れていった。男との間合いを詰め、ギリギリで避けては側面に回り、拳を打ち込んでゆく。離れずに、びたりと男の動きに合わせながらも、冬夜は男の攻撃を躲し続けた。時折、掠めていく拳に戦慄しながらも、冬夜はいつの間にか笑みを零していた。

「君は本当に凄い、ね」

拳を叩き込まれながらも男は平然と言う。そこに冬夜の拳が更に叩き込まれる。骨が鳴り、男の鼻が不自然に曲がった。しかし、それに構うことなく男は拳を振り回す。それを躲して、冬夜は大きく距離を取った。

それを見て、男は曲がった鼻を手で無理やり治す。鼻から溢れんばかりの血が流れ出してきていたが、それに構うことなく、男は冬夜に相對して構えた。

「お前に言われたくないね、化け物が」

「化け物って……それ傷つくんだから、やめてくれないか？」

「自分の力で何とかしろよ」

それだけ言つて、冬夜は再び男に躍りかかった。展開は変わらな。冬夜が一方的に拳を叩き込み、男の一撃必殺の拳は空を切つてばかりだった。見ている誰もが、冬夜の勝利だと思つただろう。かなみもその一人だった。しかし、どれだけ叩かれても男の勢いは落ちることなく、暴風の如き破壊力を行使してゆく。

冗談じゃない 余裕に見える冬夜であつたが、内心で毒づいて

いた。どれだけ叩いても相手は平然と拳を返してくる。気絶していてもおかしくないほど拳を打ち込んでも、男は立っている。高揚はいつしか焦燥に変わっていく。殴る拳が痛み、全身に酸素を回す心臓は限界まで早鐘を打っていた。

酸素の供給が追いついていないのか、足取りは少しずつ重さを増してゆく。先ほどまで余裕で躲していた拳が、冬夜の体を捉え始めていた。それでも受け流すことになってダメージを最小限に抑えていたが、このままではジリ貧になることは間違いないだろう。しかし、突破口は見つからなかった。ただ、焦りと疲労が少しずつ冬夜の体を蝕んでいった。

そこで冬夜は攻め手を緩め、男の拳を躲すことに集中した。人とは思えないほどの強大な力を受け流すたびに、冬夜の背筋を悪寒が抜けていく。額から流れてくる汗が疲労からくる物なのか、それとも冷たい物なのか、もはや判別がつかなくなっていた。

(このままでは……いずれ押し切られる)

冬夜の拳をいくら打ち込もうとも、相手にダメージは無い。それは相手の攻め手が緩まないことから分かった。それとは対照的に、男の拳は一度でも冬夜を捉えれば、それで終わるだろう。冬夜の表情から少しずつ余裕が消えていった。もはや、隠し切れないほどの焦燥と苛立ちが冬夜の中で渦巻いていた。

相性が悪すぎる　冬夜は本気で逃げることを選択肢として考えた。

この男には勝てないと認めるのは癪に障ったが、それを上回る危機感に、やむを得ないと思い始めていた。

風を切り裂く音を聞きながら、冬夜は向かってくる拳を躲す。しかし、逃げることを思考していた彼の反応は少し遅れた。

男の拳が冬夜の頬骨に僅かに触れた　ただ、それだけのことなのに冬夜の視界に異常をきたした。揺れる世界は輪郭が曖昧になり、男の姿が背景に溶けてゆく。上下の感覚が一瞬にして消え去り、体が宙を舞うような無重力感に包まれた。冬夜の毛穴が一斉に開き、

冷たい汗を吐き出した。

見えない恐怖　今までは男の予備動作を含めて、攻撃を察知し、躲していた。しかし、今はそれができない。間もなく、男はあの恐ろしい力を振るうだろう。それに対し、冬夜は無防備に突っ立っているだけだ。

冬夜は思わず死を意識した。

その刹那、全身の毛穴に針を刺しこんだかのような感覚が駆け抜けていった。耳に届く音は、どことなく遠くに感じたが、それは確実に近づいてくる。先ほどまでの焦りはどこにいったのかと思うほど、脳髄は冷えわたっていた。

揺れる視界の中に動く影を捉えると、冬夜の体は自然と動いていた。彼は曖昧な感覚を頼りに、地を蹴って後ろに飛んだ。

完全には躲し切れない。ならば自ら後ろに飛ぶことで、突っ立っているよりはダメージを軽減すればいい　ほんの一瞬、恐怖に囚われたことで下せなかった冷静な判断、それを取り戻した冬夜は両腕、両足で前面を固めて、衝撃に備えた。

そして、轟音と衝撃が冬夜を貫き、左腕が嫌な音を立てた。それだけでなく全身を固いアスファルトにぶつけながら、冬夜は転がっていった。無事な右手で後頭部を庇いながら、転がる勢いに身を委ねた。

痛みで覚醒したのか、揺れる視界は先ほどより鮮明になっていた。随分と遠いところに男の姿があった　どこまでも余裕を感じさせる優しいな笑みのままで。

冬夜は人の力によつて、ここまで吹き飛ばされるとは思いもしなかった。二人の間合いは十メートルほどまで広がっている。これは、もはや人の領域ではない。だらりと揺れる左腕に激痛を走るのを感じながらも、冬夜は言い知れぬ高揚に満たされていた。

「化け物め」

「だから、それ言われると結構傷つくんだけどな。僕だって好きで、こんな風に生まれたわけじゃないんだから」

悲しげな苦笑を漏らしながら、男はゆっくりと冬夜に迫る。しかし、冬夜もその顔に凶悪な笑みを浮かべたまま微動だにしなかった。「お前なら本気を出してもいい気がする」

「君なら本気を出してもいいのかもしれない」

口を開いたのは、ほぼ同時だった。冬夜はポケットからナイフを取り出し、男は鋭く地を蹴り、加速する。

二人の間合いは一瞬にして零になる。一撃必殺の拳を振りかぶる男に、迎えつつ冬夜。

しかし、お互いの攻撃がどちらかの体に触れることはなかった。

男の拳は冬夜の顔面すれすれで止まり、冬夜のナイフは男の首筋の皮一枚を薄くなぞったところで止まっていた。

男と冬夜はお互いに表情を険しくしたまま、固まっていた。二人の姿を周囲で見守る者は皆、息を飲んだ。しかし、何事も起きないまま、時が過ぎてゆく。

先に動いたのは冬夜だった。彼はナイフをポケットにしまい、大きくため息をつきながら言う。

「一時休戦」

「賛成だね」

それに男も即答し、二人は脱兎のごとく駆け出した。

その場に残された者は啞然とし、逃げてゆく二人の後姿を見送った。しかし、彼らもある音で我に返る。遠くから響いてくるサイレン。先ほどとは違う質のサイレンに、男たちの表情は強張って行く。それを一瞥もせずに出ていく二人の意図を察した彼らも、慌てて逃げ始めた。

かなみは今にも泣きそうな表情で、その場に一人残されてしまった。

「どうやら職員が通報したっばいな。お前らが一杯で押し寄せるから」

冬夜は左腕を不自然に揺らしながら、並走する男に言った。

「……僕だつて、こうなつたのは不本意なんだよ。最初は話だけで済ませる予定だったのに」

子供のように唇を尖らせながら、男は返す。冬夜がやや息を切らしているのに対し、男は平然と走り続けていた。

つくづく化け物だ、と冬夜は悪態をつきそうになつたのを飲み込んだ。今は二人で争っている場合ではないことを彼は分かっていた。

「大体、話で済ませるって……なら何故、西浦に手を出した？」

「西浦……？」

男は少し考えて、思い出したかのように続けた。

「あー、あの可愛い子ちゃんのことかな。いや、僕らから手を出したんじゃないんだけど」

その言葉を受けて、冬夜は驚愕で絶句する。そして呆れたように、大きくため息をついた。

「……あの馬鹿が」

冬夜は苦々しく呟いた。その横で男は軽快に笑う。

「いやー可愛い子だったね、今度お付き合いを申し込みたいよ」

「黙れ、二度と来るな」

冬夜は、男の言葉に即座に返す。どことなく苛立ちを思わせる声色だった。

しかし、男はどこまでも余裕を崩さずに言う。

「それは無理な話だね。君の件を解決しないと」

「俺が死ねば満足か？　なら、さつさと殺せばいい」

校舎の中に逃げ込んだ二人は、足を緩めて向かい合つた。冬夜は睨みつけ、男はやんわりとした視線を投げかけている。

「だから……話で済ませられたら、それが一番なんだけど」

「なら、さつさとその具体案を示せ」

冬夜は二階へと続く階段を上りながら言った。男もその後が続く。「僕の友人に謝って、二度と手を出さないことを誓ってくれたら、それでいいんだよ」

「……それだけか？」

訝るように眉をひそめた冬夜は、男の方に振り返った。

「それだけ」

あっさりと肯定する男。それだけで済むのなら、先ほどの命を削るような戦闘は一体なんだったのだろうか　冬夜は頭を抱えそうになった。

「分かった、お前に従う。戦っても、化け物には勝てそうにないしな」

「まだ、それを言うかなあ……」

男は不満そうに唇を尖らせて言うが、冬夜はそれを無視して、窓から外の様子を伺った。

教職員が複数の警官に対応しているところが、ちょうど見えた。

彼らは校舎の方　つまり、冬夜と男が逃げた方向を指差して、警官を誘導してゆく。

それを確認して、冬夜は手短な教室の扉を開いた。その後にも男も続く。

「どうする気だい？」

男の問いに、冬夜は気だるそうにため息をつきながらも答える。

「校舎つてのは隠れるところは多いが、逃げるにはあまり最適なところじゃないんだよ。ましてや相手は複数　そうなると逃げ道を塞がれて、じわじわと包囲網を狭め、俺たちの居場所を特定してきやがる。そうなる前に、さっさと校舎から出なければならぬ……こうやってね」

教室に入った冬夜は、何の迷いもなく反対側にある窓をくぐり、飛び降りた。男はその様子にしばらく固まっていたが、窓際まで寄って様子を伺った。

左手が折れているせいも、綺麗な着地が決まらずに少し音が響いたが、冬夜はすんなりと立ち上がった。

「二階だし、落ちても大した怪我にならない。それでも怖かったら、大人しく警察に捕ま　」

冬夜の言葉を終わる前に、男は窓枠から身を躍らせた。そして綺

麗に着地を決めて、冬夜に笑いかける。

「さあ行こう」

苦い表情のまま立ち尽くす冬夜を気にかけることなく、男は楽しそうに歩いてゆく。

その後姿を見つめながら、冬夜は思う　とても面倒くさいことになった、と。

お仕置き

かなみは警官に少し事情を聞かれたが、すぐに解放された。

見たこともないこの学校の生徒と、他校の生徒が喧嘩をしていた、と証言したためだ。警官が追及してこなかったのは、恐らくただの喧嘩だと高を括っているからだろう。彼らの表情にも真剣みはなく、どことなく呆れたような雰囲気を漂わせていた。

しかし、その後も続いて何台かのパトカーが学校の敷地内に入ってくるのを見て、かなみは少々驚いた。そこまで人員を割かなければならないことだとは思えなかったのだ。

パトカーから降りてきた警官は、かなみのことを気にすることなく、続々と校舎へと消えてゆく。

湧き上がってくる違和感に、かなみは眉をひそめた。そして違和感嫌な予感へと変わり、かなみの中で形を成した。

（もし……喧嘩程度に人員を割けないようなそれが霞んでしまうほどの、そんな大きな事が起きていたとしたら？）

認めたくないが、そうだとしたら先ほど入ってきた救急車の件も辻褄が合ってしまう。

違う、そんなはずない　そう思いながらも、かなみの心は恐怖が蝕んでいった。足は地面に縫い付けられてしまったかのように、一歩も動くことができなかった。冷たい汗が頬を伝い流れていく。しかし、それを拭うことなく、ただじつと夕焼けが赤く染め上げられながら佇んでいた。

「……かなみ？」

その金縛りを解いたのは、彼女を呼ぶ声だった。かなみがゆっくりと振り返ると、そこには険しい表情の彩華がいた。

「あんだ、こんなところで何してるの？ ……って顔色悪いけど、大丈夫？」

そう言う彩華も顔色は良くない。しかし、あまりにも余裕の無い

かなみは彩華の袖を掴み、その場に崩れ落ちてしまった。

「ど、どうしたの？」

突然、すがりつかれた彩華は困惑を隠しきれず、かなみの背中を撫ぜながら尋ねた。すると、かなみは今にも泣き出しそうな震えた声で言った。

「な、南雲くんが……」

「え、あの子がどうしたの？」

「もう……どうしたらいいのか、どうしたいのか分からない」

かなみの目じりから涙が零れていく。

好きかはどうか分からない、ただ気になってはいた。文化祭の時は、その人のことを少し知れて、嬉しかった。なのに

「今は分からない。南雲くんのこと、私のことも……もうぐちゃぐちゃで」

かなみの頬を幾筋も涙が伝っていく。それをただじつと見つめる彩華の表情も悲しげであった。

小学校の頃から付き合っている二人だが、彩華はこんなかなみの姿を見たことが無かった。

「南雲くんは……私が近くにいると迷惑なのかなあ？」

「そんなこと」

彩華は即座に否定しようとして口を開いたが、途中で止まってしまった。確信が持てなかったのもある。しかし、それ以上にもっと大切なことがある。そう思ったのだ。

「……本人に言ってみなきゃ分からないよ。かなみは自分の想いを全て伝えた？」

彩華の言葉に、かなみは俯きながら首を横に振った。

「自分の気持ちが変わらなくても、気になっているのは本当のことなんでしょう？　なら、もっと近づかないと分からないよ。もっと、気になることを聞いてもらんよ。そうしなきゃ、人ってのは分かり合えないと思う。意見を交し合っこそ、相手を理解し、自分を理解できるようになっていくんだよ」

俯いたままのかなみに向けて、彩華は続けて言う。

「怖いと思っていた人が話してみれば、案外良い人だった。気弱に見えた子が実は確固たる意思を持ち、目標に向かって進んでいた。そんなことはいくらでもあるんだよ。でもね、その奥底を知るには、何回もコミュニケーションを取る事が大切。最初はね、誰もが表面しか見せてくれないの。だから私は、深いところにお互いもぐれるようになるまで、接触を試みるの。そしてお互い、色々な情報を交換して、自分を知り、相手を知っていくの」

持論だけだね　と最後に付け加えて、彩華は恥ずかしそうに笑う。いつしか、かなみは顔を上げて、じつと彩華を見つめていた。

「気持ちを探る、とか空気を読むって大切なことかもしれないけど、やっぱり言葉で本音をぶつけ合う方が、私は好きだよ」

「……うん」

先ほどまでの気弱さはどこにいったのか、かなみの瞳は光を取り戻していた。これで大丈夫、と彩華も一安心したところで立ち上がった。

「さて、行きますか」

「え、どこに？」

楽しげに微笑む彩華に、かなみは尋ねた。

「そんなの決まっているじゃないの」

まだアスファルトに座ったままのかなみに手を差し伸べて、彩華は言う。

「南雲を探しに、ね」

かなみはその手を取り、立ち上がった。

そして二人の少女は歩き出す　その物語の渦中へと。

冬夜と男はフェンスを乗り越えて、学校の敷地から出た。その後も二人は下手に動くことはせず、じつと身を潜めた。周囲は田畑しかなく、隠れられるところは少ない。しかし、起伏に富んだ土地なので、それを上手く利用すれば身を隠すこともできた。

「なあ、これからどうするんだ？」

男は草地にのんびりと寝転がりながら尋ねた。冬夜はそれを一瞥して、再び周囲の警戒を強める。答えない冬夜に、男は続けた。

「僕はこのまま隠れてれば身内が裏切らない限り、問題ないと思う。まあ裏切られたとしても、喧嘩程度で補導では痛くも痒くも無いしね」

「学校だけが全てじゃない」

冬夜は男が言おうとしていることは分かっていた。恐らく彼は、冬夜のことを心配しているのだろう。しかし、ほんの少し前まで敵だった者に気を遣われることが気に障り、冬夜はぶっきらぼうに答えた。

「ふうん……こんな素敵な進学校に入つてて、そんなこと言うのかあ。勿体無い」

男はそれだけ言つて、黙った。冬夜は気になつて視線を向けると、のんびりと空を仰ぎ見たままの男が視界に映り、小さくため息が漏れた。

何という緊張感の無さだろうか　かく言う冬夜も緊張感と同等に高揚を覚えていたりするのだが。

時が遡る前の逃亡生活は辛いことも多かったが、毎日がスリル感に溢れていた。今は警官に手を出せない、と不利な状況ではある。しかし、それを上回る高揚が冬夜を満たしていた。そう考えると、自分もやはり頭のネジが一、二本抜けているのではないか、と思うのであった。

「楽しそうだね」

その言葉に冬夜はびくりと肩を震わせた。同時に左腕が痛んだが、それを気にしているほど余裕は無かった。自分の心を見透かしたかのような男の言葉に、冬夜の中を動揺が走り抜けた。

「……これで制約がなければ、もっと楽しめたんだけどな」
「制約つて腕のことかい？」

それもある　冬夜は肯定しながら、続けて言う。

「何よりこちらが攻勢に出れないことが一番のストレスだな」

「攻勢って……警官を相手にかい？」

「現状を見て、それ以外に何がいる？」

冬夜の不親切な答えも意に介する様子もなく、男は笑った。

「君は面白いな、本当に」

「お褒めに預かり光栄だよ」

日が沈み始め、夕焼けに彩られていく世界を眺めながら冬夜は答えた。

いつまでも現状でじっとしていても仕方ない　そう判断した冬

夜は、身をかがめたまま行動を開始した。

「おや、どこか行くのかい？」

それを見て、のんびりと寝転がっていた男が反応を示した。しかし、冬夜は答えない。後ろについてくる気配を感じていたが、それも拒絶せずに冬夜は黙ったまま歩を進めた。

しかし、男は冬夜の向かう先を見て、足を止めた。

「学校に戻るのかい？」

男の言葉に冬夜は振り返った。驚いた様子の男が視界に入ったが、それを一瞥して冬夜は進んでいく。

「やり残していることがある」

「……君は案外、馬鹿なんじゃないかな？」

「かもな」

否定しない冬夜は皮肉げに笑みを零しながらも、迷いはなかった。左腕が使えない冬夜は、右手と両足を器用に使ってフェンスを乗り越えた。冬夜が姿を現したのは駐輪場だが、ほとんど自転車は無かった。もしかすると上村の事件で、部活動も早く切り上げて全生徒を帰宅させたのかもしれない。そうなると残っている生徒は非常に目立ってしまう。厄介なことになった　　と思考を巡らせている最中に、後ろから声が掛かった。

「で、何をやり残したんだい？」

男はフェンスを乗り越えて、冬夜の後ろに着地しながら尋ねた。

その際も、何気ない動作で音を最小限に抑えている。

「お仕置き」

「お仕置き？」

男は冬夜の言葉を復唱する。

「そう。悪いことしたら、お仕置きしないと」

「なら、僕も君にお仕置きしなきゃあね」

「その件は、俺が謝罪して、二度と手を出さないってことで手を打つただろうが」

そうだった、と笑いながら後をついてくる男に、冬夜は頭を抱えそうになった。そこで冬夜はふと思う　何故、彼はついてきたのだろうか。冬夜がそれを尋ねると、男は当然のように答える。

「だって面白そうだし」

「そうか」

それを聞いて、冬夜は深いため息をついた。もはや相手にしても疲れるだけだ、と割り切って、目的地に向けて無言で歩き出した。

予想通り、部活動は早く切り上げられて、大半の生徒は帰宅していた。

剣道部もそれに漏れず、先生から帰宅するようになると言われ、早めに練習を切り上げたのであった。そのせいか、やや持て余した感じに苛まれながら海里は更衣室へと向かっていた。

（いや、違う。この感じは叩き足りないんだ、あの男を）

不意に力が入り、かみ締めた奥歯が鳴った。海里にとつてあの男

上村 祐介は憎悪の対象でしかない。

「私の大切な弟をよくも……」

着替えや荷物を入れているロッカーを叩きそうになったが、海里は思いとどまる。まだ後輩が着替えている最中だったので、妙な行動を起こしてはならないと自制したのであった。

「黒田先輩、お先です。お疲れ様でした」

「うん、お疲れ様」

海里と入れ替わるように更衣室から出て行く後輩たち　近頃、苛立っている海里の様子に、彼女らも怯えているのであった。

誰もいなくなった更衣室で、海里は着替えを済ませてゆく。そして鞆の傍らに置いていた竹刀袋をロッカーに放り込んで、鍵をかけた。

中に血で汚れた木刀が入っていたせいか、ロッカーが大きな音を立てたが、それを気にすることなく海里は無表情のまま更衣室を後にした。まさか使用した凶器を学校に置いたままにしているとは思うまい　浅はかながら、彼女なりに考えた結果の行動であった。

更衣室を使っていたのは海里が最後だったので、鍵を閉めて職員室まで届けなければならなかった。慣れた手つきで鍵を閉めて、職員室へと足を向ける。そこで人の気配を察知して、彼女は足を止めた。

日が沈み、蛍光灯が不気味に照らす廊下の先に影が二つ、ゆつくりと海里の方に向かってくる。随分と古い型なのか、それとも手入れされていないのか、蛍光灯に通電する音が妙に耳に障った。

「誰」

静寂が鎮座する廊下に海里の音が響く。

「用件はお仕置きと言えば分かるか、海里先輩」

どこかで聞き覚えのある声だ　海里は眉をひそめながら、じつと影を見つめた。その瞳が冷たい色をきざしてゆく。

（木刀はロッカー……手持ちは竹刀しかない、どうする？）

そこまで思考をしてから、海里は少し自己嫌悪の念に駆られた。物事を全て力押ししてしまう自分に嫌気が差したのであった。

「何のことかしら？」

「上村くんをやったのは、あなたです」

尋ねるのではなく、断定。それを聞いて、海里の思考から不必要なものが消えていく。冷たくなっていく脳髓が出した答えは、実にシンプル　力でねじ伏せる、であった。

まだ距離はある　距離を詰めてこようとしない二人に背を向け

て、海里は更衣室の扉に鍵を差し込んだ。焦りはなく、扉はすんなりと鍵を飲み込み、それを捻った。小気味の良い音を立てて、鍵が開いたのを確認して、彼女はその身を更衣室へと滑り込ませて、後ろ手で鍵を閉めた。

そして暗い笑みを浮かべながら、ロッカーへと歩み寄っていった。

更衣室に消えていった海里の後姿。それを見送った冬夜は追う気配も見せず、静かに息を吐いた。その表情に一切の焦りはない。

「あーあ、逃げられたね」

男は残念そうなのか、楽しそうなのか分からない声で言った。それに答えることなく、冬夜は更衣室の扉へと向かっていく。

「逃げたって、また明日がある。同じ学校の生徒であるかぎり、俺からは完全に逃れられないさ。きっと、彼女もそれを知っている。

恐らく」

冬夜の言葉を遮るように、更衣室の扉が大きな音を立てて開かれた。

「ほらね、やっぱり」

手には木刀、血走った眼で睨みつけてくる海里の姿に、冬夜は呆れたように肩をすくめた。

海里はそこから一言も発さなかった。正面で構えた木刀を小さく揺らしながら、距離を詰めてくる。

「大丈夫なのかい？ 君の左腕、使い物にならないだろう」

「まあ奥の手もあるし、問題ない」

凶悪な笑みで返す冬夜に、嫌な予感を感じながらも男は黙って見守った。

そして冬夜は海里へと向き直った。両手をだらりと下げて、ただ突っ立っているようにしか見えない。その姿に海里は苛立ちを覚えた。

「貴様……舐めているのか？」

冬夜は答えない。向けられる殺意に高揚を覚えながらも、一切の

感情を表に出すことなく、じつと海里の顔を見据えていた。あと一足踏み込めば、木刀の射程距離に冬夜の体が入る。それほどの距離に差し掛かって、彼は構えなかった。

あまりにも余裕な態度を見せ続ける冬夜に違和感を覚え、海里は打ち込みを躊躇う。冬夜はその瞬間を狙っていた。瞳の殺意が揺らぐ一瞬を。

その刹那、一気に距離を詰めた冬夜。それに遅れながらも、海里は鏢で迎えうった。しかし、それも読んでいた冬夜は折れた左腕で受けながら、右手を振りかぶった。

腰の回転を伝え、コンパクトに放たれたフック。しかし、拳は握っていなかった。

手の付け根、インパクトの瞬間に最も力を逃しにくい部位を使って、海里の顎を打ち抜こうと放たれた一撃だった。

「チツ！」

海里は鏢を冬夜に押し付けて、上半身を反らす。攻撃のためではない、少しでも冬夜から離れようとした結果であった。迫る一撃を目前に、海里の体が少しだけ下がる。しかし、それでは躲し切れなかったようで、海里の頬から乾いた音が響いた。

握っていなかった指が平手打ちのように海里の頬を叩いたのであった。しかし、彼女に大したダメージはない。冬夜は一撃で仕留められなかったことに、小さく舌打ちを漏らした。

その刹那、海里の瞳に殺意が戻り、冬夜の背筋を悪寒が抜けていく。

「やああああ！」

迫る鏢を避けながら、冬夜は一度距離を取ろうと試みるが、海里がそれを許さなかった。離脱が半端な距離になったところで、海里の木刀が恐ろしいスピードで冬夜に襲い掛かったのであった。

「ちよ、待て……本気で殺す気か！」

珍しく声を荒げる冬夜。それを見て、男は軽快に笑う。

「逆にお仕置きされてやんの」

「やむを得まい……奥の手、交代だ、交代！」

それでも木刀を何とか躲しながら、冬夜は叫んだ。それを耳にして、男は唾然とした様子で二人を見つめていた。

その刹那、海里の視線が男の方へと向いた。このタイミングを逃せば、もう二度とチャンスは訪れないだろう。一撃で戦闘不能にしなければならぬ。そのプレッシャーが冬夜を包み込む。

それでも冬夜は笑う。まるで、そのプレッシャーですら楽しんでるかのよう。

動く右腕を海里の右腕に絡めて、肘と肩の関節を捉える。そして一瞬の迷いもなく、曲がらない方向へと力を込めた。

骨が異常な音を立てた。触れた腕から伝わってくる感触を確かめて、冬夜は海里を解放する。

「う、あ」

小さく呻きながら海里は膝を突いた。その手から木刀が零れ落ち、廊下に高い音が響き渡る。その隙に木刀を遠くに蹴りながら、冬夜も彼女から距離を取った。

海里は左手で右肩を抑えながら、うずくまっている。それでも一言も叫ばない彼女に、冬夜は少し感心していた。

「僕は困か……奥の手、せこい」

苦い笑みで二人を見つめていた男が言った。

「左腕が折れてるんだから、それぐらい許せ」

「でさ、その子はどうするの？」

「話、変わりすぎだろう。まあ何とかなると思う」

男の切り替えの早さに呆れながらも、冬夜は答えた。興奮の余韻か、饒舌になっていることを自覚しながらも、冬夜は続ける。

「お前の学校の生徒のせいになったりしないかな、って甘い見積もりを立ててる。本当にいいタイミングで押しかけてくれたぜ」

冬夜が意地悪そうに笑むと、男は顔を引きつらせた。

「ええー……僕たちのせいにするの？」

「捕まりたくなかったら、スケープゴートでも用意すればいい」

心底、楽しそうに冬夜は笑いかけた。それでも男の表情はあっさりとしたもので、気にしているようには見えない。

「んー、まあそれはいいんだけど」

本当にどうでも良さそうに男は後ろを指差した。

「あの子達には、どうやって説明するの？」

「あの子達？」と復唱しながら、冬夜は男の後ろに視線をやった。極度の集中のせいか視界に入っていないなかった人物を捉えて、冬夜の表情は固まった。

終焉、そして始まり

陽光が差し込む、白の世界。その中に小さく息をする者がいた。顔中に包帯やガーゼが貼られ、白の世界に同化してしまいそうであった。

間もなく夏を迎えるとは思えない、涼しく爽やかな風が窓から流れ込んできて、露出面積の少ない肌を撫でた。消毒液の臭いが僅かに残る病室の中で、上村はベッドから身を起こして小さくため息をついた。

「どうかしました？」

男の傍らに座っている少女　南雲　夏樹は、体を起そうとする上村の背に手を添えながら尋ねた。夏に向けてのことか、髪は肩にかからない程度にまで切りそろえられていた。

「ううん、何でもない」

ぼんやりと窓の外を眺めながら、上村は答えた　不思議そうに首を傾げる夏樹とは目も合わさずに。

「ため息をつきたいのは俺の方だよ。お前も元気そうだし、そろそろ帰っていいか？」

上村が夏樹とも目を合わさなかった理由は、この声の主にあった。夏樹の隣でパイプイスに腰掛けている冬夜は気だるそうに言った。あれほど打ちのめされた上村であったが、命に別状はなく後遺症も残らないらしい。それを知った冬夜は、心ひそかに安堵し、態度が緩みきっていたのだ。

「荷物持ち」

「……はいよ」

夏樹の一言で盛大にため息をつきながらも、冬夜は反抗しなかった。反抗したら、どうなるのかは体験済みだ。その為に、彼は従わざるを得なかったのだ。

我が妹ながら残虐極まりない　夏樹の冷ややかな視線を受けた

冬夜は、額に汗を滲ませながら思う。折れた左腕を見て、最初の方こそ気を遣っていたが、最近ではこの扱いである。

逆らえば、ギブスで固められた左腕を蹴る。夏樹が誰に似たのか、冬夜はさっぱり分からなかった。

それでも、冬夜はこの雰囲気の中で長居したくなかった。この状況で居座っても、ただの邪魔者でしかない。

彼はパイプイスから腰を上げると、出口へと向かってゆく。その後姿に向かつて夏樹が尋ねた。

「どこ行くの？」

「外で待つてる」

「逃げたら分かってるよね？」

「分かってる」

夏樹との短い問答を終えて、冬夜はさっさと病室から出て行こうと扉を開いた。

「待て」

それを上村が呼び止めた。冬夜はゆっくりと振り返って、上村を静かに見つめた。

「黒田先輩はどうしてる？」

「……元気してるよ」

「そうか」

それを聞いて、上村は小さく息を吐いた。それがどういった感情を吐き出したものなのか、冬夜には分からない。しかし、それを気にすることなく、冬夜は病室を後にした。

結局、学校と警察は犯人は見つけられないまま、事件は終息を迎えていた。それは冬夜にとって都合が良いのか、悪いのかと聞かれれば、彼は「どうでもいい」と答えるだろう。

行いの報いはそれぞれが受けている。上村にせよ、海里にせよ。冬夜は院内のベンチに腰掛けて夏樹を待つことにした。しばらく、夏樹が出てくることはないだろうと推測して、冬夜は窓の外を眺めた。夏を思わせる強烈な日差しが窓から差し込み、冬夜のすぐ足元

まで伸びてきている。

「もう夏か」

小さく零した冬夜　時が遡って、もう三ヶ月が経ってしまった。まもなく学校は夏休みを迎えるが、部活動に入っていない上に学校での交友関係が壊滅的な彼は暇を持って余すに違いない。

これでは前の人生と同じではないか　冬夜はベンチの背もたれに身を預けて、真っ白な天井を仰ぎ見た。

自分には何も無い、成長も変化も何もかもが。まっさらの真っ白だ。やり直すチャンスを手におきながら、それを活かすこともせず、ただただ腐ってゆく日々を過ごしていく自分に嫌気が差していた。

（真っ白じゃない、真っ黒か。それが故に、周りが塗りつぶされて何も見えないんだ）

こんな自分がやり直しを望むことがおこがましい。過去に苛まれ、最後まで苦しんで朽ちていくことが自分の末路として相應しいのかもしれない。それが自らの行いに対する報いだ　冬夜はそこで思考を打ち切って、ため息をついた。

思考から抜け出した冬夜の耳に、蝉の鳴き声が届く。どこか遠くで鳴いているらしく、外から風と共に流れ込んできた。一定の低さを保ちながら鳴き続ける蝉　それが蛍光灯の音を連想させ、冬夜の脳裏にあの日の光景が浮かび上がった。

右肩と肘を外したとは言え、まだ動こうと思えば動ける海里を後ろに置いた状態で、冬夜は固まっていた。その視線の先には、かなみと彩華も突っ立ったまま微動だにしない姿があった。

重苦しい雰囲気口を開くことが出来なかった　ただ一人の例外を除いて。

「先ほどはどうも、可愛い子ちゃん。えっと西浦さん、だっけ？」
優しげに微笑みながら男は言う。

「あ……どうも」

それに律儀に返しながらも、かなみの目は驚愕で大きく見開かれたままだった。その隣の彩華は険しい表情で、冬夜と男を睨みつけていた。

少し余裕を取り戻した冬夜は、かなみよりも彩華に説明する方が大変そうだと思い、動く右手で頭をかいた。

「説明、要るか？」

渋々と言った様子で冬夜が尋ねると、二人は無言で頷いた。それを見て、冬夜は小さくため息を吐いてから、口を開く。

「上村をやったのは海里先輩だよ」

彩華はそれだけ聞くと顔を引きつらせたが、かなみは不思議そうに首を傾げた。

「上村くん？」

「救急車来てただろ？ あれは上村を運んでいったんだよ」

冬夜が手短かに説明すると、彩華もそれに頷いた。

「うん……でも、黒田先輩が何故？」

「弟の件だろ」

彩華の問いに冬夜は即答し、そのまま続ける。

「巷では、陸を殴ったのは上村ってことになっているからな。そのウワサを耳にして、先輩は怒ったんだと俺は推測している」

呆れたように、冬夜は首をすくめた。それを聞いて、海里の表情が歪む。

「なっている……とは、どういうことだ？」

「黒田を殴ったのは俺だよ」

冬夜は海里の方に振り返って言った。それを聞いて、海里は驚愕で大きく目を見開いた。そして見る間に顔を真っ赤に染めて、血走った眼が冬夜を睨みつける。

「貴様……」

低く唸るような声を絞り出しながら、海里は震えていた。それを見て、冬夜は苦笑で返す。

「俺に矛先を向けるのは止してくれ。先に、このナイフで俺を刺そ

うとしたのは、アイツなんだぜ？」

冬夜はポケットからナイフを取り出して、宙に放り投げた。くるくると回りながら落ちてくるナイフが蛍光灯の光を鈍く反射する。冬夜はそれを手で受けて、弄び始めた。

「で、仕方なく俺が海里先輩に自首を促そうと思ったが、しかし」

「最初から、思いつきり戦う気だったじゃないか」

冬夜の言葉を遮って、男は言った。相変わらず場違いな笑みを浮かべたまま、のんびりと壁にもたれかかっている。

「まあ、どちらにせよ。海里先輩が木刀を装備したので、これは話による解決は無理だと判断して、右肩と肘の関節を外した」

以上、と締めくくる冬夜。その姿を、海里は後ろからじっと睨みつけていたが、先ほどより眼光は萎んでいた。

「そんな馬鹿な」と海里は漏らしていたが、冬夜は無視した。

「……その件は大体、理解したんだけど、さ」

彩華は納得がいけないといった様子で、続けて言った。

「この人、誰なの？」

彩華の視線の先には、冬夜も名前を知らない男がいた。

そういえば一体誰なのだろうか　冬夜も今更、首を傾げる。

「ん、僕は玖月 緋斗。よろしく、可愛い子ちゃんたち」

そんなセリフを恥じらい一つ見せずに、緋斗は言った。相変わらず柔らかい笑みを浮かべたままの彼に、冬夜は顔をしかめた。

しかし、そんなことは知ったことではないと言わんばかりに、緋斗は続けて言う。

「彼のお仕置きのためにやってきました」

緋斗の指差す先には冬夜の姿があった。混乱の極みに達した彩華とかなみは、首を傾げることしかできない。

「彼がね」

「それはともかく」

説明を続けようとする緋斗を遮って、冬夜が口を挟んだ。これ以

上は喋るな、と言わんばかりに強く緋斗を睨みつけながら。

「二人は早く帰れ」

「南雲くんはどうするの？」

冬夜の言葉に答えずに、かなみは尋ねた。

「後始末」

海里と緋斗を指差しながら、冬夜は続ける。

「この場を無難に抜けられる方法は既に考えてある。だから二人は帰れ」

「でも」

「大丈夫だから」

かなみの言葉を遮って、冬夜は言う。有無を言わせない強い口調に彼女は怯んで、何も返せなかった。

「頼む」

二人とも不満を残した表情だったが、それ以上は何も言わずに冬夜に背を向けて歩き出した。

「また今度でいいから、ちゃんと説明してよね」

去り際に彩華が言い残していったが、冬夜は苦笑を返すだけだった。

二人の背中が見えなくなるまで、じっと見つめていた冬夜はそっと息を吐いた。

「さて」

冬夜は反転し、海里の方に歩んでいく。その表情はどこか楽しげなもので、海里の背筋を悪寒が抜けていった。

「僕らの怪我はあの男にやられたってことで口裏合わせてくださいね？」

それだけ言うと冬夜は緋斗の方を振り返った。彼はただ不思議そうに首を傾げながら、冬夜を見つめている。それを見て、冬夜の笑みは凶悪に変化した。

「さて、逃げる準備は大丈夫か？」

「……まさか、僕を囮にする気？」

冬夜はそれに答えない。その代わりに行動で示した。廊下に響き渡る絶叫　それを聞きつけた人が集まるまで、大した時間はないだろう。

それを聞いて、緋斗は脱兎のごとく駆け出した。冬夜はその後姿を満足そうな笑みで見送る。腕一本折ったのだから、これぐらいの仕事はしてもらわなければ困る　と言わんばかりに。

「二度と来るなよ、化け物」

呟きは緋斗に届くことなく、廊下の静寂に吞まれた。

玖月 緋斗　冬夜は、その名を再び聞くことになるとは思ってもしなかった。

（あの忌々しい化け物め）

緋斗の背中は闇の奥に吸い込まれてゆく。冬夜はそれを静かに見つめていた。

人でなくなつた冬夜と人でなしの緋斗　二人が交わり、世界の歯車は不気味な音を立てて回り始める。

過去から現在へ

玖月 緋斗　その名前を耳にしたのは、冬夜にとって初めてではなかった。

忌々しい記憶の紐が解かれ、冬夜の脳裏に鮮やかな映像が流れ始める。ただ、それを振り払おうともせず、彼は苦い表情であったが、じっとそれを眺めていた。

それは二度と同じ過ちを犯さぬように、その身に焼き付けているようにも見える。

また、その映像から何かを得ようとしているようにも見えた。

実際はその両方で、冬夜は二度と同じ過ちを犯さぬように、経験から何かを学ぼうとしているのであった。

映し出されているのは一人の男　少し大人びた容貌の玖月 緋斗であった。彼は楽しげな笑みを浮かべたまま、こちらに近づいてくる。

暗い路地裏に緋斗の双眸が怪しく光る。それを見て、冬夜は忌々しくつぶやく。

「……こんな状態じゃなかったら、もっと相手してやれたんだがな」
だらりと垂れ下がった右腕を庇うように、冬夜は左腕を前にして半身になった。その手に握られているのはナイフと形容するには、やや大きすぎる一品であった。

それを構えながらも、冬夜は緋斗の間合いに飛び込もうとしなかった　むしろ、じりじりと足を滑らせて、距離を取っていた。

その原因は冬夜の右腕にある。

見た目は出血もなく、力さえ入れれば動くように見えるが、脱力して揺れるそれは見た目ほど健全な状態でなかった。内部では骨が折れるところで済まず、粉々に砕けているところすらあった。

それをたった一握りで行った目の前の人物　緋斗に対し、警戒をするのは当然のことだろう。

しかし、冬夜とは対照的に、緋斗は楽しげに、無警戒でその一歩目を踏み出した。そして二歩、三歩と迷いなく、冬夜の下へと近づいてくる。

（お構いなしか）

小さく舌打ちを漏らして、冬夜は緋斗に背を向けた。

健康体だったなら、どうだろう。立ち向かっても勝率はあつただろうか。そうは考えてみても、あの得体の知れない怪力の前では、どうしても五分五分以上の確率を導き出すことができなかった。

あまりにも殺気の無い一撃。それを読み切れなかった冬夜は、目の前まで緋斗の接近を許してしまった。そして、下された不意打ちにより、戦局は大きく傾いてしまった。

不本意ではあるが、この場は逃げるしかない。そう結論を出すと冬夜は迷うことなく、路地を奥に駆けていった。

（見ている限り、破壊力はあるが、敏捷性に富んでいるようには見えない。つまり、逃げ切れる可能性はそう低くないは）

冬夜の思考を遮ったのは轟音。それに引き続き、体に衝撃が走る。四肢が痛んだが、致命傷はない。一体、何が。冬夜は音の方向を見やった。

「あのねえ……逃げられたら、僕が困るんだけど」

緋斗は相変わらず楽しげな笑みを浮かべて、冬夜の後ろに立っていた。

冬夜はどう考えても、彼が追い付いてこれた理由が分からなかった。

否、分かりたくなかった。それを認めてしまえば、世界の常識が覆ってしまう。そんな世界も嫌だとは思わなかったが、相対的に自身の力が劣化してしまうことだけは認めたくなかったのだ。

しかし、そんな感情を抑え込み、冬夜は現状のすべてを飲み込んだ。今はそんな矮小な自尊心を優先している場合ではないと即座に判断したのであった。

「……まるで削岩機だな」

緋斗の怪力により、派手に崩れたビルの壁を見やりながら、冬夜は吐き捨てるように言った。彼は恐らく、ビルの壁を破壊して、直線的に冬夜の下まで進んできたのだろう。

「そんな人外みたいに言うのは止してほしいな」

人外だろう　そう言つて、冬夜は近くに転がっているコンクリートの欠片を緋斗に向かって投げつけた。それを一つ一つ、手で受け止める緋斗。その隙に冬夜はまた路地裏の闇へと消えてゆく。

「まったく、これじゃただの鬼ごっこだ」

緋斗は呆れたように小さくため息をついて、冬夜の後を追つて闇へと溶け込んでいった。

その瞬間も、冬夜は走り続けていた。緋斗が動き始めた気配を察知して、時折後ろを確認しながらも、彼は走るペースを落とさない。その間に、冬夜はパーカーを脱いだ。動く度に揺れる右腕をせめて体に固定したかったのだ。走りながらとは思えない鮮やかな手際で、右腕の処置を済ませてゆく。

その間も、後ろから絶え間なく放たれる追跡者のプレッシャーに冷や汗を流しながら。

しかし、この場で戦うよりは逃げる方が良い　相手の戦力が全く読めない状態と自身の怪我から、自然と導き出された答であった。ふと冬夜が視線を上げれば、路地裏に光が差し込んでいた。まもなく大通りに出るのだろう。そこまで出てしまえば、追手を巻くことは簡単だ　そう安堵した瞬間であった。

冬夜は目の前に現れた光に違和感を覚えた。そう、この色は「止まれ！」

冬夜が答えに辿り着いたと同時に、路地裏に叫び声が響いた。やはり、と冬夜は表情を歪めながらも、指示に従う様子はない。

路地裏に差し込む光　それは本来、最も警戒しなければならぬものであった。赤色の点滅が意味するものを考えれば、もはや答えは片手で数えられるほどしかない。ここまで気づきが遅れた自身に苛立ちながらも、冬夜は声の方向へと突進してゆく。

「と、とま」

紺の制服に身を包んだ二人の警官の体が揺れた。構えた銃の口は冬夜の方に向いてはいるが、二人の動揺を見る限り、当たるとは思えなかった。

鼓膜を激しく打つであろう発砲音に備えるべく、冬夜は覚悟を決めて、さらに加速していく。

その刹那、放たれる二発の弾丸。それらは冬夜の体を掠めることもなく路地裏の闇へと消えていった。あわよくば後ろから追ってくる人外に当たってくれることを願っていたが、後ろからの気配が弱まることはなかった。

しかし、それを気にしている間はない。冬夜は目の前に迫った二人の警官にナイフを向けた。それを見て、二人は小さく悲鳴を漏らす。それを一瞬にして切り裂いた冬夜は、大通りへと、その身を転がした。

路地裏の闇から放たれるプレッシャーはいまだ衰えることはない。しかし、ここまで来れば、冬夜は勝ったと確信していた。

「残念、また今度な」

距離的に聞こえるはずのない追跡者に言い残して、人ごみに紛れてゆく冬夜。その視界に再び紺色が映し出される。

「南雲 冬夜」

弛緩していた体は反応が一瞬、遅れてしまった。自分の名を呼ぶ紺色の制服と言えば、答えは一つ 警官。彼の敵以外にありえない。しかし、人外から逃げ切れたことに安堵してしまったことが、冬夜の反応を遅らせてしまった。

それに対し、相手に迷いはなかった。パン、と乾いた音が二回、大通りに響き渡る。先ほどまで、行き通う人々の喧騒が満たしていたのがウソのように思える静寂が大通りを支配した。

痛いと言うより、高熱が腹を突き抜けていったような感覚。その後、口に鉄の味が満たしていった。

被弾してしまった。しかも、致命傷となりかねない位置に。

冬夜は小さく舌打ちを漏らして、地を蹴った。目の前で拳銃を構える警官は驚愕で目を大きく見開いた。

再び、拳銃を構え直すが遅い。その間に冬夜は間合いを詰めていた。下りる撃鉄をナイフで止めて、冬夜はそのまま足払いを放つ。両手が使えれば、一瞬でその命を奪うこともできたが、今はそうもいかなかった。力任せに警官の足元を蹴っただけだったが、それを受け身も取らずに警官はアスファルトに転がった。

「痛ッ！」

聞こえたのは予想以上に高い声で、冬夜は振り下ろそうとしていたナイフを思わず止めてしまった。

女、子供は出来るかぎり傷つけない　それが冬夜の中で自然と出来上がっていたルールだったのだ。

とは言え、この場合は先に銃で撃たれているために、仕方ない。

しかし、そこから冬夜のナイフが振り下ろされることはなかった。方や、振り下ろされるであろうナイフに目を瞑り、身構える警官。あまりにも目立つ格好で二人はその動きを止めていた。

警官はいつまで経っても振り下ろされないナイフに、恐る恐ると言った様子で目を開いた。そこには見知った顔が驚愕の色で染まっていた。

「……どうしたの、殺さないの？」

震える声で警官は尋ねた。しかし、冬夜は固まったまま答えない。それを見て、警官は笑う。それは触れてしまえば壊れそうなほど儂さははらんでおり、怒りや悲しみを混ぜたような　負の感情が詰まったものであった。

「ほら、殺しなよ？　お父さんやお母さん……祐介さんを殺したときみたいにな」

その言葉に込められた皮肉や恨みに反応する余裕は無かった。冬夜は驚愕から、苦い表情へと変え、その場から走り去ってゆく。

しかし、腹部を貫いた一発の弾丸は、その逃げ足を確実に鈍らせていた。そして流れる血液が、彼女を冬夜の下へと導く。

そして冬夜はこの時代から姿を消した。

そんな殺人鬼として指名手配を受けていた彼は今、不機嫌そうにファミレスの一角を支配していた。しかし、包帯が巻いてあるのは左腕であった。腹部に傷はなく、この時はまだ殺人すら犯していない。

逃亡生活をしていたころよりは、やや幼さを残した顔になっているが、その瞳には相変わらず混沌の色をきざしていた。

そんな冬夜は現在、待ち合わせ中であった。しかし、彼を呼んだ本人がいまだ姿を現さない。携帯を開いて時刻を確認すると、待ち合わせの時間は三十分ほど前に過ぎていた。

本来の冬夜なら、すでに帰っていてもおかしくなかっただろう。しかし、相手から「もう少しで着くから」と連絡を貰ってしまったために、彼は待つことにしたのだが

(その電話からも既に十五分が経過しているんだが……)

不自然に頬の筋肉を痙攣させながら、冬夜は小さくため息をついた。

待ち合わせの相手が緋斗で無ければ、とつくに帰っていただろう。もう一人、例外を挙げるならば、かなみだろうか。冬夜は気づいていないが、彼女に対しては特別な感情が芽生えていたのであった。

そんなことに気づくことなく、冬夜は再び小さくため息をついた。もう帰ろう。そう決めて席を立つ、その瞬間を見計らったかのように、ファミレスの入り口によくやく緋斗が姿を現した。彼は冬夜を待たせていたという罪悪感を抱いている様子もなく、満面の笑みを浮かべていた。

「ごめん、お待たせ」

「本当に待ったよ」

本来なら「俺も今来たところだ」ぐらいの対応を見せるべきだとも考えた。しかし、この男に対して、そこまでする必要を感じなかった冬夜は、不機嫌なオーラも隠すことなく言った。

「で、何の用だよ？ お前の友人には、もう謝っただろう」

冬夜の学校で起きた事件の和解を目的に、冬夜は緋斗の友人に対して頭を下げた。その際に、緋斗は嫌がる冬夜から携帯電話のアドレスを聞き出していた。

恐らく、その目的が今、明らかになるのだろう。冬夜は連絡を受けた時から、嫌な予感を拭えなかった。そして、それは正解であった。

「つれないなあ……友達、だろ？」

「お前はザックスか。なら俺はクラウドか」

「ネタが分かる子で助かったよ。ただの臭いセリフとして受け取られて、ドン引きされたら、どうしようかと冷や冷やしたよ」

そんな紙一重のネタを使うな、と内心で突っ込みながら、冬夜は盛大にため息をついた。

「で、さっさと要件言ってくれ。俺だって暇じゃないんだ」

「そっか、なら単刀直入に言う」

その瞬間、冬夜は周囲の空気が一変するのを、その肌で感じていた。笑みを消し去り、真顔になった緋斗から得体の知れないプレッシャーを感じ、冷や汗が頬を流れてゆく。追われていた、あの時と似た感覚に冬夜は身構えていた。ギプスで固められた重い左腕を呪いながらも、冬夜はナイフをいつでも取り出せる位置にまで持ってきていた。

しかし、その後の展開は冬夜の予想を大きく裏切ったものであった。

いきなり、冬夜に対して頭を下げた緋斗。そんな彼を理解できないのか、冬夜は啞然とその姿を見下ろしていた。

そして、緋斗は言う。

「あの時、出会った可愛い二人組……紹介してくれないか！」

どうして、こうなった。冬夜は静かに呟きながら、窓の外に目をやった。

定期試験を終えて、緩みきった空気をはらんだ教室で相変わらず、一人ぼつんと取り残されたかのような雰囲気をもとっていた。ただ、それを不快だと思わず、現状を改善しようとしなのが彼らしい。教室の中に目もくれず、ぼんやりとした瞳で外を見つめていた。

あの日、嫌だ何度も断る冬夜を、例の怪力で解放しようとしな
い緋斗。拳句の果てに、苛立ちが限界点を突破したのか、ナイフを
取り出してしまったことを思い出して、冬夜は深いため息をついた。
ファミレスで男二人が言い争っている光景は、やたら注目を集め
た。その上、片方がナイフを取り出すとなると、店内は悲鳴と喧騒
に満ちた。

あまりにも悪くなってしまった状況に焦った冬夜は、とりあえず
緋斗の願いを受諾し、逃げるようにしてファミレスを去ったのであ
った。結局、逃げることは離れられない自身の運命を呪いなが
ら。

「……何だか、いつも僕の話は聞かれていない気がするんだけど」

冬夜が再びため息をつくとき、聞きなれた声が届いた。窓の外から
声の方に視線を向けると、目の端を潤ませた陸が不平を呟いていた。

「悪い、聞いていなかった」

「ですよー」

半ばヤケクソと言った感じで、陸は同意する。しかし、彼は強く
なった。そんなことで折れることなく、彼は続ける。

「ほら、お姉ちゃんのことなんだけどさ……本当にごめんね。それ
とありがとう」

事情を全て知った陸は深々と頭を下げた。

「別にいいって……顔を上げろよ」

冬夜と陸　元々、浮いた二人なのに、さらに目立つようなこと
はしたくない。突然、真面目に頭を下げ始めた陸に、冬夜はやや疲
れたように顔をしかめた。

あれから海里は怪我のこともあり、随分と静かになった。一度だ
け陸に引きずられて、冬夜の前にやってきたが、そのときの萎れ具

合を思い出すと、戦ったときの気迫、殺気がまるで嘘のようであった。

「べ、別に感謝なんてしてないんだからねッ！」

「じゃ」

苦笑を漏らしながら、姉の脳天に手刀を叩き込む陸　　本当にこいつも強くなったな、と冬夜は思うのであった。

それから一週間以上経ったというのに、陸はいまだに頭を下げてくる。それに苛立ちを覚えた冬夜は、陸の後頭部に手刀を振り下ろした。

「痛っ！」

陸が悲鳴と同時に顔を上げた。

「もういいって言うてるだろうが」

やや苛立った冬夜の口調に、陸は再び謝罪の言葉を口にして、その後は俯いてしまった。そんな完全に冬夜が悪者みたいな雰囲気にならないうちに、冬夜は少しだけ苛まれながらも、あと数分もすれば休み時間も終わる。それまでの我慢だ　　居心地の悪い雰囲気から逃れるように、視線を窓の外に移して、ぼんやりと時が過ぎるのを待った。

そんな冬夜をかなみは見つめていた。あの日あったことを話してくれない彼に、やや憤りを覚えながらも、やはり心配する気持ちが大きかった。

(それより)

かなみは先ほどの休み時間に、冬夜から聞かされた話を反芻する。玖月 緋斗　その名は忘れることができなかった。冬夜の腕の怪我は彼によるものであり、あの日に起きた一連の事件の犯人として、その名を聞かされた。実際は、二つの事件は別々のものであったのだが、冬夜の供述により全ての罪を被る結果となったのだ。

そのはずなのに　　かなみは思わず顔をしかめ、首を傾げてしまっ
う。

(なんで……あの二人、仲良くなってるの?)

先ほども言ったとおり、冬夜の左腕を折ったのは緋斗なのに、こ

れは一体どういうことだろうか　その疑問を払拭できないまま、もう一度だけ冬夜の話に反芻する。

「玖月と会ってほしい」

不機嫌そうだったが、冬夜は確かにそう言った。その際、彩華も一緒に、とのことであったが、緋斗が一体何を目的をしているのかも分からない。そして冬夜も何故その申し出を承諾したのか、まったく理解できなかった。

いまだ重そうなギブスで固められた冬夜の左腕を見ると、緋斗に対して苛立ちを覚えるというのに、彼は何故　いくら考えても理解できそうにない冬夜の思考に、かなみは小さくため息を漏らした。

（当日、聞いてみればいつか）

学校ではどうも話にくい雰囲気放つ冬夜を一瞥して、かなみは次の授業の準備を始めた。

約束の日（前）

冬夜たちは最寄の駅から一つだけ離れた駅で待ち合わせをしていた。こういう場合、多数の冬夜やかなみ、彩華に、少数である緋斗が合わせるべきだろうと思ったが、どうしてもという緋斗のわがままに付き合う形となった。

待ち合わせの十分前には駅前のロータリーに着いた冬夜は、ぼんやりと空を眺めていた。青く澄み渡った空に、真っ白な雲、そして殺人的な直射日光に辟易して、小さくため息をついた。

たった一駅の距離だったので、経費削減という名目で自転車ですてきたのが間違이었다。汗がとめどなく流れ、インナーが肌に密着し、その気持ち悪さに何度か身を振った。

「あら、意外」

そんな時だった。聞き覚えのある声に冬夜は駅の改札の方を振り返った。そこには普段のイメージとはかけ離れた二人の女性が立っていた。

一人は彩華　学校ではストレートのままであった、黒く長い髪を後ろで結び上げて、白いワンピースに薄い紫のカーディガンを羽織っていた。文化部のためか、僅かに覗く肌の白さと服装が相まって、どこかのお嬢様にも見える。

もう一人はかなみ　以前より少し短くなった髪の毛の先端はゆるりと巻かれ、学校の時のような真面目な雰囲気は微塵もなかった。薄いピンクのキャミソールにタイトなジーンズという服装であったが、可愛らしさは一片も失われていない。むしろ増していると言っても過言ではないだろう。

そんな二人を呆然と見つめていた冬夜はと言うと、無地のポロシャツにジーンズと至って普通の格好だった。普段から、あまり服装を気にしなかった彼は、家にある服の中でも無難な組み合わせを適当に選び、出てきたのだ。

しかし、この二人を見ると、少し後悔の念が湧いてきたことは否定できない。小さく舌打ちを漏らして、冬夜は視線を逸らしながら尋ねる。

「何が意外なんだよ」

「時間を守るような人には見えなかったもので」

不機嫌そうな冬夜に対し、いつも通りの彩華は楽しそうに微笑みながら答えた。

「ちょ、ちよつとそんな言い方はないんじゃない……」

かなみがフォローに入ろうとするが、語尾が消えていった。どことなく、恥ずかしそうに冬夜と自分の服装を何度も見やっっている。

その昔　それこそ時間が巻き戻る前の話だが、空気を読まないことには定評のあった冬夜でも、この場面では空気を讀むことにした。

「二人とも似合ってるよ」

「そ、そうかな？」

「へえ……更に意外」

照れて顔を真っ赤にするかなみと、本気で驚いたように目を大きく見開いた彩華。それにしても自分のイメージはどうなっているのだろうか　冬夜は疑問に思わざるをえなかった。

確かにお世辞　とは言え、この場合は本当に二人とも似合っているのだが、そんな言葉を吐くとは誰もが思いもしないだろう。実際に冬夜自身も、これほど自分に似合わない言葉はないと思っていたのも事実だ。しかし、そこに触れることなく、冬夜は時計に目をやった。

時刻は待ち合わせの五分前　二人はちょうど良い時間にやってきたと思う。しかし、いまだ言い出した本人の姿が無かった。そこで前回の待ち合わせのときのことが脳裏に蘇り、冬夜はまさかと呟いた。

「どうしたの？」

苦い表情を引きつらせた冬夜に、かなみは尋ねた。

「あいつが時間を守ったところを見たことがないことに今更気づいた」

とは言え、前科は最初の一回だけなのだが、冬夜はその点については伏せておいた。それは、もちろん悪意に基づいた故意だ。すると、二人も思わず頬を引きつらせた。

「この暑い中……私たちは呼び出した本人を待て、と言っの？」
明らかに不機嫌そうに彩華は言う。その声色はもはや冬夜を責めているようにも聞こえた。

「いや、帰ろうか。あんなやつと会っても、良いことないし……時間になつて来なかったから帰ったつて言えば、言い訳としても問題ない」

そう言つて、冬夜はもう一度時計に目をやった。あと一分ほどで約束の時間になる。その瞬間、帰つてやる。そう心に決めて、静かにカウントダウンを開始した。

「で、でも、そんなことしたら可哀想じゃないかな？」
「これを見ても、そんなことが言えるか？」

冬夜は、いまだギプスで厚く固められた左腕を差し出した。すると二人は渋い表情で閉口する。それを見て、冬夜は時計に目をやり、カウントを再開する。

あと三十秒　そこまで数えたとき、冬夜の背筋を悪寒が抜けていった。視界に何か映つたわけでもなく、何かの音を耳が捉えたわけでもなく、直感がただただ告げる。あいつが来る、と。

冬夜は流れていく冷や汗を止めることができなかつた。何故だと自問しても状況が変わることはない。覚悟を決めて、この場にやつてきたはずなのに、今更逃げたいという衝動に駆られていた。

「何で、こんなときに限つて時間を……ッ！」
苦虫を噛み潰したかのように顔を盛大に歪めて、冬夜は恐る恐る振り返つた。

「やあ、皆揃つてるんだね、お待たせ」
そこには底抜けの明るさで微笑む男の姿があつた。

*

緋斗の到着で四人が揃った。冬夜の心境に立って言うならば、揃ってしまった。ならば、揃ってしまったものは仕方がない。冬夜は切り替える。

「とりあえず、どこか入らないか？」

この炎天下で涼やかな笑顔を維持する緋斗を一瞥して、冬夜は提案した。緋斗は怪訝そうに首を傾げたが、かなみと彩華の支持を得て、四人は移動することになった。とは言え、涼しかったら、それでよいと考えていた緋斗を除く三名は、すぐ近くに喫茶店を見つけると、誰も反対することはなかった。まだ午前中なので、店の内部は混んでいない。常連らしき男が一人だけいて、店員と楽しそうに話していたが、四人が入ってくるのを見ると口をつぐんだ。四人が席につくと、店員は速やかに冷とお絞りを四つ並べた。

「決まったら、また呼びます」

冬夜が言うと、一礼して店員は元の位置へと戻っていった。

「何を頼んでくれてもいいよ」

相変わらず爽やかな笑みを浮かべたまま緋斗は言った。それに対し、かなみはやや引きつった笑みを浮かべ、彩華に至っては露骨に疑するような視線を向けていた。冬夜は言わずもがな。不機嫌そうに、そっぽを向いている。

あの日、緋斗に全力で頭を下げられた冬夜は困惑を通り越し、混乱の極みに達しかけた。そこで取り乱さなかったのは、逃亡生活中に訓練されたが故だろう。冷静な判断を下せなければ、そこで終わる。そう言い聞かせて、暴れる心臓を鎮め、現状を把握し、判断を下してきた。そのために彼の逃亡生活は数年に渡った。数年も逃げ続けながらも、犯行を増やし、警官の手から逃げ続けたことを考えれば、それがどれほど凄いことだったか分かるだろう。

ともかく、冬夜は緋斗の言葉を反芻し、頭を働かせた。

「断る」

その答えに行き着くまで、五秒とかならなかった。当然だ 冬夜は呆れたようにため息をついて、緋斗を一瞥した。しかし、相変わらず頭を下げ続けたまま、ぴくりとも動かない。そんな彼を放つて、冬夜は席を立った。もちろん、そのまま帰るつもりだった。

（休日に関の用事で呼ばれたかと思えば……ッ!?）

冬夜の体が不自然に固まった。左肩がみしりと嫌な音を立てる。それに冷や汗を流しながら、冬夜はゆっくりと振り返った。

「ちょ、待ってよ！ 紹介してくれるだけでいいんだ！ 頼むって！」

目じりに涙を溜めて縋り付いてくる、その姿に冬夜の頬は不気味に引きつった。嘲笑と苦笑を混ぜ合わせたような笑みだった。

「……離せ」

冬夜は奥歯をかみ締めながら唸るように言った。掴まれた左肩の痛みに耐えながら、何とか声をひねり出したのだ。折れてはいない。しかし、今にも握り潰されそうなほどの力で骨は悲鳴を上げていた。

「……やだ、受けてくれるまで」

「子供か、てめえ!？」

珍しく語気を荒げた冬夜。しかし、そんな彼を涙目でじっと見つめたままの緋斗は、その力を緩めることはない。

そんな彼を見て、冬夜は大げさにため息をつく。

「離したら受けてやるよ」

「そ、その手には騙されないぞ！ 今まで何度、そうやって騙されてきたことか……」

経験済みかよ、と思わず突っ込みを入れようとした冬夜だったが、緋斗の込める力が強まり、それが声となることはなかった。

その代わりに骨がみしりと嫌な音を立てた。ひびぐらい入ったかもしれない。それと同時に冬夜の中で何かが切れた。ここまで抑えていた感情がついに臨界点を突破してしまい、殺意が冬夜を満た

していく。

「て、めえ」

冬夜の唸るように搾り出した声を聞いて、緋斗ははっと顔を上げた。

「俺の左腕を機能停止にただけでは、気が済まないと言っても言うのか？」

言葉を紡ぐ冬夜。しかし、その目は血走り、右手はゆっくりとポケットへと向かっていた。

「ぼ、僕は負けないぞ！」

やや震える声で緋斗は答えた。それを聞いた瞬間、冬夜のポケットから鈍く輝く物を取り出した。黒田から奪い、現在は冬夜が愛用しているナイフだった。本当はいつか返そうと思っていたのだが、武器が無いことへの不安が、それを拒んでいる。

「上等だ……そろそろ決着つけようぜ」

時を遡る前に一度、そして戻ってから一度 二度も手を合わせておきながら、二人は一度も決着らしい決着がついていなかった。

勝てるかどうか それはやはり疑問に思わざるをえないが、それでも冬夜は負ける気はしなかった。

（武器があり、体調が万全なら、全ての攻撃を躲した上で一撃必殺を放り込んでやる）

喉をかき切るか、それとも心臓にナイフを突き立てるか 多々のビジョンを脳裏に思い描きながら、冬夜は右手でナイフを構えた。それを視界に映した緋斗は驚愕で大きく目を見開く。

「え、ちよ……」

「喧嘩を売ったのはお前だからな」

何故か躊躇する緋斗に警告して、冬夜はナイフを振った。しかし、左肩を掴まれた状態では、上手く体を動かすこともできず、緋斗が距離を取ると、あっさりと躲されてしまった。

上手く距離を取って、体勢を立て直した緋斗は汗をだらだらと流しながら、冬夜を見つめた。

「ちょ、場所！　ここ、どこだか分かって、やってる!？」

その言葉で、少し冷静になるう　そう考えた瞬間、冬夜の顔は引きつった。喧騒に包まれていたはずの店内は、いつの間にか不自然な静けさが支配していた。恐る恐る冬夜は周囲を見渡す。店員、客、それらの視線の全てが冬夜と緋斗に向けられていた。

そして冬夜は無言のまま、緋斗を見やった。すると緋斗は少し安心した様子で、静かに頷いた。それに対し、冬夜はどうしたものかと頭を働かせた。

とは言え、必死に考えても取り繕えそうになかった。冬夜はナイフをポケットにしまうと、伝票を持ってレジに向かう。その背を無言で、緋斗がついてきた。代金は何故か緋斗が全て出した。彼なりに申し訳ない気持ちがあるのかもしれない　そう思ったけど、店を出た途端、緋斗の放った言葉で全ては台無しになった。

「じゃあ、頼むよ!」

「何故そうなる。俺がいつ承諾した？」

「えー、奢ってやったじゃん」

そう言っ唇を尖らせる緋斗に対し、冬夜は右手だけで器用に財布を取り出した。

「そこまで嫌なのは、何か理由でもあるのかい？」

お金を取り出そうとした冬夜の手が止まった。理由　それは数え切れないほどある。

「まず、お前みたいなのは危ない奴と出会うのなんて避けたい。それに、あの二人を危険に晒すのも不本意だ。第一何なんだ、お前のその力は？　人じゃねえよ」

無意識に、かなみを守ろうとしていることに冬夜は気づくことはなかった。もう何年も人を想う心を忘れていた彼は、そんなシンプルな感情ですら気づくことができなかった。

冬夜が言い切っ振り返ると、地面に膝をついてうな垂れる緋斗の姿があった。

「人じゃないって……　本当に君は全身凶器だねえ、言葉ですら僕の

心を切り刻むとは……」

悲しげにぶつぶつと言っている緋斗を一瞥して、冬夜はその場を去ろうとした。しかし

「分かった、そっちまで行くよ」

それを聞いて、冬夜の足はぴたりと止まる。そして、凄まじい勢いで、緋斗の方に振り返った。

「今、何て言った？」

再び荒れ狂う感情を抑えるのに、冬夜は必死だった。本当にこの場で決着をつけてやるうか　そんな考えが頭を過ぎったが、一瞬にして棄却する。先ほどは無鉄砲に走ってしまったが、冷静になると勝算のない戦闘をしても無駄だと考えたのだ。

それにしても緋斗が再び訪れる　それを聞いて、冬夜の背筋を戦慄と恐怖が同時に通り抜け、震えた。住所は知らないだろうから、恐らく彼が訪れるのは学校だろう。ただでさえ、最近は目立ち、先生方からも目をつけられている冬夜からすれば、最も避けたいことだった。

(どうすればいい?)

冷静に頭を働かせても、妙案が思い浮かぶことはなかった。ただ、じつと緋斗を見つめていると、彼は不思議そうに首を傾げた。

恐らく、こいつに来るなど言っても、聞きはしないだろう　冬夜はもはや承諾する以外に方法がないことを悟り、大きくため息をついた。それは諦めを示すものだった。

「……分かった、二人には取り次いでおく」
いつ襲来されるか分からない恐怖を抱えるぐらいなら、こちらから向うべきだ　そう考えたのだ。

そんな冬夜の苦悩を知らず、緋斗はしばらく呆然と冬夜を見つめていたが、やがて盛大な笑みを炸裂させて飛び跳ねた。

そんな緋斗の様子をぼんやりと見つめる冬夜は、ただただ呆れることしかできなかつた。

*

「でね」

相変わらず楽しそうに話す緋斗の声　しかし、それが冬夜の耳に届くことはなかった。否、正しく言うなら届いているのだが、それに気を遣っている余裕がなかった。そして反対側の席に座っているかなみの苦笑や彩華の不機嫌そうな様子ですら、今は冬夜の思考の端にすら存在しなかった。

定期的に向けられる、じつとりとした視線が冬夜を苛んでいたのだ。相手は恐らく一人、そして尾行に長けている人物だろう。最初は冬夜ほど視線に敏感でなければ気づけないほど、些細な変化だった。ただ、それに一度気づいてしまえば、相手との距離、力量など大体のことは分かってしまう。何故なら、分からなければ冬夜自身が捕まってしまうからだ。

そんな冬夜も最初は尾行に気づけず、何度も捕まりそうになった。ただ、それを繰り返す内に五感研ぎ澄まされ、ほんの僅かな変化ですら捉えるほどに至った。

しかし、相手の意図が分からなかった。何故、自分が　そう思った時に、まさかと冬夜は顔を上げた。ここにいる自分を含めた四人　冬夜、かなみ、彩華、そして緋斗。この中で一番の候補は誰か、と気づいた時点で答えは出たようなものだった。

(こいつか……)

隣で相変わらず楽しそうに話し続ける緋斗を一瞥して、冬夜は小さくため息をついた。ただ、ここで「何で尾行されてるんだ？」と緋斗に問い詰めるわけにはいかない。それをしてしまえば、自分の異質をかなみと彩華も知ることになる。とは言え、彩華は冬夜の異質さに薄々気づいていたが。

ともかく、冬夜は黙って、尾行者の観察を続けた。冬夜たちが店に入ってから、訪れた客は合計で七名　その内、四名は路肩の仕事していきそうな屈強な体格に作業服を羽織った男が四人、そして優

しい顔立ちの老夫婦の二人、最後に入ってきた黒い帽子に、黒いス
ーツ、真っ黒のサングラスをかけた怪しいの権化のような男。これ
ほど簡単に特定できていいものだろうか　その容易さが逆に冬夜
を惑わせる。

冷静に考えれば、こんなところに男四人で入ってきたのも、意外
と変だと思えただろう。しかし、あの男の印象があまりにも強すぎ
た。そして、時折向けられる視線を辿っていけば、その男に行き着
いてしまい、冬夜は呆れ果てて脱力してしまった。

「あからさますぎるだろう……」

天井を仰ぎ見ながら、冬夜は静かに呟いた。尾行がいくら上手で
も、あの格好で全てを台無しにしている。してやったりと思つより
も、呆れが先立った。

「ん、何が？」

それを緋斗が拾い、疑問を口にした。それに「何でもない」と答
えて、冬夜は視線を正面に戻した。そこで首を傾げることになる。
何故なら、やたら興奮した彩華と目をキラキラと輝かせたかなみ
の姿があつたからだ。しかし、冬夜が理解する前に、緋斗が言う。

「なら、早速行こうか」

「うん、行こう！」

元氣よく立ち上がり、彩華が言った。

(あれ、この子、こんなテンションだったのだろうか?)

理解に苦しむ冬夜は、ただただ首を傾げるばかりだった。そんな
冬夜を露知らず、かなみも勢いよく立ち上がった。

「うん、行きましょう！」

完全に話を聞き流していた冬夜は状況を解せず、啞然と三名を見
やった。自分が考え事をしている間に何が起こった　そう思わず
るを得なかつた。

「ほら、行くよ」

そんな冬夜を引きずって、緋斗はレジへと向かう。そこで代金を
すべて払った緋斗は爽やかな笑顔で言う。

「さあ、デパートへ出発だ！」

「おー！」

揃うかなみと彩華の掛け声に、冬夜の脳内は疑問で埋め尽くされつつあった。もはや、成り行きを見守ればいいか、と諦めて冬夜は元氣よく進む三人の後に続いた。

約束の日(中)

彩華と緋斗は相変わらず楽しそうに話しながら前に行く。あれほど嫌がっていた彼女のこの変貌を冬夜は理解できなかった。その後続く、かなみの肩を軽く叩くと、彼女は振り返った。

「どうしたの？」

「あれ、どうなってるんだ？」

冬夜は声を小さくして、彩華を指差した。ただ、それだけの質問なのに、かなみは理解したらしく、苦笑を漏らす。

「何でも買ってあげるよって緋斗さんが言うから、彩華は試すつもりで最新のパソコンを言ってみただけど、まったく問題ないって答えたから舞い上がっちゃってるんだよ」

それを聞いて、冬夜は苦い表情で黙り込んでしまった。そして、ちらとかなみに視線を向ける。

「まさか、お前も」

「そ、そんなことないってば！」

慌てて否定するかなみを訝しみながら、冬夜は小さく息を吐いた。「二人で何をこそこそしてるの？ 早く行くよー！」

駅で出会ったときの、あの低いテンションはどこへ行った。冬夜はそれを口に出すことはなかった。

間もなくして、地元では最大手のデパートが視界に映った。最大手と言われるだけのことはあり、周囲の建物より倍ほど背が高く、その看板は目立つことこの上ない。そのせいか、見上げると首が痛い距離まで行くと、明らかに人の密度が高くなった。休日と言うこともあり、随分と子供も多い。あちらこちらで子供たちがはしゃいでいる姿が目についた。

それを微笑ましく見守る親の姿を見て、冬夜の胸はずきりと痛んだ。いつでも自分を見守り、いざと言う時はその身を挺してまで守ってくれた両親。それに応えることもせず、心労ばかりを煩わせ

た以前の自分を思うと、気が重くなつた。逃亡生活中は、怒りや恨み、興奮がそれらを紛らわせていたのかもしれない。平和な日常に戻り、余裕を取り戻したせいも、ここで初めて自分の犯してきた罪を再認識し、酷く後悔した。

何があつても、お前の味方だ　　そう言つてくれた父を裏切り、母の信頼に応えることもなく、自分は全てを捨てて逃げ出した。そう、あれは逃げだった。ただ、ひたすら逃げ続けた。弱い自分から、辛い現状から、それでも優しく接してくれた家族に対して罪悪感を抱き、それから逃げたのであつた。

「だ、大丈夫？」

声で現実に引き戻された冬夜は、自分が地面に右手と膝をついていることに気づいた。額から冷たい汗がとめどなく流れてくる。ゆつくりと顔を上げると、かなみが心配そうに覗き込んでいた。

周囲からの訝るような視線を背中を感じながら、冬夜はゆつくりと立ち上がった。その際も、かなみは冬夜の肩を掴んで離さなかつた。

「大丈夫、ちょっと立ち眩みがしただけだ」

そう言つても、かなみは相変わらず険しい表情で冬夜の顔を覗きこんでいた。

「吐き気とかはない？　もしかすると熱射病　　」

「それはない、大丈夫だ」

「……そう？」

まだ心配そうだったが、かなみは冬夜の肩から手を離す。それを少し名残惜しく思いながらも、冬夜は前の二人を見やった。

「悪い、行こう」

周囲の視線から逃げるように冬夜は足を進めた。

「どうしたんだい？」

隣に行く緋斗が尋ねたが、冬夜は無視をした。その間にデパートの入り口をくぐり、店内図に目をやる。

「……やっぱり、少し休んでくる。三人は買い物を楽しんでくれ。」

俺は一階の飲食フロアで待ってるから」

「え、なら私も」

かなみが後についてこようとしたが、そこで冬夜は制止する。そして緋斗を見やって言う。

「二人を頼むぜ」

「ん、分かった」

本当に分かったのだろうか。不安で仕方なかったが、ここは任せるしかない。冬夜は強引にかなみを緋斗に預けて、三人の姿が見えなくなるまで、その場で見送った。

そのまま入り口の前で待っていると、先ほど喫茶店で見かけた男が四人だけでなく、更に増殖してデパートに入ってきた。それぞれが大きな鞆を手にし、どこことなく緊張感を感じさせる面持ちをしていた。それに違和感を覚えながらも、冬夜は無視する。それよりも先に片付けることがあったからだ。

「さて、その黒いの」

その直後に現れたのは、あの喫茶店で一人で佇んでいた全身黒尽くめの男だ。

男は冬夜の呼びかけで、ぴたりと足を止めた。そして彼は冬夜を見やった。サングラス越しでも分かる強い視線が冬夜を射抜く。しかし、それに怯むことなく、冬夜は男に言う。

「用件は分かってるよな。とりあえず、お茶でもしながら、ゆっくり話そうぜ？」

奥にある飲食フロアを指差しながら、冬夜は不敵に笑んだ。

「断る。何を勘違いしているのか知らないが、ガキに付き合っている時間は無い」

男は冬夜を一瞥して、三人の後を追おうとする。しかし、それを冬夜が遮った。

「あれだけ後を付回しておいて、シラを切るのか？」

ポケットから携帯電話を取り出して、冬夜は笑みを深くした。

「警察を呼んでも、僕はまったく構わないんだけどね」

「俺も構わんが」

男は鼻で笑い、大げさに肩を竦めた。はったりかと冬夜は一瞬考えたが、それにしても返答が早かった。ので、恐らく本当に呼ばれても問題ないと考えているのだろう。

「……とにかく、俺はあんたを見逃すつもりはないぜ？」

それに対し、露骨に嫌な顔をし、男は舌打ちを漏らす。

「面倒くさい……こつちは仕事」

男の言葉を遮ったのは、館内に響いた乾いた音。それは冬夜にとって聞きなれた音だった。しかし、何故それが今聞こえてきたのかは、さっぱり理解できなかった。ただ、起きてはならぬことが起きてしまったことだけは瞬時に理解した。

「クソ、お前なんかの相手をしていたから！」

男はあからさまに苛立つて叫び、続ける。

「お前らなんて尾行してねえよ。お前らのうちの一人、玖月の後を追う男たちを尾行してたんだよ！　こうなることを未然に防ぐためにな、クソ！」

男の言葉に愕然とした冬夜は、まさかと小さく呟いた。

町を歩いている最中も時折向けられた不特定多数の敵意を含んだ視線。それこそ、まさに冬夜たちを追っていた者だったのではないだろうか。冬夜は、その考えを無意識の内に削除してしまっていた。かなみと彩華、二人の美少女が視線を集めることは不自然なことではないし、それに同行している自分や緋斗が敵意を向けられることは当然だと考えていたからだ。

ましてや、そこまで強烈な敵意を向けられたわけではなかったのだ、警戒するほどのことではないと切り捨てていたのだ。

そうではない。恐らく彼らが敵意を向けていたのは、緋斗だったのだろう。彼に向けられた強烈な敵意を、少し離れた位置で冬夜は感じていたのだろう。

「ち、くしょう」

なら緋斗に預けた二人が危ない。その考えに辿り着いた時、冬

夜は自分のものとは思えないほど低い声を聞いた。喉から捻り出しても、こんな声は聞いたことがなかった。

そして、同時に装備を確認する。右のポケットにナイフが抜き身のまま、無造作にしまわれていた。その位置を直し、いつでも取り出せる位置に直しながら、冬夜は音源の方に全力で駆けていった。冬夜は一体何に腹を立てているのか分からなくなりつつあった。

あの紛らわしい男に対してか、事件を呼び込む緋斗に対してか、それともこんな凡ミスをしでかした自分に対してか。恐らく自分に対してが一番大きかっただろう。そんな冷静な思考をしながら、走り続ける冬夜は、すぐに黒尽くめの男を視界に捉えた。

「おい、一体やつらは何者なんだ？」

男のペースに合わせてると、やや遅く感じたが、冬夜は情報収集のために堪えた。

「詳しくは俺も知らん、ただ奴らは玖月 緋斗を狙っているらしい。だから、護衛してくれと言う依頼だった」

走りながらも、全く息を切らしていない男。恐らく全力で走っていないのだろう。並走する冬夜は、それに少し感心した。

全力で走って、いざと言う時に息切れしていたのでは話にならない。その点、男は自分の力量を正確に把握し、力の分配をしっかりと行っているのだろう。その冷静な判断は確かに敬服するが、体力に余裕のある冬夜はその遅さに、やや苛立った。

それはトレーニングを今も尚続けているが故だろう。腕にギプスをはめたまま走るの、やや辛い、それでも彼はトレーニングを続けていた。流石に両手で腕立て伏せはできず、右手のみで行っているが。

「あなたは警官か？」

それで男が領けば、警察を呼んでも構わないと言った理由に説明がつく。そう思って尋ねたのだが、男は首を横に振った。

「今はただの探偵だ」

つまり、元警官ってことか。冬夜は静かに頷いた。

「おい、お前ら止まれ！」

走り続ける二人の耳に、はっきりと声が届いた。二人が視線を前に向けると、ハンドガンを手にした男が遠くから叫んでいた。それを見て、隣の男は足を緩めた。しかし

「お、おい!？」

黒尽くめは驚きの声を漏らした。

「と、止まれって言うてるだろうが！」

男は銃を構えた。それでも冬夜は足を止めない。凶悪な笑みを浮かべたまま銃を構える男に向かって、疾走する。その間も冬夜はじつと銃の向き、トリガーに掛かる指、腕の筋肉を凝視していた。それらから、少しでも情報を得て、先に動くために。

実際に弾が発射されてから、反応していたのでは遅い。それは逃亡生活中に学んだことだった。だから、冬夜は予備動作を見抜き、それらから軌道を予測し、早めに動いて弾を躲していたのだ。

この時も僅かに動いた腕の筋肉から、まもなくトリガーが引かれることを察知し、更に向けられた銃口から弾の軌道を予測し、その身を抜った。その直後、乾いた音が鼓膜を盛大に揺らす。冬夜は怯むことなく進む。弾丸も冬夜の身を捉える事はなく、どこかに当たって盛大な破砕音を響かせた。その間に、男は銃口を構え直す。その前に冬夜はまた弾の軌道から、その身を外す。一度撃たせた後は、二度目の標準を合わせさせずに仕留める。それが冬夜の対遠距離の戦術だった。

「く、来るな」

焦る男と冬夜の距離はもうほとんど無かった。冬夜は更に一步踏み込み、相手の懐に入る。

「……弱すぎ」

ナイフを取り出すこともなく、冬夜の右の拳が男の頬を捉えた。男は大きく仰け反って、受身も取らずに床に転がった。その時に銃が床を滑ってゆく。冬夜は駆けてきた勢いのまま銃の下に向かい、それを手に取った。二、三度それを握って、観察してみたが、しば

らくして冬夜はため息をつく。

「……やっぱりに手に馴染まん、銃は」

そうは思っても、この場に銃を放置していくわけにはいかず、冬夜は困った表情で床に這いつくばっている男を一瞥した。この男が意識を取り戻したときに、再び銃を手に向かってくる可能性は否定できない。だからと言って、こんな物を持っていても仕方がないと言うより、冬夜にとっては邪魔でしかなかった。

そこで啞然とした様子で、冬夜を見つめていた黒い男と目が合った。その瞬間、冬夜にとって良いアイデアが思い浮かび、男の下までゆつくりと足を進めた。

「そう言えば、元警官だったっけ。使う？」

冬夜が銃を差し出しても、男は相変わらず大きく目を剥いたまま微動だにしない。

「お前は一体……」

辛うじて男はそれだけ言った。未だ驚愕の抜け切らない男に対して、冬夜は盛大にため息をつく。

「今はそんなこと気にしてる場合じゃないだろう。俺みたいな強力な助っ人がいるんだ、さっさと片付けてしまおうぜ」

冬夜が盛大に笑むと、男は顔を引きつらせた。そして彼は冬夜の差し出した銃を手に取り、言う。

「そうだな……よろしく頼むぜ、助っ人さんよ」

大人の意地を張られて、「出しゃばるな」など言われたら、冬夜は自由な行動が取り難くなっていただろう。その点、この男は柔軟な思考で助かる。それを表情に出すことはなかったが、冬夜は心ひそかに安堵していた。

「まあ一時的とは言え、助っ人を頼むんだから、名乗っておこう。

俺は盃と言っ」

「……俺は名乗らないぞ」

冬夜は憮然と答えた。何故なら、この場で名乗って後々付回されることは避けたかったからだ。緋斗の件で大いに反省した冬夜は、

何があっても名乗るつもりは無かった。たとえ、ここで協力を拒まれたならば、冬夜は一人で解決に向けて動くつもりだ。しかし、冬夜の予想は良い方向に裏切られ、盃は関心したように頷いた。

「まあいい、とりあえずは現状を何とかしないとな」

話の分かる男で助かったと言っ思いは、冬夜の中でさらに強まった。

「そうだな、さっさと済ませて、お互いおうちに帰ろうぜ」

盃に銃を手渡した冬夜は、階段を駆け上っていった。その後にく盃が尋ねる。

「それにしても緋斗たちが、どこにいるのか分かっているのか？」

「知らん、ただ雰囲気に分かるだろう。あいつが目的なら、そのあたりは異質な空間になっているはずだ。他の場所より緊張感が漂うと言っか……まあそんな感じだ」

冬夜の答えに、渋い顔をしながらも盃は頷いた。恐らく彼自身も緋斗の位置を特定する術を持たないために、冬夜の意見に賛同せざるを得なかったのだろう。

それ以上、盃は何も言わなかった。恐らく尋ねたいことは、それこそ山のようにあつただろう。しかし、どれを聞いても、答えてくれない。そう考えていたのだろう。そして、それは正解だ。冬夜は自分のことに関しては何一つ教えるつもりはなかった。それは先ほども言ったとおり、後々の生活に響いてくると厄介であつたからだ。

二人は無言のまま階段を駆け上がっていく。二人の足音だけが階段に響き渡っていた。冬夜も最初は極力足音を消していた。しかし、盃はそういった術を持っていないようで、盛大に足音を響かせていた。それを見て、無駄だと悟つたのか、今では音を消すより速く進むことに重きを置いている。

本当に協力して良かったのだろうか。冬夜は一瞬迷つたが、その考を振り払つた。迷いは、足枷となり、命取りになる。今はこんな些細な迷いを抱いている場合ではない。一刻も早く二人を助ける

その中に緋斗はもちろん入っていないかった。

(むしろ、死んでればいいのにな)

冬夜は無表情のまま、そんなことを考えていた。その思いに偽りは無い。あんな化け物とは金輪際、付き合いたくなかったのだ。ただ平和に学校生活を過ごせれば良かったのに、緋斗はそれを乱した。その思いは何度も「殺したい」という言葉になって出てきた。もし、今後もあの男と付き合うならば、腕が治り次第、殺す。本気でそう考えていた。

しかし、今はそんなことより二人の身が心配だった。かなみと彩華はこちら側に来るべきではない。二人には静かで明るい未来が待っているはずなのだ。そこまで考えて、冬夜はふと嫌な考えに囚われた。

(生きることは……楽しいことなのか?)

その考えにたどり着いたのは、まだ冬夜が小学生の頃だった。

人生は作業　　なのに周囲の同級生は目を爛々と輝かせて、将来の夢を語った。まだスポーツ選手などなら理解できた。しかし、サラリーマンと嬉々と答える彼らのことは全く理解できなかった。

その身を作業に費やして何が楽しいのか　　冬夜は一切理解できなかったのだ。そもそも人が生きようと思えることも、彼は理解できなかつた。

その思いは中学生になるころには、冬夜のベースとなり、彼は日々をただ鬱々と過ごすようになったのだ。

(で、上村に目をつけられて……まあいい)

人が何故生きようと思えるのかは分からない。分からないからこそ、冬夜は知りたいたいのかもしれない。だから、それを教えてくれそうな人に自身を曝け出したのかもしれない　　かなみに。

文化祭の時、あれほど話してしまったことに疑問を抱いていた彼は、思わぬところで答えに辿りついた。

(そうか……俺は知りたいたいのか、人が生きる理由を)

脱力していた拳に力が戻る。ただただ階段を上る作業を続けてい

た冬夜は、その先を見据えた。

「失つてなるものか」

冬夜は静かに呟いて、絶対に助けると心に誓った。それを本当の理由だと考えている冬夜は、その胸中に宿る想いを無視していることに気づかない。ただ、かなみを守り、一緒にいたいと言う想いは、別の理由で上書きされていくのであった。

約束の日（後）

階段を駆け上る冬夜の耳が、三度目の乾いた音が捉えた。そう遠くない距離から聞こえた、それに冬夜は緊張感を高め、ペースを落とすと同時に足音を消し去った。そして、盃に並び、声を潜めて言う。

「ここからは隠密行動だ、足音をできるかぎり消せ」

「……分かった」

まだ高校生の冬夜に指示されても、盃はただただ頷いてみせた。それは、やはり対銃との戦闘を見せたことが大きな要因となっていた。盃は、この少年に逆らうことは得策でない　そう考えていたのだ。

階段を上りきった二人は身を潜めたまま、近くのフロアを覗き見た。

「……ここじゃないな、上に行こう」

「下という可能性は？」

盃の言葉に、冬夜は呆れたように答える。

「音源は明らかに上からだった」

それだけで理由は充分だったようで、盃は静かに頷いた。

また一つ上のフロアに移動して、覗き見る。その瞬間、乾いた音が連続して響いた。それはハンドガンとは思えないほどの連続した音だった。

「一体どこで、そんな武器を仕入れたんだよ」

「恐らく、大きな企業がバックについているのかもしれない……玖月が倒れば、競合会社は一気に勢力を伸ばすことができるからな」

「……競合会社？」

玖月のことを一切知らない冬夜は、聞きなれない言葉に首を傾げた。いつしか、銃声は止んで、その代わりにいくらかの悲鳴が届いた。

「知らなかったのか？ あいつは玖月グループの御曹司だぞ？」
今度は盃が意外そうに言った。しかし、冬夜は聞いたことが無かった。

「へえ……そこって凄いの？」

フロアの様子を慎重に伺いながら、冬夜は何となく尋ねた。

「先月、潰れかけたホールディングスグループから、一部の事業を買い取ったぐらいには資金力はある。恐らくだが、ここまでは資金を稼いで、これから事業を拡大していくんだろう……まあ俺はそこまで経済とか経営に詳しいわけじゃないから、あまり分からないけどな」

「警官だしね」

「元、な」

なるほど、と冬夜は相槌を打った。あの男の羽振りの良さは、そういう裏づけがあったのかと心ひそかに納得したのであった。

「で、どこぞやから人質にでもして、玖月グループを脅そうって話か」

「恐らく」

それを聞いて、冬夜は思わず深いため息をついた。性格はともかく、見た目は良いし、その上大企業の御曹司と来た。その上、徒手空拳では馬鹿げた力を発揮するし、冬夜は自分のステータスと比べて、思わず苦笑が漏れた。

（元殺人鬼が勝てるのは、殺害数ぐらいかね……）

そんな皮肉めいた思考を振り払って、冬夜はフロアに踏み込んだ。その後にくく盃は問う

「ここなのか？」

「恐らく、な」

身をかめたまま二人は足を進める。僅かだが、遠くから響いてくる怒声を頼りに冬夜たちはフロアを進んだ。障害物が多いために、索敵にも見づかりづらいただろう。それに敵は恐らく素人が多い。そう冬夜は踏んでいた。

もし相手が銃の扱いに長けたプロなら、最初の一戦でもっと苦労していたはずだったからだ。彼らは銃の有効範囲から敵が出てしまえば、逃げるか、徒手空拳で迎え撃つか、どちらから切り替えていただろう。なのに、あの男は最後まで銃にこだわった。否、依存していたと言っべきか。そこから一人ひとりの戦闘力はそう高くないと容易に導き出したのであった。

冬夜は自らの服の擦れる音にすら気を遣い、ゆっくりと進んだ。しかし、後ろに続く盃がそれを台無しにする。それにやや呆れたように息を吐きながらも、冬夜は諦めて進み続けた。

「死んでいるだろう」

冬夜の耳に鮮明に届いた言葉は、彼の体を硬直させた。恐らく、先ほどの銃声で誰かを撃つたのだろう。それでも冬夜は慎重に進み続ける。彼も誰が撃たれたのか気になって仕方が無かったが、それでここまでの潜入を無駄にするほど愚かではなかった。

「流石に化け物でも、これだけ撃てば　ひっ!？」

恐らく撃つた仲間の声だろう。それは途中で悲鳴と変わる。この場合だと、死んだと思っていた死体が僅かに動いたりしたのだ、と冬夜は想像した。死んでも体は動くことはある　それは何度も人を殺してきた冬夜にとっては常識なので、さほど驚くことではなかった。そこで冬夜は彼らが素人であることを更に確信することができた。

しかし

「つたく、せつかくの服が穴だらけの血だらけだよ。どうしてくれるの?」

水溜りに足を突っ込んだような音　水というより、やや粘着性の強い何かが跳ねるような音を立てて、誰かが答えた。その声はどこか息苦しそうで、肺を撃たれているのかもしれない。

しかし、そんなことは冬夜の驚くべきところでなかった。

(服がずたずたで、血だらけなのに何故、平然と喋れるんだ?)

声の主が誰なのか　冬夜はそれに見当がついていた。恐らくと

言わず、確信が持てた。撃たれたのは緋斗だ。ただ撃たれたというのに、彼は何故痛みがりもせず、服の心配をしたのか。そこだけは理解できなかった。

「まったく……こんだけやられると体もすぐ治らないよ。」

当然だ、と冬夜は思う。次の一言を聞くまでは

「たぶん……一日ぐらいかかるかなあ？」

「……は？」

思わず冬夜は声を漏らした。

「本当に馬鹿か、あいつは。銃創が一日やそこらで治るわけないだろう。」

撃たれた経験が幾度もある冬夜は吐き捨てるように言った。しかし、その声が届くことは無い。そんな冬夜の想いを無視して、話は続く。

「なるほど……ウワサは本当のようすな。玖月グループの頂点に君臨する男は『永遠の命』と呼ばれる化け物だと耳にしてはいましたか。」

「そんな格好の良い呼び方されると照れ。」

緋斗の言葉を遮るように、再び連続した銃声が響き渡った。今度は先ほどより長く、冬夜はその隙に一気に距離を縮めた。物陰に隠れて様子を伺うと、三人の男が小銃を構えて乱射しているところだった。

「アサルトライフルはハンドガンと違って、連射が利くから厄介だなあ……。」

冬夜が呟くと、その後ろに続いていた盃が言う。

「いや、あれはサブマシンガンの類だと思う。まあ俺も詳しくは知らんが。」

「あんた、何にも知らないな。」

冬夜が一瞥すると、盃は渋い表情で閉口した。

とは言え、何であろうと厄介な相手であることは間違いなかった。そして連射が止んだ。冬夜と盃は物陰に全身を隠し、音で様子を伺

った。

「だ、から……かぶつ、やめて……ほしいんだけどね、本当に治りが遅くなるから」

最初はたどたどしかった言葉が、後半になるに連れて滑らかになっていく。それは、この瞬間も回復を続けているかのような変な錯覚を植えつけられて、冬夜の背筋を戦慄が抜けていった。

まさか、と思う。しかし、その思いを拭い去ることはできなかった。そんなことが、そんな人がいてたまるものか　その思いを否定したい一心で、冬夜は様子を僅かに覗き見た。

やはり銃を構えた三人の男、そしてそれに向かい合って立っているのは血だらけの緋斗だった。顔は血だらけで、片目は瞑っている。もしかすると被弾したのかもしれないが、この距離では分からなかった。

それよりも酷かったのは胸から下腹部の辺りだった。もはや赤くないところなどない。ところどころ白い何かかむき出しになった骨だと理解するまで、少し時間を要した。緋斗はその身にどれほどの弾丸を受けたのか、もはや想像すらつかない。冬夜は、そんな状態で生きている彼が信じられなかった。

その身は戦慄と恐怖で地面に縫い付けられたかのように、動かなくなっていた。恐怖で身が竦むのは、とても久しぶりの感覚だったが、やはりいい心地がしない　そんなことを冷静に考えながら、じつと見つめていた。

その視界の端に、冬夜は二人の少女を捉えた。緋斗から随分と離れた位置におり、流れ弾が彼女らを襲うことはなかったようで、二人に外傷は無かった。しかし、顔を真っ青にして身を寄せ合っている様子を見て、冬夜の体に力が戻った。

（二人を早く助けなければ）

冬夜が中腰になった瞬間、銃を構えていた男がそれを下ろした。

「これでは、やはりダメか……準備してきて正解だったな」

男が胸元から取り出したそれを見て、流石の緋斗も顔を引きつら

せた。

「それは……無いんじゃないかな？ だって周りの人も」

「お前の周りにいたことを恨むんだな」

手のひらサイズの黒い塊を、男は両手で包み込んだ。

「ま、待」

緋斗の制止も聞かずに男はピンを抜いて、それを放り投げた。それを冬夜と盃はただただ見つめていた。しかし、次の瞬間には冬夜は体を引かれて、その身は物陰に隠れてしまった。

カン、と高い音が響き渡った。

「耳を塞げ！」

冬夜は盃の言葉に従うことができなかった。次の瞬間には訪れるであろう大きな衝撃と爆音に備えて、盃は伏せた。

しかし、それが訪れることは無かった。少しくぐもった爆音が少し響いただけで、冬夜の聴覚は何事も無く、それを聞いていた。その直度、再び響き渡る絶叫。それは聞き覚えのある声だった。冬夜は身を隠すこともせず、ふらりと立ち上がった。

視界に広がった光景は凄まじかった。爆心地に覆いかぶさるようにして玖月の体があったが、その両手は無かった。床は一面、血に濡れ、今も尚その勢力を広げていた。あちらこちらに飛び散った血肉が放つ焦げたような臭いが鼻を突いた。

その奥を見やると、かなみと彩華は無事だった。かなみは意識を失っているのか、彩華にその身を預けている。それでも二人が無事であることを確認すると、冬夜は再び緋斗に視線を戻した。

「おい、貴様。何をしている！」

男たちが冬夜に向けて銃を構えた。しかし、彼はそれを一瞥もすることなく、緋斗を見つめていた。

「お前は……守った、のか？」

死ねばいいと思っていた。いつかは殺してやろうと考えていた。

そのはずなのに、この胸に去来した、この思いは一体何なのだろうか。冬夜は、その身を焦がすような感情に、ただただ体を震わせ

た。

「おい、動くな！」

男の言葉を見殺し、冬夜は一步また一步と緋斗に近づいてゆく。撃たれる危険性をひしひしと感じながらも、冬夜はその足を止めなかつた。

「……おい、ぼうず。そいつの友達か、何かか？」

先ほど先頭で話していたリーダーらしき男が尋ねた。しかし、冬夜は首を横に振った。

「そんなワケないだろう。こいつとは二度も殺しあつたよ。それに、いつか殺してやりたいと何度も考えたよ」

冬夜は自分でも何を言っているのか分からなくなっていた。嬉しいのか、悲しいのか、怒りたいのか、笑いたいのか、全てが混ざり合つたような感情に満たされ、そこで気づく。

（俺は悲しくも感じているのか？）

そつと手を伸ばし、既に絶命して居るであろう緋斗の体に触れようとした。しかし、その手はそこで止まった。

「……もう少し、役に立ってくれ」

冬夜は緋斗の髪を掴んで、自分の前に持ち上げた。そして三人の男に向かって、足を進める。

「どういふつもりだ、ぼうず」

「対銃の際、死体を盾にすればいいんだと思いつきました」

冬夜は僅かに笑みながら答えた。その笑みは、見る人にぞつとする何かを与える。

「……撃て」

「行け！」

リーダーの男と、冬夜が同時に叫んだ。その瞬間、緋斗はその足で男に向かって走り出した。

「なっ！？」

戸惑う三人は銃の発射が、一瞬遅れた。その隙に冬夜は緋斗の背後でびたりとついてゆく。ポケットからナイフを取り出して構えた

瞬間には三人との距離は無に等しいかった。緋斗の影から飛び出した冬夜は、一人に絞ってナイフを振った。男は銃口を向ける間もなく、喉もとを裂かれる。しかし、冬夜はそこで止めない。トドメだと言わんばかりに、首筋に強くナイフを突き立てた。すると男はその身から力を失い、ゆっくりと倒れていく。深く刺さったナイフは抜けず、冬夜はそれを諦め、手放した。迷いなく次の動作に移った冬夜は、リーダー格の男との距離を一瞬で詰め、左手を思いつき振りかぶった。それを男の頭に振り落とすと、鈍い音と振動が骨まで伝わり、冬夜の左腕に痛みが走ったが、それで止まることなく、がくりと膝の折れた男に右手を突き刺した。

その刹那、男の絶叫が響き渡った。冬夜は右手を抜くと、そこには白い球体が握られていた。それを捨てると冬夜は、右目のあたりを押さえて、うずくった男の後頭部に蹴りを放った。殺意を込めた一撃で、男は床にだらしなく倒れこんだ。

もう一人は　冬夜は周囲を見渡して、その姿を探した。すると緋斗に首筋を噛み千切られて、痙攣していた。

「……本当に化け物だな」

「……そう言うなよ。案外、痛いんだからさ」

いつの間にか、顔の傷が元に戻っている緋斗が苦しげに呻いた。

正体 変化

「……お前って一体何なんだ？」

あれから一週間が経った。盃の証言もあり、無事に正当防衛が成立しそうな冬夜は、病室で静かに尋ねた。夏特有の熱気をはらんだ空気が窓から流れ込んできて、冬夜は流れる汗を拭いた。日陰とは言え、この時期はじっとしていても汗ばんでくる。

「面会謝絶が解けた途端、やってきたと思えば……そんなこと聞きの来たの？」

いつになく呆れたような表情で緋斗は言った。あれから緋斗は、一週間ほど面会謝絶になっていたが、本日ようやくそれが解けたのだ。

それを聞いて、冬夜は学校が終わって即座に飛んできた。それはその身を案じたわけではなく、事後にお互いゆっくりと話す機会が無かったからだ。緋斗はすぐに救急車で運ばれていったし、その後を追うように冬夜も救急車に詰め込まれた。それは骨の砕けた左腕の処置のためだった。せつかく治りかけていた骨は再び割れて、治るまでの時間が更に延びたことは言うまでもない。

その後、緋斗が面会謝絶の間、冬夜は何度も警察署に行かなければならなかったために、お互いなかなか会う機会が無かったのだ。

「もちろん、それ以外には何も聞くことはないね」

パイプイスに腰掛けたまま、冬夜は足を組んだ。まるで立場が上なのは自分だと言わんばかりに、静かにため息を吐きながら。

「で、お前って一体何の化け物なの？」

「化け物は確定!？」

喚く緋斗の顔には一切傷が残っていないかった。片方の眼球は潰れていたと思うのだが、冬夜を見つめる、それはちゃんと二つある。

何より、あれほどの怪我が綺麗さっぱり消えるほどの時間は経っていない。これを化け物と呼ばずして何と呼ぼうか 冬夜は小さ

く笑いを漏らした。

「いや、あれだけのことをすれば人は普通に死ぬって」

「……まあ僕も若干、死を覚悟したよ」

それは恐らく手榴弾を抱え込んだ時のころだろう。緋斗は文字通り、その身を挺して周囲の守った。それに関しては、冬夜も素直に感謝を述べる。

「ああ、そのお陰で被害は最小限だったし、感謝している。だけど、それとこれは別だ」

「べ、別って……」

緋斗はがっくりとうなだれたが、冬夜は諦めるつもりがないらしく、じつとパイプイスに腰掛けたまま緋斗を見つめていた。

それを見て、緋斗は諦めたようにため息をついて口を開いた。

「見てのとおりだし、君の言うとおりだよ……僕は人でなしさ」

「具体的にどう違うんだ？」

「回復力さ」

緋斗は悲しげに自らの秘密を語ってゆく。

「見たる？　そして、これ見て分かるだろう？　僕の体の回復力は常人の数万倍なんだってさ。だから、その身を一瞬で木っ端微塵にでもしなければ、僕はダメージと同時に回復を続けるために、なかなか死なないように思われるんだ」

恐ろしいほどの馬鹿力が能力だと思っていた冬夜は少し驚いたが、それと同時に納得もできた。

「つまり、そのお前の怪力は、その力の副産物なのか？」

「まあね……結構不便だけど、超回復が早いから、その分人より早く筋力を身につけることができる　最初はそれぐらいの軽さで考えていたんだけど、どうやら僕の体はもっとヤバイらしい」

「何故？」

冬夜が尋ねると、緋斗は説明を続ける。

「回復するのは、肉だけでなく骨もなんだ。つまり、骨格や筋肉の負担を考慮する必要がないんだよ。自分の力で傷つける程度だと一

瞬で治ってしまうから……その結果、どうなったと思う？」

「そうか、あの力……リミッターの必要が無くなった、のか」

「そう」

緋斗は少し嬉しそうに答えた。

「そのせいで、僕は自身の力を無意識に制御するシステムを失ったんだ。まだ、これがあつたなら人外と呼ばれるほどの力を得ることもなかったんだけどね」

自分で「人外」と言つて、苦笑を漏らす緋斗。その姿がどこか悲しげで、冬夜は顔をしかめた。それは同じように悲しみを覚えたことを隠すための仮面であつたが、冬夜自身もそれに気づくことは無かつた。

「そっか……納得した。またな」

それを聞き終えると、冬夜はパイプイスから腰を上げた。

「え、ちよ、本当にその話だけ！？ 確かに僕が提案したけど、容赦なく僕を盾にして、拳句の果てに後ろから僕を蹴つて、一人の相手させて……つて聞いているの!？」

緋斗は驚愕と怒りに打ち震え、その身を勢いよく起こした。

あの時、冬夜が取つた行動は緋斗の指示だったのだ

「僕を……盾に使えばいいよ」

冬夜がボロボロの緋斗に手を伸ばした時、彼は僅かに残つた声帯で言葉を搾り出した。その声はとても小さく、近くにいた冬夜にか聞こえなかつた。しかし、それを聞いて、生きていることを理解しながらも、冬夜は彼を盾にした。何故なら

「僕は……この程度で死なないから」

その後が続いた緋斗の言葉を信じたからだ。その瞬間、冬夜は彼を信じ、盾にした。あの瞬間、確かに二人は協力して、敵を倒したのであつた。

「だから、お前が言つたんだらう……それに俺の言葉の意味を、も

「う少しちゃんと考えてみる」

「は？」

緋斗は首を傾げながら、ベッドの上であぐらをかいた。しかし、答えに辿り着きそうにない緋斗を見て、ため息をつきながら冬夜は病室を後にした。緋斗の何か叫んでいるような声が聞こえたが、冬夜は無視した。しかし、その表情はどことなく柔らかい。

「言つたらう、感謝している、って……」

かなみと彩華を、その身を挺して　それこそ命を危険に晒してまで救ってくれた緋斗。彼に対して抱いていた悪いイメージなど、あれで払拭されてしまった。そして残ったのは、暖かい感情だった。「思ったより危ないヤツじゃないと思うしな……だから　」

冬夜は病室の方を振り返って、静かに言う。

「またな」

そつと独り言を残して、冬夜は病院を後にした。

予告。

その昔 否、現在の冬夜からすれば、過去になるのだろうか。適切な表現があるとすれば、それは『時が遡る前』、一人の男は言う。

「あいつ、邪魔だよな」

部屋の中は薄暗い。現代に置いて必須と言っても過言ではない蛍光灯は、その役目を果たすこともなく、無残に割れていた。それを片手で振り回しながら、男は続けて口を開く。

「僕ら三人だけで充分でしょ？ そう思うよね、『停滞』？」

その呼びかけに、部屋の隅でうずくまっていた影が僅かに揺れた。動きそのものが、面倒くさいと訴えかけているような緩慢な動きであったが、確かに頷いた。しかし、それもただ面倒くさかったが故に、頷いただけかもしれない。それ以上は『停滞』と呼ばれた者は動かなかった。息すらも潜めて、闇に溶け込んでいった。

ただ男は満足だったようで、口から漏れる僅かな吐息は笑みをかみ殺しているようであった。

「ということだ、『再生』。ちょっと、あいつ殺してこいよ」

*

「なあ……お前は生きてて楽しいか？」

「君は楽しくないのか？」

「さあ、よく分からん……否、分からなかったと言うべきか」

「今は分かるのか？」

「……何となく。守りたい人つてのができたとき、人は変わるモンなんだな、と思い知らされたよ」

「ふうん……素敵な話だね」

「まあ、守るにしていれば、汚れすぎた手だけだな」

*

結局、俺は殺し合いの運命から逃れることはできないのか？
ただ、守りたかっただけなのに。

予告 (後書き)

そろそろ更新、そうやって自身を追い詰めることにした。

その日の朝

すぐ目の前に光り輝く世界がある。一步踏み出し、手を伸ばせば届く距離だ。しかし、冬夜はぼんやりと見つめているだけで、微動だにしない。

それは何故か　冬夜はゆっくりと振り返る。そこには漆黒の闇が広がっていた。背にした光が吞まれてしまうほどの深い闇の中には、蠢く何かが存在した。

その何かは、絶え間なく音を発し続けている。音と言うよりも声だろうか。まるで人のうめき声のようだと考えながら、冬夜は闇を見据える。その顔は一切の感情が見えず、闇の中で蠢く何かを見定めるためか、じっと見つめていた。

「　　け　　か？」

そのとき、冬夜は初めて音を声として認識し、ぴくりと眉が動いた。先ほどまでは、どれだけ耳をそばだてても、無数の声が混ざり合った雑音にしか聞こえなかった。しかし、ここにきて音が統一性を持ち始めたのだ。

それらが何を言っているのか、冬夜は既に知っていた。肩を竦め、盛大なため息をつきながら、やれやれと言わんばかりに首を横に振る。

「用があるなら、さっさと済ませてくれ。もう行くぜ？」

冬夜の軽い口調に、闇が膨れ上がった。それらは確実に光に向かって進行　つまり、冬夜を呑み込みまんと襲い掛かってくる。しかし、それに勢いはない。酷くのろのろとした進行で、冬夜は嘲笑うかのように口角を吊り上げた。

「大体、この時系列じゃ、お前らまだ死んでないだろうに。それともアレか？　元の世界で死んだ魂まで、俺と一緒にタイムスリップしてきたのか？　だとしたら、随分と熱心……と言うか、御執心なことだぜ」

冬夜は笑い声を抑えることもせず、闇に語り続けた。すると予想通り、闇は更に膨張し、もはや声にならない絶叫を発し続けた。音とは空気の振動だ。しかし、普段それを感じることは少ない。ただ、このときは違った。闇から放たれる絶叫は冬夜の全身を叩いた。思わず一歩後ずさってしまふほどの咆哮に、冬夜は僅かに眉をひそめ、耳を塞いだ。

「あーうるさいうるさい。まったく、俺に執心してる間があったら、さっさと何かに生まれ変わってこいよ。これだから怨霊ってやつは」
そういつて冬夜は闇に背を向ける。自分に向かつてくる闇を気にする様子もなく、すたすたと光へと足を進める。闇と冬夜の進行速度の差は明らかだった。のろのろと動く闇に対し、冬夜は軽快に進んでいく。しかし、闇は確実に光を駆逐し、飲み込んでいった。

「まあ、あれだ。これだけは言っておく」

光まであと数歩、そこで足を止めた冬夜は振り返って口を開く。

「お前らが、そのままこっちに来るんだったら、俺は容赦しないぜ？ たとえ、実体のない幽霊だったり、怪奇現象だったり、得体の知れない化け物だったりしても、俺はお前らを消し去る術を見つけて、絶対に壊してやる。人を壊すよりは気に病む必要も無い、気楽な作業だ。それでもお前らは俺についてくるのか？」

冬夜の語りかけに対し、返事はない。ただ闇は進行をもって、自らの意思を示す。それを見て、冬夜は笑みを零す。それが強がりか、それとも本心から来る笑みかは、本人のみぞ知る。

「そうかそうか。なら、俺はこっちで待ってるぜ、いつでもかかってきな」

それだけ言い残すと、冬夜は再び闇に背を向ける。そして先ほどよりも軽い調子でステップを刻む。その後ろ姿は、まばゆい光の中に消えていく。それでも闇は、光を少しずつ呑みこんでいきながら、冬夜に迫るのであった。

*

「まったく……ここまでついてきやがるのか？」

血を零したような朝焼けの光が、冬夜の目に突き刺さる。今日は雨になるのだろうか、と小さく漏らしながら冬夜は身を起こした。どうと言う事はない、彼自身も分かっていた。

寝起きの体を軽く捻り、筋肉を伸ばす。すると、小骨も鳴り、心地よい感覚が広がった。今日と明日は休息日、日々のハードなトレーニングで傷ついた筋肉を癒すために設けたのだ。

ただ左腕の怪我が癒える頃には、左右のバランスが酷いことになっているだろう。昨日も仕方なく、右腕だけで色々なトレーニングを行ったせいか、筋肉がパンパンに張っている。少し痛みを感じながら右腕を伸ばし、冬夜は結論を静かに呟く。

「所詮は夢だ」

「……一人でぶつぶつと気持ち悪い」

まさか反応が返ってくるとは思ってもせず、冬夜はゆっくりと首を振った。こきりと首の骨が鳴り、小気味の良い感触を僅かに残してゆく。

そして視界に映ったのは、妹の姿。既に制服に着替えていた夏樹は、訝しむように冬夜を見つめていた。

「朝ごはん、できたよ」

「分かった、ありがとう」

冬夜は腹筋を収縮させて、膝を胸まで引き付ける。そして一瞬で背筋に力を込め、反動も使って体を跳ね上げさせた。足からの着地を上手に決めた冬夜は、首筋に伝う汗を拭う。冷や汗ではない、初夏を感じさせる日差しに自然と汗が流れてきたのだ。

今日は一学期の最後の日、終業式だ。成績表を受け取り、校長や風紀にやかましい先生のありがたいお言葉を長々と聞かなければならない。どうしても無意味な時間だと思えてしまう。

小さくため息を漏らす冬夜は、そこで気づく。まだ、夏樹がじつとこちらを見つめていることに。いつもなら顔を合わせることで

すら、嫌だと言わんばかりに去っていくのに。

「どうかしたか？」

「いや……部活に入らなかった割には意外と体、動くのね」

冬夜も僅かに眉をひそめた。先ほど、身を起こした際のことを言っているのだろうか。

「あれぐらいできて当然だろう？」

「……私できないのに」

「ん、何か言ったか？」

「なんでもない！」

どこことなく立腹な様子で去っていく夏樹に、意味が分からんと首を傾げる冬夜。しかし、以前なら会話すらも無かった二人。確実に変化が訪れていることに、冬夜の心はざわめく。

「変化つてのは、しんどいんだよな」

取り残された冬夜は苦い表情で頭を掻く。しかし、いつまでもゆっくりとしているわけにはいかない。タオルで汗を拭い、着替えを済ませると、冬夜も階段を下りていった。

これが日常。緋斗の事件からおおよそ一週間。今日で緋斗は面会謝絶が解ける。あの怪我。と言うか、砕かれ具合、潰れ具合から考えると、本当に化け物じみた回復力だと言わざるを得まい。とは言え、色々と尋ねたいことのある冬夜にとっては都合が良い。あまり気にすることも無く、朝の支度を整えると、冬夜は蒸し暑い夏空の下へと踏み出した。

朝のせいかわ、まだ風はぬるく過ぎやすい。ただ既にこの気温だと昼になったら、どうなるのだろうか。そう思うと憂鬱になる。午前中で終業式を終えて、帰宅する頃には太陽は真上に昇り、地表を焦がす。先生方も少しは時間割を考えてくれないものか、と冬夜は小さく零した。

しかし、空を見上げれば、西の方角からゆっくりと厚い雲が流れ込んできていた。それは、どう見ても雨を降らすようにしか見えな、い、そんな黒い雲だった。

(傘、持ってきてないな)

冬夜はじつと雲を見つめた。黒塊は風に流され、確実にこちらに迫ってきている。それを眺めながら、冬夜は呟く。

「面倒くさい」

雨が降っても降らなくても、冬夜にとっては厄介なことではない。雨が降れば帰りが困る。それに気温が下がったとしても、代わりに湿度が上がって不快な暑さになるだろう。もし、雨が降らなければ、と考えて、ふと冬夜は思う。雲だけやってきて雨が降らなければ、直射日光は遮られて、そこそこ過ごしやすくなる。そうなればベストだ。

しかし、そこで急に態度を変えたりしないのが、冬夜だった。

「まあどつちでもいい……ただな」

冬夜は深々とため息をつきながら、前方を見やった。そこには見慣れた学校の正門 ではなくった。

人の流れが止まっている。この時間なら、次々と正門に人が飲み込まれていく光景を目にできるはずだ。しかし、まるで正門に何かが詰まっているかのように、人が溢れかえっていた。それにしても制服の集団とは何とも威圧感があるな、と冬夜は今更思う。黒い服の集団はざわめき、時折教師の怒鳴り声のようなものも耳に届く。

「早速か」

自然と漏れた苦笑を隠すこともせず、冬夜は小さく呟いた。時を越えてまで、冬夜に付き纏う怨霊たちの仕業だろうか。元々は非科学的なことを信じないタイプであったが、今朝見た夢の影響が大きいのだろう。そんな柄にも無いことを考えながらも、冬夜は自転車を下りて、迷いなく足を進める。来るなら来い、と言わんばかりに。そもそも夢があつたから今の事象が起きたのではなく、事象が起こるから夢を見たのかもしれない。どうしても夢を見た後だったために妙な先入観を無視できなかつたが、冷静な思考を取り戻すと、そんな風にも思えた。つまり、正夢ではなく、予知夢だったと言う線だ。しかし、自分に事前に未来を知る手など無い。大筋は知って

いる。ただ、それも少しずつ変化してきていて、当てにならないのが現状だ。今も然り。

以前の歴史において、この時期に何かがあったような覚えはない。静かに学校に行つて、終業式を無心で過ごし、通知簿を受け取つて歸つただけだつたはずだ。

だつたはずなのに

「一度帰宅しなさい！ 早く！」

怒鳴り声が鮮明に聞こえる距離にまで、冬夜はやってきていた。しかし、冬夜は進行方向を変えようとしない。興奮で息を荒くする同級生や、真つ青な顔に覚束ない足取りで人ごみから抜け出てくる女子生徒を見やりながら、あまり良いことが起きていないことを理解する。

人だかりに差し掛かるまでに自転車を止めて、そこからは徒歩で掻き分けていく。柄の悪い先輩に睨まれたりもしたが、そんなのはお構いなしと進んでいく。

そして冬夜は人ごみを抜け、視界が開けた。そこにあつたのは、どこかで見たような自転車。そして、その横に広がる真つ赤な湖。思わず朝焼けを思い出すほどの鮮明な赤。見慣れた赤。その横には見慣れない女子生徒と思しき体があつた。服装は女子の制服だ。しかし、頭部がない。ただ、それを見た冬夜の背筋を抜けていったのは、痺れるような感覚だつた。もはや冷たいと感じれない、痛みを覚えるほどの強烈な冷気が、冬夜の背骨を通じて全身に広がつた。

あれは。

まさか、と思う。

認めたくはない。

しかし、冬夜は咳かすにはいられなかつた。

「……西浦？」

二件目（前書き）

グロいかもなので注意願います。

二件目

正門の前に首切り死体　その件について言及されることはなかったが、とある事情にて本日は休校、自宅待機との連絡が冬夜の下にも回ってきた。どうやら被害者はかなみでなかったようだ。それを聞いて、冬夜は胸を撫で下ろし、安堵の息を漏らした。

その後、自宅待機を軽やかに破って、冬夜は町へ出た。目的は緋斗だ。そこでいくらか話をして家に帰ってくると時刻は十三時、まだ昼を回ったばかりだった。

どうしたものか、と冬夜は考えた末に、もう一度事件の情報を整理してみることにした。ともかく、被害者はかなみではない。それは先ほど電話で確認を取った。どうやら第一発見者がかなみのようで、先ほどまで警察から色々と事情を聞かれていたらしい。

そして死体に首が無い、と言うこと。

これはかなみから聞いたのだが、近くのおせ道で首が発見されたらしい。一体何のために首を切り落としたのか。その昔、同級生の首を切り、校門に晒したという事件があったが、それともどこか違う。

また死体を見たときの違和感だ。首が無かった。しかし、それ以外に目立った外傷が無かったのだ。服の下まで見たわけではないので、詳しくは分からない。それも、かなみに聞けば知っていたかもしれない。ただ、震える声で話すかなみに、そんなことを尋ねられなかった。自分で調べるしかない、と冬夜はテレビのニュースを見続けた。すると案の定、頭部切断以外に死因に繋がるような外傷は今のところ見当たらない、とのことだった。

こんなときだけはマスコミも役に立つものだ、と苦い笑みを浮かべながら、冬夜はヘリコプターから撮られた母校の姿を眺めていた。今も正門の辺りには青いビニールシートが張り巡らされており、何が行われているのか、よく分からなかった。

被害者は同じ高校の同級生だった。しかし、聞いたこともない名前だったので、冬夜にとっては他人事であった。

それから数日で、冬夜は興味を失いつつあった。そして、そのまま夏休みへと突入してしまう。結局、終業式が行われることもなく、通知簿などは先生が一人ひとりの家を回り、届けることとなった。生徒の状態を確認するためでもあったのだろう。

こうして、大半の生徒たちは事件の全貌を知らぬまま、夏休みを迎えることになった。朝早く起きる必要もないのだが、冬夜は習慣で五時には目が覚める。窓から赤い日差しが差し込み、冬夜の瞳を刺激した。それに、やや顔をしかめながらも、冬夜は身を起こす。

「……さて」

しんと静まり返った部屋の中の空気を、冬夜の言葉が揺らした。特に意味は無い。

やや、ぼんやりと宙を眺めていた冬夜であったが、大きく息を吸い込み、両手を天井に向けて伸ばす。いつものように体を伸ばすと、骨が軋み、小気味の良い音を奏でた。次いで大きく息を吐き、脱力する。そのままストレッチに移行し、寝起きで硬い体をほぐしてゆく。

それが日課になっている。しかし、こうも毎日トレーニングに勤しむ姿が、昔の自身と重なり思わず苦笑が漏れる。

（そう言えば、やる事が無かったせいで、ずっとトレーニングしてたな）

主に上村らの執拗な暴力を苦に、早々に学歴を諦めると、冬夜は学校に足を運ばなくなった。家の自室で、パソコンに向かい合う日々。しかし、そこに充足感はなく、時間を潰すただけに淡々と作業を繰り返すだけであった。

そんな冬夜に向けられる視線は、冷たいものが多かった。当初は母親も何とかしようと努力していたが、時を経ると冬夜への干渉は少なくなっていく。父親とは顔すら合わせることもなかった。夏樹は冬夜をいないものとして扱う。もはや家族にすら諦められたの

であった。

しかし、冬夜がそれらを気にすることはなかった。何故なら、彼自身が既に自身のことを見限っていたからだ。

どうせ何も出来やしない。生きていたって仕方が無い。もはや死んだ方がマシだ。

そんな思考が冬夜の中で浮かび上がる。しかし、そこに苦痛は無い。既に諦めはついていたからだ。

むしろ、唐突に事故死でもできるなら。また、病気で余命を宣告されたなら。そんなことをぼんやりと考えながら、有り余る時間を潰すためだけに思考を費やした。

そうして、ようやく冬夜の下に静寂が訪れた。しかし、それも間もなくして壊れることになる。

高校に入学した夏樹が、上村と付き合い始めたのだ。その結果、冬夜がようやく確保した安息の地が再び脅かされることになる。

上村が訪れる際は、夏樹から話しかけられる。それは珍しいことだ。日ごろは冬夜のことを完全に空気扱いするのに、この時だけは軽蔑の眼差しと共に夏樹は言う。

「部屋から出ないでよね」

それだけだった。冬夜の返事も待たずに、夏樹はさっさと部屋に消えてゆく。そして冬夜もそれに従った。上村のような会いたくもない相手がやってきて、誰が嬉々として顔を出すものか。むしろ、迷惑だと冬夜は心の奥底でざわめく感情を必死に抑えた。

それからも週に二、三度は地獄の日が訪れる。その度に冬夜は腹の底から湧き上がる感情を持て余した。狂う一歩手前であることは自覚していた。そこから逃げ出そうと、冬夜は上村が訪れる日は家を出ることにした。最初は特に考えることは無かった。時間を稼ぐために、夜道をぼんやりと歩き、時間を潰すだけであった。しかし、思ったよりも、その行為が気持ちの良いことだと冬夜は気づく。

季節は冬。パソコンの廃棄熱に満たされた部屋から出ると、肌を刺すような寒気が全身に襲い掛かる。すぐさま部屋へと引き返した

い衝動も訪れるが、悪魔がやってきて地獄と化すこの場所から逃れられるのであれば、それに耐えることは容易であった。

持ち物は至ってシンプル。小銭の入った財布と家の鍵、そして腕時計だけだった。余計な物を持って出て、恐喝などに遭ったら面倒だと考えた故だ。

闇夜に伸びて解けてゆく黒いアスファルトを踏みしめ、ぼんやりと歩いてゆく。時折、首から入ってくる冷気に震えながらも、冬夜は家から離れていった。等間隔で置かれている街灯だけが光源で、自動車ですら通らない。ひっそりとした町並みを、ひたすら無心で歩き続けた。手前にある街灯と違って、遠くの光はか細く、深い闇に呑まれそうだった。一筋の光が闇を切り裂き、辺りを照らすなんて耳にすることもある。しかし、結局は数や強さが物を言う。陽光はその強さが故に、全体を照らすことができるだけだ。小さな光は闇に呑まれる運命にある。それは僅かな希望にすぎることすら許されないように思えた。

だとすれば、弱者はどうすればいい？

冬夜は空を見上げながら思う。悲しさ、苦しさ、怒り。そう言った感情は無かった。純粹な疑問。これからも死ねない自分はどうかすればいいのだろう、と冬夜は不思議そうに首を傾げる。

人は生まれた環境に大きく左右される。しかし、元からの強弱は存在するのではないだろうか。もし、そうならば自分は確実に弱者だろう。強くなることは無理だ。強くなることのできたのは、元々が強くなる要素があったと言うことだ。同じどん底に落とされても、そこから這い上げられる人とそのまま諦める人の二種類がある。どん底を味わい、そこから這い上がって強くなれた人は、そういうことなのだ。ならば冬夜は完全に後者だろう。それを自覚した上でむしろ、自覚したからこそ自身の可能性や将来、活きることを諦めることができた。唯一、諦めることができなかつたのは生きることだけであった。どうしても自ら死ぬことだけはできなかつた。そんな自分が嫌いだった頃もあった。しかし、それですら諦めて、いつ

しか忘却することに成功していた。

ふうと吐く息は白い。普段は見えない息がはつきりと見えるのに、湧き上がった疑問に対する答えが明確に現れることはなかった。

見上げ続けている空には、綺麗な星空が広がっていた。無駄な灯りが無く、星の輝きが鮮明に映る。結局、僅かな希望を見出すためには、その環境も必要なのかもしれない。そんな答えに一つ息を吐きながら、冬夜はぼんやりと足を進めた。

上村が家に訪れるたびに、冬夜はそれを繰り返した。その内に歩くのではなく、軽く走る日もあった。もちろん何か目的があるわけではなく、ただの気分だった。しかし、思いのほか体を動かすことが心地よいことに気づき、冬夜は走ることを日課に加えるようになっていった。どうせならとパソコンの前でも有り余らせていた時間をトレーニングに費やすようになった。弱かったはずの自分の体力が宿っていくのを感じ、冬夜はそれを続けるようになる。

そして冬夜は健全な少年へと戻ってゆく。

そうなれば、どれほど良かったのか。

その時では既に遅かった。諦めることが日常化し、当然となり、諦めていることにすら気づかない域に達していた。冬夜は既に壊れ、狂っていた。ただ、それらを行動に移す力が無いために諦めていただけであった。

しかし、冬夜は力を持ってしまった。上村を超える力を持ってたと確信できたとき、ついに冬夜は悪魔と化した。そして上村の事件をきっかけに殺人鬼となり果て、未曾有の事件を起こしていった。

走っている最中も脳裏に浮かんでくる数々の惨劇。それらは夏の早朝に似つかわしくない。常人なら見ているだけで、吐き気をもよおすだろう。しかし、冬夜がそれらを後悔することはなかった。今の自分が正常に戻ることができたのかですら気に留めない。これから先がどうなるかと知ったことではない。自分のやってきたことの結果を受け止めていくだけだ。冬夜は表情を崩すことなく、一定のペースで走り続ける。

結果的に変わればよい。しかし、努力してまで変わりたいとは思わない。ただ変わろうと努力しなければ、良い方向に変わることできないだろう。ならば、変わることを諦めよう。その程度で思考を打ち切り、冬夜はペースのコントロールに集中した。ややオーバーペースだったためか、心臓がかなり速いペースで拍動している。

否、実際はそれだけが原因ではない。以前と違って早朝に走っているためか、冬夜は遠くまで見通すことが出来た。左手には土手があり河川が広がっている。朝の日差しを浴びて、きらきらと輝く河川は美しい。冬夜も純粹に思った。

しかし、それを台無しにする無粋な物があつた。冬夜も最初は無視しようと思っていた。しかし、やがて諦めるように大きく息を吐くと、ペースを落として、ゆっくりと歩き出した。

「面倒臭い」

そう一言漏らすと、冬夜は雑草がすね辺りまで伸びた土手をざくざくと音を立てながら下ってゆく。冬夜の視線の先には、河辺の樹木に引っかけた浅黒い球体。それは川の流れに揺られ、今も樹木から逃れようとしているかのごとく足掻き続けている。それをすぐ見下ろせる位置までたどり着くと、冬夜は躊躇うことなく川に足を突っ込んだ。家に帰ったら、どうせシャワーを浴びるから問題は無い。ただ靴を洗うのが少し面倒だと後から悔いたが、済んだことは仕方が無い。川の流れは緩やかで冬夜は球体の下まで難なく辿り着くことができた。

そこにあつたのは年老いて禿げ上がった男の首があつた。目は眠そうに半開きになっており、安らかに死を受け入れているかのようで、冬夜は僅かに吐き気を覚えた。しかし、即座に違つと冬夜は否定する。

「恐らく死ぬと言う認識すらないままに殺されたんだろうな」

少ない髪を無造作に掴み、冬夜は生首を持ち上げる。血は流れきってしまったのか、滴ることは無い。代わりに川の水がぼたぼたと

水面に落ちていった。長い間、流されてきたのか顔は膨れ上がり、傷だらけだった。そして思ったより重い。目の前まで持ち上げていた手を下ろし、冬夜は土手の方に頭を放り投げた。

観察は充分だった。

「二件目か。まったく放っておけなくなったな、面倒臭いけど」

首は土手を転がり、冬夜の方に切り口を見せた。肉の部分は破れ、かなり歪になっている。しかし、骨の断面だけは違った。すっぽりと一太刀で斬り捨てられたかのごとく、綺麗な断面を維持していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2945o/>

代理者の慟哭【元：ひょうりばーす】

2011年9月29日03時22分発行